ISSN 0387-284 X

読書科学

第26巻 第2号（通巻 第100号）昭和57年 7 月 1 日 発 行（季刊）

第1部 100号記念号に寄せて
「読書科学」100号記念号に寄せて 阪本 一郎
四半世紀の軌跡に思うこと 滑川 道夫
読書および読書指導の思想 倉沢 栄吉
日本読書学会 望月 久貴
読書科学の25年 岡本 奎六
第2部 読書科学研究の25年
読書理論・読書指導を中心に 増田 信一
文学研究・教材論を中心に 出雲路 猛
1号から50号までの心理学的研究を中心に 阪本 敬彦
51号から99号までの心理学的研究を中心に 福沢 周亮
第3部 想い出と提言

100

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

第1部　100号記念号に寄せて

「読書科学」100号記念号に寄せて　日本読書学会名誉会長　阪本一郎　42

四半世紀の軌跡に思うこと　東京成徳短期大学　滑川道夫　46

読書および読書指導の思想——昭和50年前後——　文教大学　倉沢栄吉　51

日本読書学会——出発と進行——　創価大学　望月久貴　56

読書科学の25年——初期と会長時代を中心に——　成城大学　岡本奎六　61

第2部　読書科学研究の25年

——「読書科学」論文から見た読書科学研究史——

まえがき　67

読書科学研究の25年(Ⅰ)——読書理論・読書指導を中心に——

東京学芸大学附属大泉中学校　増田信一　68

読書科学研究の25年(Ⅱ)——文学研究・教材論を中心に

東京都新宿区立落合第四小学校　出雲路猛　77

読書科学研究の25年(Ⅲ)——1号から50号までの心理学的研究を中心に——

野間教育研究所　阪本敬彦　85

読書科学研究の25年(Ⅳ)——51号から99号までの心理学的研究を中心に——

筑波大学　福沢周亮　91

第3部　想い出と提言　103

日本読書学会役員（昭和57年4月1日～昭和59年3月31日）

会　長（理事長）	倉沢　栄吉			
副会長(副理事長)	阪本　敬彦			
常任理事	井上　尚美	岡本　奎六	滑川　道夫	福沢　周亮
	増田　信一	湊　吉正	村石　昭三	
理　事	井上　敏夫	出雲路　猛	岩坪　昭子	大村　はま
	尾原　淳夫	高木　和子	田近　洵一	野地　潤家
	深川　恒喜	室伏　武	望月　久貴	
監　事	平沢　薫	山本　晴雄		
編集委員	尾原　淳夫	阪本　敬彦	田近　洵一	野地　潤家
	福沢　周亮	増田　信一	村石　昭三	
	John Downing	Donald Leton		

第 1 部

100 号記念号に寄せて

「読書科学」100 号記念号に寄せて
日本読書学会名誉会長　阪本　一郎……42

四半世紀の軌跡に思うこと
東京成徳短期大学　滑川　道夫……46

読書および読書指導の思想
——昭和50年前後——
文教大学　倉沢　栄吉……51

日本読書学会
——出発と進行——
創価大学　望月　久貴……56

読書科学の 25 年
——初期と会長時代を中心に——
成城大学　岡本　奎六……61

[Part 1] On the Occasion of
the 100th Anniversary Issue of
"The Science of Reading"

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

「読書科学」100号記念号に寄せて*

日本読書学会名誉会長
阪　本　一　郎**

初代の会長　石山脩平氏が御存命であったら，この記事の冒頭に書いて頂くはずであるが，今は幽明界を異にしておられるので，やむを得ず年長者の私がトップをうけたまわることにした。

私は英語教師として，東京青山師範の教壇に立ったのが教職についた最初であった。その頃（昭和2～3年）は文部省の嘱託として英国から Harold E. Palmer 氏を招いて，新しい教授法を英語教師たちを集めて宣伝している最中であった。私もたしか九段中学校であったと思うが，そこに集って Palmer 氏の講演を聞いた中で，E. L. Thorndike 氏の Vocabulary Selection（語彙選択）の話が耳に残った。さっそく Thorndike 氏の著書の他「語彙選択」に関する文献を取り寄せてみたが，これが基本語彙の研究の病み付きになってしまった。

その後東京文理科大学に入学して，心理学を専攻したのも，日本の Thorndike になろうと大それた気を起したからであった。

と言うのは Ogden, C. K. 氏の Basic English (Kegan Paul) 1930 にならって，土居光知氏は『基礎日本語』1943を試作していた。これは日本語を1,000語に約めて表現できるように工夫したものであった。例えば「髪」は「頭の毛」，「眉」は「目の上の毛」，「額」は「顔の上の方」と表現し，とくに(1)同音異義の語を避け，(2)一語の読み方を一種に限り，(3)働きを表わす語はできる限り「し，する，すれ」と語尾の変化する語をとり，(4)書く文章と話すコトバとを同じにしたのであった。

この方法は，その根拠が論理的であり，精神活動の全内容を合理的に表現することができる反面に，語彙が人為的で自然でなく，したがって活社会の思考感動に直接し得ない欠点がある。つまりは作られた言語の社会が，これによって区画されているのであった。これに対して，自然にありのままの形態で語彙を捉えて，それらが社会において実際に活用されている頻度を調査し，頻度高く広く使用されているものは，低く狭いものよりも比較的多くその社会において思考し感動される精神現象を反映するものと見て，基本的価値を高く与えてゆこうとする統計的方法が行われていた。その代表的なものはコロンビア大学教授 Thorndike 氏の「The Teacher's Word Book, 1921」である。

これは小学校8年修了程度の児童の読書語彙として6種の資料から合計 4,565,000 語を集め，その中で同じ語の表われている頻度を数えて価値の指数(credit number)を与え，その指数3以上の語について5人の専門家の意見で重要でないと考えられた語を除いて，合計1万語を選定したものである。

彼はその後1932年に2万語表を発表しているが，調査語数を無限に増加しても，最初の最も重要な5,000語の中で，順位段階を移動すべき語は約350語ぐらいに過ぎないと言っている。

大正期の中頃に始まった Thorndike 氏の語彙調査と同じような研究は昭和10年頃までに私の見た範囲でも英語，フランス語，ドイツ語，スペイン語，中国語に渡り，二十数点に及んでいた。そこで日本語について私も研究してみようと思い立ったのである。ちょうど昭和時代の初期と言えば「興亜」精神が全国に横溢していた頃

* On the occasion of the 100th anniversary issue of "The Science of Reading."
** SAKAMOTO, Ichiro (Honorary President, Japan Reading Association)

で，大平洋戦争に突入する前の緊縛感にうなされていた時期であった。日本語についての調査がまだないということが私の若い頃の義憤を駆り立てたのであった。

そこで昭和9年の3月から，4名の夜間女子中学生を雇い，単語カードを書いてもらった。この前には資料として，(1)国定「修身書」（3年まで），(2)同「国語読本」（3年まで），(3)雑誌「幼年知識」（1年分），(4)同「コドモノクニ」（同），(5)同「小学1年生」（同），(6)同「小学2年生」（同），(7)同「小学3年生」（同），(8)同「幼年倶楽部」（同），(9)童謡集「白秋童謡集」他，(10)小学生全集（幼児向）の10種，127冊を収集してあった。つまり幼年の児童が読む本の見本として，この10種，127冊を選んでいたのである。

さて上記の全資料から得た語彙の総数は約193万であって，助詞・複語尾・存在詞等の単語として扱えない約59万を除いた約134万の単語カードは，同一の単語を重ねて行くと10,400枚の整理カードに圧縮された。そのうち頻度3以下のカードを除き，「幼年の基本語彙」を5,000語選んだものとして昭和18年に発表した。この9年間は明けても暮れてもカードの整理ばかりで，自宅の二階のガラス戸を閉め切って，夏などはパンツ一枚で奮戦した。私の家内はある時タバコの煙が充満している室の戸を明けたので，一陣の突風のためにカードが隣家の庭に飛び散ってしまい，これらを回収するため屋根瓦の上を這わせたこともあった。

私の所存では，今度の発表によって国語研究者たちの批判，とくに頻度と範囲との原理からする基本語彙の選定方法に対する批判を期待していたのであるが，ほとんど反響がなかった。と言うのも，当時のわが国は，世界の列強を相手にして苦戦している最中であったからであろうとみずから慰めていた。なお，これと同じ方法で小学校全学年の基本語彙と大人の標準基本語彙とを発表する積りであった。その準備はあらかた出来ているのであった。

その翌年，私は軍籍にあったので，臨時召集の令状を受けて，中国の南部奥漢線打通作戦に従軍させられてしまった。その前にシンガポールを攻略して占領したのであったが，海上の交通は艦船が沈められて自由にならず，陸路でシンガポールと連絡をするには奥漢線が唯一の通路となると言うので，この打通作戦には大きな期待がかけられていたのである。しかし多くの若い兵士を失っただけで，この作戦が成功するまで持ち切れず，全面降伏の大命が降下してしまった。その後は捕虜扱いで揚子江の九江附近で年を越し，ノミとシラミとマラリヤとを土産に昭和21年の夏に復員した。

復員の途中で一番気になったのは，残してきた基本語彙の資料が無事であるかどうかということであった。すでに東京の初空襲を知っていたが，その後度々の空襲で焼かれていると想像されるにつけても，私の資料は，鉄筋のコンクリート建築の学校の地下室に，リンゴ箱数十個に容れて，仕舞ってあるから，たぶん無事であろうと思っていた。

だが復員後用務員に聞いて見ると，学校は空襲を免れたけれども，その後はガスが止まり，教室の腰板を剝して燃料に使ううち，地下室にあった木箱を見付け，詰めてあった紙も皆燃やしてしまったと聞いて，落胆するより他はなかった。私も日軍官兵収容所の生活の中で寒気に耐えた記憶が新しかったからである。

さて等二次世界大戦が終って，再び平和が訪れたが，もう私には標準基本語彙の作製に取りかかる覇気は失せていた。それには後10年間，少くとも5年間はこれに専念しなければならないと思われるのであった。ところが終戦後アメリカから教育視察団が来日して種々の勧告を行なった中に，学校図書館の設置を義務付けるという1項があり，文部省では「学校図書館の手引」を編集することが決まった。私は『読書指導の研究』という著書を応召の直前（昭和19年）に書いていたので，その執筆者の1員に加えられた。それだけではなく，昭和23年に文部省の学校図書館協議会の委員(後に会長)に委嘱され，教育指導者長期講習（I.F.E.L.）の講師となって，学校図書館部門を受持たされた。このI.F.E.L.は3ヵ月ずつを1期として昭和25年の秋まで続き，第5回で終

った。そして昭和29年には全国学校図書館協議会の会長に選出され，地方出張が多くなって，基本語彙の問題から遠ざかってしまっていた。

われわれの日本読書学会を発起創立したのは昭和31年の9月1日であって，その頃の情勢と創立の趣旨は機関誌第1号に掲載してある。初代会長としての石山脩平氏はまことに適格の人物であったが，4年後に惜しまれて鬼籍にはいってしまわれた。

さて長く保留してあって夢見が悪かった基本語彙の研究に再び着手したのは昭和30年の1月であった。前述のように骨が折れ手間がかかる仕事を再開するには私も健康が許さず，余生が短くなっていた。そこで優秀な国語の研究家の意見調査に切り換えることにした。

その頃，中・高等学校で推選され，多く出版されていた国語辞典は，新村出氏編「言林」（全国書房刊，昭和27年）であった。この辞典には150,152語が収めてあった。これを10名の国語教育の研究家に配布して，「日本の国民の大部分が日常普通の生活を営むのに必要な語彙であって，義務教育修了までに理解できるようにならなければならないと判定されるもの」をチエックして頂くことを依頼した。さらに，(1)上記の第一次選定の結果と，(2)私の前に発表した『幼年語彙』，(3)田中久直氏が発表していた『小学校の国語教科書の語彙』，(4)国際文化振興会の『日本語基本語彙』(5)国立国語研究所の『語彙調査（現代新聞用語の一例)』を参考にして5名の大学教授の意見を徴して，次のように決定した。

小学校低学年語彙	小学校高学年語彙	中学校語彙
A1　2,500語	B1　2,500語	C1　2,500語
A2　2,500語	B2　2,500語	C2　2,500語
	B3　2,500語	C3　2,500語
		C4　2,500語
小計 5,000語	7,500語	10,000語
	合計　22,500語	

これは昭和33年8月に『教育基本語彙』として発表した。しかるに発行所の牧書店の社長が死亡し，以後はこの書を入手することが出来なくなっている。

またこれを受けて昭和37年に『語彙比重査定法』（読書科学19・20号）を開発した。これは小・中学向きに書かれた文章の難易度を語彙の上から診断しようとするもので，実用的に便利なものと思われたが，『教育基本語彙』の入手が困難になっている当時では，無用になってしまった。

不幸にして前に書いた『日本語基本語彙，幼年の部』は明治図書K.K.から出版してもらったが，その直後に敗戦のドサクサにまぎれて続刊が停止してしまい，次の『教育基本語彙』には『語彙比重査定法』を追加して一冊にまとめてもらったが，その直後に廃刊になってしまった。かくて私の40年間の初志は達成されないままで画餅に帰してしまったのである。しかし私はまだあきらめてしまってはいない。馬鹿の一つ覚えとののしられようとも，今度は絵本の研究者の参考にしてもらおうと，『6才児の親近語彙のリスト』2,368語を昭和52年に発表した。そしてこのリストにない語はなるべく使わないように，もし使うことが避けられない絵本には，絵で解説するようにと勤めてきた。例えば『軍艦鳥アウダ』という創作童話絵本の用語は大変むずかしいコトバを使っていて，「茜色・そびえたつ・よそ者・無法者・急降下・襲撃・正確・挑む・のろま・もんどりうつ・去る・王者・ゆとり・全速力・事件・自信・運命・衰える・オレンジ色」などの用語が無神経に使われていて，子どもが一人で読んでも何のことかは理解できないと思われた。

しかし子どもの使うコトバの意味は永久に変らないものではない。例えば「パチンコ」は二股の支軸にゴムを張り，小石などをはさんで飛ばす玩具であったが，現在はパチンコ屋に備えつけてある大人の射倖心を狙った遊具であり，またピストルの隠語に変っている。「メンコ」も円い武者絵を描いた子どもの玩具であったが，現在は漫画の主人公を描いた矩形の玩具となり，「ハジキ」もガラス製の子どもの玩具であったが，今では大人のピストルの隠語に使われている。

また社会情勢の変化によっても，コトバの意味が変わる。例えば戦争放棄によって，われらが幼時あこがれて

いた「陸・海軍大将」の「肩章」や「金モールの軍服」「サーベル」姿のアイドルが消え，種々の兵器名，軍隊用語が無くなった。また皇室の事を言うときの「アラセラレル」などの敬語表現がなくなった。また庶民の生活用語も「寝巻」が「パジャマ」に，「火ノシ」が「アイロン」に，「録音器」が「ラジ・カセ」に，「同盟罷業」が「スト」或いは「ストライキ」に，そして「紙細工」が「ペーパー・クラフト」に，カタカナ（外国語）表現が激増している。これに追い付いていかなければ基本語彙の研究はほとんど意味を失ってしまうであろう。

私が半世紀前に間接に師事した Thorndike 氏の時代は，一切を手工業で処理する時代であり，だからこそ基本語彙の研究も稀少価値があると考えられたのであったが，戦後はすべてコンピューターに記憶させ，これに計算させる時代になってきた。それにしても基本語彙の問題は消失したのではない。人間工学の上で，ますますその必要性は増しているとも考えられる。

しかしながら私も喜寿を越え，その研究を続行する精力も体力も衰えを見せはじめている。日本読書学会の創設の頃から大変お世話をしてくださった牧義雄氏の死去を悼み，『読書科学』も第 100 号が刊行できるまでに成長したことを報告して御冥福を祈る次第である。（当時は学術雑誌は小売店には置かないのが慣例であったが，牧氏はこれを強行してくれたという思出もある。）

さて自分の話に戻るが，私は若い研究者たちに基本語彙の問題を継続して，更にもっと便利な道具に発展させて頂くことを念願している。便利な道具というのは，誰でもが簡単に使え，しかも確実な情報が得られる利器のことである。私の作った基本語彙や親近語彙のリストはまだ便利さが足りないと自ら反省している。それに最近発行された国立国語研究所の報告書のように，収集した資料をナマのままで発表したようなものは，すぐ実際の役には立たない。国語研究所がナマの資料を発表する意志は理解できないことはないが，それをどう実際に生かすかのヒントを示さないのは不親切であろう。われわれの学会では，もっと親切な態度を取るべきであると信じている。

また私は各種の読書テストを試作してある。これらはアメリカで使っている主な読書テストに見ならって昭和30年前後に試作し，知能との相関を見るなど，当時必要と思われた検証の結果公表し，幸に各学校で好評を頂いたものであったが，もともとこれらは牧書店の中に阪本教育診断所を置いて同志と共に研究を重ねを結果であった。その後，金子書房に発行を移譲したが，もう20年以上も経っている。現在ではもうバッテリーが古くなっていて，診断には役立たないと思う。この読書テストを現代向きに改訂することが，私に残された課題であると思っている。

なお私は，子どもの読物の中の比喩表現に興味を持っている。例えば「赤ちゃんはもみじのような手をしている」「牛みたいな角が生える」「ラッパに似た笛を吹く」などという表現は，具体的に経験している事物の例をあげて，子どもに理解しやすい言い表わしかたであるが，子どもの見聞していない例をあげて「幽霊のような声」とか，「万雷の落ちるほどびっくりした」などと言うのはピントが狂っている。しかし「木が死ぬ」とか「花が笑う」などと擬人法を用いた表現は，子どもの場合は理解されるのではあるまいか。さいわい国立国語研究所の『比喩表現の理論と分類』（昭 52 年）が発表されたので，この問題を追求してみたいと思っている。

私は学芸図書K．K．の『私の読書学遍暦』（昭 52 年）の中で，日本読書学会の発起から経営の苦心談を披露してあるので，今回は自分の事ばかりを報告して責を果たすことにする。

（筆者は昭和35年から昭和47年まで会長）

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

四半世紀の軌跡に思うこと*

東京成徳短期大学
滑川道夫**

〈1〉

1956年（昭31）9月1日創設以来，4半世紀の時間が流れ去ったことに改めて驚かなければならない。初代会長石山脩平氏を中心に，常任理事として阪本一郎・島崎敏樹・長島貞夫・波多野完治・平沢薫・深川恒喜，監事として大内茂男・村石昭三の各氏が，創業の礎石を築く運営研究の労作の中心的存在であった。そのころ本学会の公称会員数300名で“読書に関する科学的研究”を志す者の連携協力によって，日本に於ける読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを“目的”としてうたっていた。“読書に関する科学的研究”を目ざす研究団体は，他に無かったから，創設時の役員はまさしく開拓者たちの栄誉を担うものであった。

わたしは，阪本一郎さんのおすすめにしたがって創立後まもなく参加した，“読書による人間形成”がメインテーマの時期であった。最初に研究会に出席した印象は，ふたしかであるのだが，読書心理学の発表が多かったように思う。直接読書指導に触れるような発表は，たいへん少なかったように思う。明治・大正期の高島平三郎系譜の児童研究家たちが扱った読書研究，あるいは，昭和期の武政太郎の“読書の心理”研究を継承し，その路線上に発展してきたものかもしれないと思われた。

そこには，すぐれた心理学者の知能が結集され，読書心理学的アプローチが優勢を示すことになるのも，ごく自然なことであった。しかし，その他の分野からも研究者が参加していた。学校教育の面では，読書指導研究者・学校図書館研究者・国語教育研究者，社会教育の面では，公共図書館・児童図書館研究者たちの関心を高めていった。研究部会の構成の中で注目をひいたのは“読書社会学部会”の調査研究であった。継続的に書店における読書社会調査を実施して，本の購入者の実態を社会学的に，同時に社会心理学・社会教育学的に研究して社会的にも注目された。これらの成果は，機関誌「読書科学」の内容となって記録されている。学会の刊行物の“読書による人間形成”（日本読書学会編，牧書店，昭33・5・28）“読書とマス・コミュニケーション”（日本読書学会，石山・波多野・阪本編，牧書店，昭34・6・18）にも反映していった。これらは，会の貴重な遺産である。この出発期は，阪本一郎さんが核となって研究活動を情熱的に推進されたことは，多くの人たちの記憶によみがえる業績である。事務局が，東京教育大学教育学部の平沢薫研究室に移転したのは36年ごろだったろうか。室の一隅に“読書科学”がうず高く積まれていて，大学院生の山本恒夫さんが，ひとりで熱心に勉強しておられたのを思い出す。わたしは，文学部・教育学部の非常勤講師のころ，平沢研究室を訪ねると，山本さんが，勉強の合間にお茶をサービスしてくださったり，なにくれとなく親切にもてなしてくださったことを忘れがたく想い出すのである。

そのころ，研究会で活躍していた方がたを思いうかぶまま記してみると，阪本父子は別格として，弥吉光長・草島時介・佐藤則之・松村康平・山本晴雄・藤川正信・河北憲夫・大内茂男・裏田武夫・長嶋貞夫・波多野完治・島崎敏樹・渡辺茂男・深川恒喜・平沢薫・望月久貴・

* Reminiscences of a quarter century.
** NAMEKAWA, Michio (Tokyo Seitoku Junior College)

村石昭三・佐藤泰正・有山崧・岡本奎六・室伏武・土田治夫・芦谷清・花田哲幸・金沢孝・今村秀夫・松本武・尾原淳夫・竹内一郎・渡辺吉之亮などの諸氏で，多彩な研究領域の人びとが集っている。ひとりひとりについて思い出が浮んでくる。こうしてみると，“読書研究”という性格からして，すでに学際的な志向性をもってみんなが参加していたと言えるだろう。心理学・言語学・国文学・図書館学・精神医学・出版・学校図書館・読書指導の実践者等の熱心な顔ぶれが思い浮ぶのである。

〈2〉

敗戦後，焼跡や防空壕の残存するなかから，民主日本建設の叫びが起って，ＣＩＥ（民間情報教局）の指導のもとに，新教育のなかに学校図書館運動が展開しようとしていた時のことである。1946（昭21）年の春ごろだったように思う。ＣＩＥに呼び出されて，おそるおそる行ってみると，岡田温（国立図書館長），阪本一郎（東京第一師範学校教授）の二方も呼ばれていた。これまで学校図書館をどんなふうに経営してきたのか，現状はどうか，どんなふうにこれから学校図書館運動をどう進めていったらいいと思うか，といったことが話題であった。焼跡にバラックの校舎ができたら，その行き止りの廊下に書棚を置いて本を並らべるところから出発するしかないだろうと答えたことを思い出すが，あとはこれまでの経験を述べたような気がする。その帰途，阪本さんと読書指導や学校図書館のことを勉強しなくちゃね，などと語り合った。そのころ私は，教育出版社として出発したばかりの牧書店の顧問として，出版企画の相談を受けていたので，読書指導関係書を出すことになっていくし，のちには読書学会の出版物も出版することになる。そんな経過を想い起してみると，ＣＩＥの機縁が忘れ難い。戦争が始って以来口にしたことのなかったコーヒーの味と共にＣＩＥ会談が思い起されるのである。阪本さんが，読書学会を創設しようという意図の源泉もここにあったように思えるし，わたしの入会（昭32）の動機もここらへんから志向の糸がたぐられるように思われる。

1948（昭22）年の春，文部省に“学校図書館の手引”編集委員会が設けられ，深川恒喜さん（文部事務官）が編集主任で，20名の委員が参加した。その中には，のちに学会に関係をもつ人は，深川さんをはじめ数人いる。石山脩平（東京文理科大学教授元文部省教科書局教材研究課長），有山崧（日本図書館協会総務部長），岡田温（国立国会図書館整理部長），加藤宗厚（国立図書館長），阪本一郎（東京第一師範学校教授），鈴木清（玉川学園玉川教育研究所主任），鳥生芳夫（東京上板橋第一中学校長），飛松正（東京第二師範学校教授 女子附属小学校主事），滑川道夫（私立成蹊小学校主事）などである。編集主任で活躍した深川さんは，この学会の前身にあたる“読書綜合研究会”が発展して，創設にこぎつけるいきさつを記録されている。（“読書科学”創刊号），また，初代会長（石山脩平）の後を引受けた阪本一郎会長は，“日本読書学会の16年間”（“読書科学”第16巻３号・昭47）を記録されておる。この二つの歴史的文献を読み返してみると，草創建設期の新興学会である本会の苦節の時代の様相がありありと浮んでくるし，学会をもりあげていこうとする人たちの意慾的な対処のしかたに感動させられる。そして，現在に至るまでの学会の諸状況にも通ずる苦節の時代が続いていることを思うのである。

この軌跡は，いうまでもなく“読書科学”の創刊号から第100号にたどられる。26年の歩みである。一貫して運営の中心となってきたのが事務局を担ってきた阪本敬彦さんである。かれの存在がなかったら，学会挫折の危機をのり超えることができなかったろう。“ジュニア阪本”と呼ばれた青年学究が，うつくしい白髪がふえてきたのも，学会を支える25年の労苦が身に泌みたからにちがいない。

そういえば，草創・建設期に学会活動を推進した人々の中には，すでに生涯を終えられた功労者もいるが，ほとんど青年壮年から老壮年齢に向っていることに気づかなければならない。25歳も年とっているという当然平凡な感懐が，心のひだにひっかかる。

たとえば，当時，この学会らしい，この学会でなけれ

ばできない仕事の一つとして評価された“読書指導事典”二巻（阪本・滑川・深川編，平凡社“指導編”昭36・11・14“作品編”昭37・8・30）がある。三人の責任編集で，編集協力者として今村秀夫（東京都目黒十中教諭），藤川正信（慶応大図書館学科講師），村石昭三（国立国語研究所員），渡辺正（都教育研究所指導主事），渡辺茂男（慶応大学助教授）他20名，執筆者のほとんどが当時の会員であったから，実質的には学会の総力を集中したといってもいいほどのものである。この時点におけるこの学会の到達度を明示していると言えるだろう。いわば理論編ともいうべき“指導編”では，新しい読書指導の原理と方法の建設をめざした論考が，欧米の研究と摂取しつつ展開している。心理学，社会学，教育学的視座から，読書の関連諸科学として図書学，文献・書誌学，図書館学，国語学，国文学，文芸学，解釈学，音声学，意義学，等の関連に照射をあびせている。さらに読書機能の発達（能力・興味），読書材料・読書環境・読書実態の考究をふまえて，読書指導方法論を展開している。実際編にあたる“作品編”では，読書指導とその研究の図書資料の考究を主としている。この二冊の事典は，学校図書館・読書指導の興隆に役立ったばかりでなく，その後の読書研究に好影響をもたらした。そのことは，以降の“読書科学”の論考にもその投影が見られる。また，この時点から，学会が国際読書学会（ＩＲＡ）との交流をふかめ，国際会議への参加者が多くなっていく。

この事典の執筆者陣も，現在とは大幅な交代がみられるのは，20年の歳月のしからしめるところだろう。瀬田貞二，中村新太郎，横谷輝，桝内達雄，石黒修，今井誉次郎さんがすでに歿している。そのほか現役を退いた人，学会活動から離脱した人たちも少くないのである。まことに感慨限りないものがある。それを思うと，将来，新世代の会員諸氏の手で，“読書科学事典”が編纂される時が来ることを，切に希望せざるを得ないのである。

〈3〉

わたしが，会長に就任したのが1972（昭47）年の４月であった。阪本一郎前会長の後を継ぐことになったのだが，柄でもないからと辞退の意を阪本さんにお伝えすると，会則を大幅に変更して，ＩＲＡ方式にするから，２年間やってほしいということであった。その年末に発行された機関誌 Vol.16, No.3 に阪本さんが執筆した“日本読書学会の16年間”にその間の事情にふれてこう書かれている。

“さてこの度辞任するに当たって，まず会則を大幅に改め，とくに会長の任期を２年，そして副会長は自動的に会長になるというようにした。こんな貧乏で雑用が多い会長には，２年間ぐらいならなり手があろうと思われたし，それを押しつけてもさほど無理ではないと考えたからである。さいわい次代の会長も副会長もそれを覚悟の上でお引受け願えたし，事務局の事務処理を合理化して頂ければ，雑用の一方的な偏りがなくなると思うのである。”

と，いう会長の意向にしたがって，倉沢副会長，阪本事務局長をはじめ，常任理事・理事諸氏の協力に寄りかかって２年間をすごすことができた。阪本名誉会長も心配そうな眼差しで見ておられたことだろう。

就任早々やらなければならない仕事が待ち構えていた。それは，会の財政的危機を克服するために賛助会員をふやす必要に迫られていたことである。賛助会員というのは，直接的にはねかえるメリットは弱いのだから，どこでも簡単に入会してくれるという性質のものではない。読書の科学的研究の重要性を理解して，読書学会の発展のために援助してやろうという誠意がなければ成り立たないのである。全会員の協力の上に，この賛助会員のおかげで低い会費で，機関誌の発行も100号におよぶことができたと言えるだろう。この学会の存在意義を理解しての援助される賛助会費は，全くの浄財である。阪本前会長時代に，桶本正夫（朝日新聞）さんと会長の勧誘で入会していただいた賛助会員も，社内の人事移動その他の理由で離脱する社があって，賛助会員の減少が運営を不如意にする状況にあった。

わたしは，副会長の倉沢さんと共に，賛助会員になってもらえそうな社を訪問することにした。いわば，はね返りのない寄附をもらいに歩くような負い目も感じて，二人とも勇んで出かけるというわけのものではなかった。前会長から“見返り物資もない学会への投資に，おいそれも応じてくれる社はそう多くはなかった。某社長のごときは，深川氏と私とを前において面罵にひとしいことばを浴びせた。それでも挫けずに二人は主な出版社を歴訪した。が結局は平凡社だけが応じてくれただけであった。”という話を聞いているだけに，足どりが重かった。

まず知っているところから交渉しようというので，小学館社長にお会いしてお願いして，快諾を得た。これに勢いを得た二人は，近くの博報堂を訪れた。博報堂は，学会発足当時の賛助会員であったが，中絶していた。その復活を懇請した。ここの研究室長がわたしの教え子であったこともあって，話がうまく運んだようだった。こんな調子で歩き廻ったのと常任理事諸氏の協力を得て，現状の賛助会員の支援を受けることができた。ふり返ってみると，なによりも大切なことは，この学会の活動状況を説いて，その意義と役割をよく理解していただいて賛助してもらうことである。そのためには，学会自体の出版活動をさかんにして，賛助会員の社から出版する企画も持たなければならないだろう。また，それぞれの社の研究部門の活動を，読書研究の面から援助することも必要だろう。テーマの設定いかんでは，学会との協力研究も可能となる面もあるだろう。出版社がそれぞれ集めている“読者カード”や“読者のアンケート”の集計・分析にしても，学会の知的協力によれば，その社にとってもより役立つ結果を見ることもできるかもしれない。同時にその処理の角度によっては，大事な研究資料として生かせるかもしれないのだ。そのほか，学会の学問的良心をゆがめずにさまざまな協力関係の糸をたぐり寄せることができそうな気がする。このことを提案の一つとして記しておきたい。

〈4〉

学会の国際交流がそのころから活性をもち始めてきた。これは，いうまでもなく事務局長の阪本敬彦さんのたいへんな努力を秘めた高い貢献度によるものである。A. J. Harris, D. Kopel, R. C. Staiger の来日もあって，ＩＲＡに学会が加盟した1966（昭41）年に，パリで開催された“第１回国際読書会議”には阪本会長と尾原淳夫さんが参加し，会長は“日本の読書界の展望”を発表している。つぎの“第２回国際読書会議”コペンハーゲン大会1968（昭43）年には，室伏武さん，倉沢栄吉さんとわたしが出席した。学会会員が団体を組んで国際読書学会に参加するようになったのは，“第５回国際読書会議”ウイーン大会1974（昭47）年からだった。わたしも先輩の驥尾に付して“日本児童文学と読書”を発表し，その帰路コペンで Mogens Jansen が会長をしている“デンマーク読書学会”と“日本読書学会”とミーテングを持った。阪本（敬）さんは，“読書入門期”について，わたしは，“アンデルセン童話を日本の子どもたちがどう読んでいるか”を発表した。この時も会員の参加が多かったが，つぎのシンガポール大会も多数の会員が参加し，発表者も多くなった。指導経験を生かした実践家の発表も増加していく傾向がみられてきた。この大会で，わたしにとって印象的であったのは，閉会式のあいさつの中でＩＲＡの会長が，わたしの発表した“東洋的読書思考”をとりあげて課題意識にふれたことである。予想もしなかったことだったから，驚きだけが残ったことを思い出す。今年1982年のダブリン大会には，６名の発表者が予定されており，参加者の申込みも漸増している。このほかアメリカの年次大会への参加者も増加する傾向にある。年次大会を終え，ニューオリンズからアリゾナ大学へ廻り，K. Goodman 教授の司会で日米読書集会をもったことも記録されていいことだろう。

叙上のことは，わたしの個人的な印象の中のいくつかの残像にすぎない。そのほか，阪本(敬)さんや岡田(明)さんの国際共同研究への参加，岡田，阪本（敬），井上

(尚)，岡本(奎)さん他の会員諸氏の留学読書研究，ＩＲＡ機関誌への発表，などいずれも，日本読書学会の国際性を高め，研究視野をひろげることに大きく寄与する活動であった。

阪本名誉会長が，シンガポール大会（第6回世界読書会議，1976年）において，ＩＲＡから功労賞を受けたことは，学会あげての歓びであった。阪本さんが，感動をこめた挨拶のことばのひびきが耳の底に残っているほどである。日本読書学会の，そして日本の読書研究の開拓者・建設者として，世界が認める栄誉であった。この栄誉によって，“日本読書学会”の国際的地位を一段と高めたと言えるだろう。それにつけても，名誉会長のますますのご健在を，会員諸氏と共ども祈念してやまない。この父の志向を受け継いだ事務局長の阪本(敬)さんが，国際交流の中心的存在として活躍してきた。そして，いま副会長となり，やがて会長として，若い世代のエネルギーを結集して，日本読書学会の内外にわたる飛躍的発展を期するにちがいない。これまでの学会の歩みをふり返えるとき，切にその期待をつよく持たざるを得ないのである。

〈5〉

二度勤めの会長を退任するにあたって，これまでの会員諸氏のご協力ご支援に深謝申上げると共に，いくつかの希望を述べてみたい。

1)　若い世代の読書に関心をもつ研究者が，隣接諸科学の領域に潜在し，あるいは顕在しつつある。わたしの狭い読書範囲の文化雑誌や出版物にも発見される。ひろい範囲から発見して，会員として研究活動に参加してもらうように全会員から推薦していただきたい。

2)　日本は，まだ諸外国にくらべて，読書指導に関心をもつ実践指導者の参加が少ない。これからは，実践指導の中から，理論を創造していく時代である。その点で機関誌にも実践家の研究的な論考をどしどし反映していってほしい。学者と実践家との研究の往復と重複が真の発展に連らなるだろう。

3)　欧米の先進研究成果を摂取すると共に，日本的・東洋的な独自性を，研究にも指導にも生かす創造努力をほしい。西欧文化と東洋文化の接点を，読書の視点から掘り起していくのが課題だと思うからである。

（筆者は昭和47～49年，同55～57年会長）

読書および読書指導の思想
——昭和50年前後——*

文教大学
倉沢栄吉**

1. はじめに

『読書科学』73号「第19巻第3号」はよくまとまった三つの論文から成っている。そのうち首藤久義（以下敬称略）の論は，この人の読みの学習と教育についての，中心テーマの一つをまとめたものとして注目される。読みの指導法の体系的考察を続けていくための，基本的構築を試みたものでもある。この若い研究者の今後が期待される好論文であった。

佐藤泰正の「弱視児の読字力に関する研究」は，いかにもこの人らしいお家芸で，専門性に富んでおり，この方面において他人の追随を許さないものである。こういうのをしたたかな論文という。

三番目は実践記録である。高校の現場にいる早津秀雄の「読書によって人生を考える」である。筆者（倉沢）はこの報告を手がかりに昭和50年前後——つまり筆者が本学会の会長（理事長）を務めさせてもらった時期における「読書および読書指導の思想」について，今回，概観的な考察を試みることとする。

2. 読者の人間的反応

早津論文は，漱石の「こころ」を中心に，教室で生徒達がどんな反応をし，どんな変容をしたかが述べられている。例えばT・E子の

「人の心って，かってなもの
人の心って，つごうのいいもの，
人の心って，はかれないもの
自分の心さえ恐しい。」

に代表されるような，読みにおける読者の心のゆれが数多く報告されている。

昭和50年前後は，筆者（以下倉沢を筆者と書く）の考えによれば，読書指導の成熟期の頂点を形づくっていると思う。昭和40年代の国語教育では，読解から読書へという流れがかなり強かった。ときには「読解か読書か」という論争がうずまきをなして，逆流的作用を起こすこともあったが，大勢は読書へ読書へと流れ，従来の，狭い教科書中心の読解主義から自由になろうとしていた。それは，昭和33年の学習指導要領の目標の末尾「……言語生活の向上を図る」に相応するものである。

読解指導を昭和30年代の学テ体制の象徴とすれば，40年代は自由読書，教室外読書による，読み手主体の解放としてとらえることができる。

こういう潮流の中にあって，多くの研究者・実践家が読み手主体の確立をめざしていった。読書感想文の指導もこういう面からとらえることができると筆者は思っている。文学作品も作品への埋没から自由になろうとする主体のために，感想の話し合い，意見の論述という方法が多く採用されたのである。前掲早津論文もその一つである。

しかしながら，こういう流れの中にあって，読み手が「人間」を媒介として自己を確立していこうとする動き

---

* Thoughts on reading and reading guidance : The mid 1970s.
** KURASAWA, Eikichi (Bunkyo University)

が，徐々に底流となっていった。読書指導は無論，読書人としての基礎的技術の養成を拒否するものではない。けれどもそれ以上に，「読書人格育成」（阪本名誉会長の強い先導によるもの）をめざしている。読書人は，人間全体として，近代情報社会に向けしっかりと育てられていかなければならない。そのために，文学系であれ非文学系であれ，読書は，読書人という人間形成に役立たなければならないのである。

文学読書は，端的にそのことを示している。そして，「こころ」は，さらに端的に読書人の，人間としてのものの見方感じ方をそそり，深め，ゆり動かすための典型的な材料である。

早津報告によると，生徒達の感想文は，

- 主人公「先生」はどんな人間として描かれているか
- 主人公の生きた時代背景はどんな社会であり思想背景であるか
- 主人公の選んだ死をめぐって考えられる死生観について
- 作者漱石の精神の内部にある，矛盾や二律背反はなにか

等々に及んでいる。これらの課題のほかに，なおいくつかの単元の核が想定されよう。それはここでは問題にしないことにする。早津論文にみられる生徒達の反応の中に，彼等がいかに「人間」を感じとっていたかが，今は筆者にとって問題だからである。

いったい生徒達は，主人公をどんな人間として感じとっていたのであろう。感想文の中からいくつか抜き出してみると，次のようになる。

- 妥協のできない人，自分自身に忠実に生きようとした人。それだけに，破滅型の人。（N・B子）
- いつもまじめに高いところから世の中を見下している青白きインテリ。時代に対応できない「頭でっかち」な人。（H・H子）
- 明治という時代に，誇りを感じ使命感をもっていた人。自分自身の思想，生き方を模索し，創造しようとした人。（N・D）
- 明治の知識人，明治の精神を尊重し，明治の文化・文明をりっぱに守り通した人。（I・G子）

このようなとらえ方は，女子高校生としては精一杯なものであろう。しかもそれぞれのものの見方考え方から，自分の思うことを個性的に表出し得ているので，早津教室の生徒達の学習の様子が目に見えるようである。

この学習指導に示された「こころ」を教材文とした生徒達の反応は，言うまでもなく，人間に結集している。人間の生き方に向けられている。そこには，ある名作を読んでいるとか，現国教科書の中の一部分だとかいう意識はない。

3. 屈折点としての時機

昭和50年前後を，読書および読書指導における，一つの屈折点として筆者はとらえたい。その頃，学習指導要領の改訂作業が，確実に進んでいた。基本路線は，「ゆとりと充実」である。ゆとりのためには，児童生徒達の学習目標を精選しなければならない。（注・目標の精選というところが大事である。精選のかけ声で，子ども達の豊かな活動までもその対象にしてしまい，学習活動をかわいた貧しいものにしてしまう誤解が，当時から今まで続いている。教科書の頁を薄くすればよいといった短絡的な発想がその見本で，こういう軽はずみの考え方は，必ずやせたカリキュラムとなって子ども達を不幸にする。目標をしぼって確実に達成させるためには可能な限り豊かな学習経験が必要である。）

ゆとりの実現に向かって学習指導要領を改訂しようとした人達の中には，学習者の人間を尊重し学習者を人間として伸ばしていこうとする願いがあったと筆者は信じている。

人間尊重の，または人間中心の教育という思想は，大げさにいえば，1970年代の教育の中心であった。世界的にそうであったといってよい。読書に関していえば，読解指導から読書指導へ，読書指導から読者指導へという流れがこれを証明している。読むことの学習指導では，必然的に読書人格形成が究極の目当てとなった。ゆとり

のある教育のために，教科書を離れて図書館に行けとか，「一週一時間は図書でくつろぎの時間を」などとするのは，近視眼的な発想である。どうしても立派な人間を育てなければならない。教科書も普通の読み物もそのためにある。教科書では厳しくきつく教え，その解放をゆとりと考え，それは課外読み物によって，というのは「二元論」に過ぎない。(後述)

教育課程改訂の作業は深く静かに進行していた。ゆとりをという発想は好感をもって迎えられた。現実の熾烈な受験体制の中で，どの程度の効果を発揮するかは疑問視されてはいたが。

ゆとりと充実とは相反する概念でもある。だから，二元論に陥りやすい。学校内では，校長や生活指導主任や，音楽や体育の先生はこれを歓迎する。反面，主要教科といわれる英数国社などの専門家は，内心渋い顔をしていた。

読書指導についてみても，ゆとりを諸手をあげて迎える人達ばかりではない。充実・精選・徹底を信奉する専門家も多い。国語科でいえば，その率はかなり高く，ゆとりの方向を認めるとしても，「だからこそ我々はみっちりと基礎的読解力をつけるべきだ」という顔をする。そういう顔が一般に歓迎される。基礎的基本的事項をというかけ声に，こういう集団はさっと相乗りをする。

国語科は，ゆとりの教育の中で，その本来の使命である「ことばの力」をしっかりと身につけさせる責任があるという。時間数が少なくなっていっそうその実感がせまってきた。そこへ「言語の教育としての国語科教育」というスローガンである。多くの国語人はこのスローガンにとびついた。

このようにみてくると，昭和50年前後にうずいていた国語教育界の，病根のようなものが筆者には感じられてくる。一方に日本読書学会のように，読むことの指導に学際的立場をとり，各方面の専門家と協力して，読書および読書指導を，広汎に柔軟に追求していこうとする活動がある。それは月例研究会や全国大会や機関誌に花と開いている。しかし，一方に学習指導要領の改訂を，その表層において受けとめ「言語の教育としての国語科教育」をふりかざして，せっかく伸びてきた読書観・読書指導実践を，教育の本流から遠ざけようとする動きが潜行していたのである。

ゆとりということばに，読書指導に熱心な人達は好意的であった。しかしながら，ふたをあけてみると，学習指導要領は，読書および読書指導について冷淡であった。教科指導がカリキュラムの中心を占めている日本では，宿命的なものである。かくして，学習指導要領（現行）は，新発想について「総論賛成各論反対」ということになった部分が多い。国語科における読みの指導は，典型的に，この部分の中に含まれる。昭和50年前後は，この底流が形づくられた頃と筆者はみている。

4. 二元論の克服

国語科の教師は，二元論にさいなまれる。そこから逃れようとして，活字の中にのめり込む。広い視野から情報をとらえようとしないで，活字の中にはいり込み，活字に忠実な奉仕を試みることによって，読むことの指導の安全圏内にいようとする。目を開いて，情報社会，つまり活字を含む諸々の情報を受容し，国語科教育を矮小化から救おうとはしない。二元論を克服しないまま，逃げの姿勢でいる。

この姿勢に耐えられない人々は，どうするかというと，読みとはなにか，読みの指導をどう考えるかという悩みを悩まないで，読みの指導法に活路を見いだそうとしている。こうなると自然に，方法や技術の中にいることになる。方法や技術を工夫することで，創造への食欲を満たそうとする。それはそれで一つの救いであろう。けれども，いくら扱い方や指導法がうまくなっても，矛盾はそのままだから，根源的な救済にはならない。悪いことに，教育ジャーナリズムはこの人々に味方をする。国語科教育の専門誌の一つである『教育科学国語教育』も，読書指導の問題をときどき採り上げる。例えば

No. 175　1973年4月号　教科書「読書指導単元」の扱い方

No. 186　1974年1月号　読書の指導過程はどうあるべきか

No. 192　1974年6月号　読書感想発表の話し合い指導

といった具合いである。が，ほとんど，とくに No. 192 は，完全な方法技術論である。

筆者は No. 175 から連載講座を試みているが，そのテーマに「国語教育研究の未来」と題した。未来といっても，遠い将来を意図したものではない。現状批判でもある。「脱教科書論のために」と副題をしたのもその表れだが，その論の中で，従来のそしてその頃の狭い観念から解放して，読書の思想を広げ自由にしたいと思った。その中で次のように述べている。

活字からの自由という発想を適用すれば，それは，教科書からの自由でもある。(p. 116) そして教科書からの自由とは，教科書を棄てることでもなければ，教科書とそれ以外の読み物を対立させることでもないと述べた。

矛盾的な契機を認めるならば，どうしても広く深い視野を持たねばならない。矛盾の克服は矛盾する二つの契機を包むこと以外にないからである。(p. 117) とも説いている。

読解か読書かと問う，また，教科書か図書館かと言う，学校教育としての読みの指導と社会教育としての読書指導とを相対比する。このような二元論は，えんとつを二本並べたようなもので相交わることがない。

一部の論者は，えんとつ型ではなく，座布団型の発想をとる。つまり下の座布団に，教科書を中心とする，いわゆる基礎的読解力をおき，その上に，応用的実際的な活動としての読書を重ねる。この考え方は筋が通っているように見える。けれどもよく考えてみると，二元論であることをまぬがれない。

No. 175 の「話題と情報」に小川末吉が，

今後の読書指導の方向として，教科書による深い読解指導の基礎のうえに，教科書以外の自由読書の指導の必要性がようやく認識されてきたことである。(p. 97)

と述べているが，この占いは正当だと言えようか。読書指導を，読解指導の上に重ね，座布団のように積み上ぐる方式は，やはり二元論的発想である。

そうではなくて，大村はまの教室のように，読解も読書もない学習，すなわち単元学習であって初めて二元論は克服できる。(昭和40年代の後半に展開された大村教室の帯単元「読書」の，重量感に富む実践が，雄弁にこれを物語っている。)

しかし，一般の実践家・研究者は，座布団型の読みの指導論に弱かった。そこへ追いうちをかけるように「言語の教育としての国語科教育」というかけ声である。50年を過ぎると，急坂をかけおりるように「基礎的基本的事項」という衣の裾から「読解指導の重視」という鎧が顔を出した。そして，たちまちのうちに，自由な読書が不自由になり，学校の正統なカリキュラムから追い落とされようとしている。

二元論によりかかった敗北である。広い，とらわれない読書の考え方が，昭和50年前後を境として，ひどく手薄なものになってしまった。残念というほかはない。

5. 読書家と読書人

『読書科学』の読者には国語教師が多い。が，それ以外の人達は，筆者の論ずるところに，国語教師ほどは共鳴されないだろう。筆者が感じているような読書指導の危機感を持たれないだろう。事実，国語教育の月刊誌以外には，上に述べたような二元論や技術論への脱走の考えは少ない。『児童心理』昭和51年8月号は「読書と子ども」を特集した。その内容を見ると，読書の意義，読書能力の心理学的構造，読書習慣の形成，情報化社会における読書，想像力と読書，読書財論，日本人の表現力と読書，といった標題が並んでいる。いずれも，読書の思想，読書指導への考え方を示唆した論文である。生きるための読書の考え方である。そしてそれは，単元としての読書論でもある。筆者も「子どもにとって読書とは何か」という小論を書かせてもらった。そして，

読書とは，どんな行為か，読書行為の対象となる書物という概念をどう砕いたらよいか。生涯学習としての読

書は子どもにどんな意義をもつか，

などを述べた。

大村はまは1980年の夏，ＮＨＫのラジオから，国語教育を語ることばを，一時間番組で５回，放送で訴え，次のような趣旨を我々の頭に残した。

- 読書は決して国語の本を読むことだけではないし，ましてや文学だけを読むことではありません。
- 本というものを単なる教養のため，自分の足りないところを伸ばしていくだけではない（とする）世界になったと思います。
- 本を使って自分の世界をもう一つ築く，そういうような本の生かし方も大切になったと思います。
- ですから，今までの「何が書いてありますか」といったような受け取り方のない世界，新しい意味での新しい時代の，本を生かして読む人を育てようとしたんです。

と言い，（後に活字化されて，文言が多少修正され，『大村はまの国語教室』――小学館――として刊行された。ここに引用したのは，放送のことばのままである。）そして，これに続けて次のように結んでいる。

- 読書家といっても，読書人といってもいいかもしれません。読書家といいますと本の好きな人のイメージがあります。読書人といいますと，もう一つの世界を見ているというような感じがする……

「もう一つの世界を見ることのできる人」いいことばではないか。読書人格とはこういう人をいう。読書指導は，読書家を育てるというよりも，むしろ読書人を目指していくべきものであろう。

昭和50年前後は，今にして思えば，重大な意味を持つ曲がり角であった。必ずしもいい方向に曲がったとはいえない。しかし，この地点を回顧することで，我々にはいっそう志を堅くし，読書と読書指導の思想を窒息から守る責任がある。

（筆者は昭和49～51年および現会長）

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

日本読書学会
——出発と進行——*

創価大学
望月久貴**

I 読書科学・事始め

1 門出

昭和31年9月，日本読書学会が創立された。東京教育大学教授石山脩平先生を会長に戴き，東京学芸大学教授阪本一郎先生を副会長にお願いして，石山先生の教育学研究室に事務局を設け，当時としては未知の世界に向かって歩みを進めた。複雑な姿態を装う読書現象を科学的に究明し，わが読書文化の向上を図ることが，当時の創立趣意書に記述されている。その翌月，機関誌「読書科学」の第1号が牧書店から発刊の運びとなった。石山会長をめぐる準備委員の考えから，発起人75名，その中から理事・常任理事が選ばれて，新しい学会を生誕する気概が横溢し，そこに毎月参集して狭苦しい思いをしては，協議に花を咲かせたのであった。20年後の日本に真実の花が咲こうとは，当時考えた人が幾たりいたであろう。

2 石山会長と「読書」

日本読書学会の創立は，その後の発展から推測しても，誠に時宜に適したといえる。ところで本会設立の意図は，前述の創立趣意書を参照するまでもなく明らかである。

この場合，教育学者石山脩平先生に，「読書」学会設立の発意をうながしたのは，いったい何であったかと言う人もある。よって，筆者に浮かぶひとくさりを述べさせていただく。題して石山会長と「読書」という次第である。

先生が，『西洋教育史第一巻希臘篇』の大著（昭和9年・目黒書店刊）を初めとして，教育史・教育学の名著を世に問われたことは広く人の知るところであるが，実は，大著刊行の翌10年に『教育的解釈学（賢文館刊）』が，その翌々12年に『国語教育論（成美堂）現代教育学大系第2部各科篇第7巻』の刊行が相続いていたのを忘れてはならない。これら両者は，すなわち国語科教育に関係し，しかも読み方学習の方法論を提案されたものであったからである。実に読書とも深く結ばれた学習指導論なのである。以下にその内容を簡単に紹介する。

『教育的解釈学』

第一篇　理会・解釈及び解釈学の意義

第二篇　解釈の対象

第三篇　解釈の方法

第一章で解釈方法上の諸原理を述べ，次いで解釈の実践過程を，解釈過程考究の必要，本文批評，解釈の補助手段と進め，通読段階・精読段階・味読(鑑賞)段階・批評段階の諸任務を，人格及び文化財一般の理会過程から述べる。

注意すべきは，ここに国語教育読解法の三読主義の源流となる四読論が見いだされる。

第四篇　解釈の可能根拠及びその妥当性

第五篇　解釈学略史

次に『国語教育論』についてみる。

第一篇　国語教育目的論

---

* The Japan Reading Association : Its start and progress.
** MOCHIZUKI, Hisataka (Soka University)

第二篇　国語教育方法論

第三篇　国語教育思潮論

上記第二篇が，前掲『教育的解釈学』の四読論を修正して三読論とする根拠を示した箇所として注目される。

第四章（第二篇）国語解釈の指導方法

「第六節　解釈以後の領域とその指導」

さきの『教育的解釈学』における「批評段階」は，通読・精読・味読の三読段階とちがって，

「受容読解の立場を去って読者自らの創作の立場に立ち，若し自分が作るとしたら，如何なる文を作るであろうかを頭に描きつつ，これを比較して，与えられた文の特色長短を検討する」のであり，「本来解釈ではないから，今は（批評段階を）取りはなして取扱うことにする。」と述べた。従って，結果的には，四読主義を改訂して，今日の三読主義に落ちつかせたものである。

以上の論究から推しても，先生は読みの学習指導理論を考究され，読解と批判，批判と感想など相互の関連を整理されたものであるから，読書学—読書学会の創立の着想と，無縁な教育学者ではなかったと思われるのである。むしろ，先生は三読主義の国語教育界への普及を基盤として，晩年において読書と深い縁故につながる読書学会を創立され，初志を貫徹されたものであるとされよう。

Ⅱ　読書科学の研究実践

1　学際的研究の重視

学会出発当初の進行を，はっきりと特徴づけたものは，学際的研究への立脚という点であった。次に，会誌第1号から第3号までの掲載論文題目を例示して，その学際ぶりの一端をうかがうことにする。

〈会誌〉1号　昭31・10・25　掲載論文題目

(1) 読書社会学の課題（平沢）　社会学
　　成人の読書に関する研究序説（裏田）　社会学
　　保護少年と読書（森田）　社会学
(2) 児童読み物の研究（阪本）　心理学
(3) 先天性読み書き欠陥児について（島崎）　医学

〈会誌〉2号　昭32・1・25　掲載論文題目

(1) 読書と道徳教育（石山）　教育学
(2) 読解中心から読書中心へ（望月）　言語学
(3) 読書の生理（草島）　生理学
(4) 子どもとマンガ—ある実態調査—
　　（波多野・木村）　心理学

〈会誌〉3号　昭32・4・25

(1) 社会生活の目的（中田）　社会学
(2) 児童雑誌の実態とその評価（滑川他）　図書館学

総じて上記の筆者は，創立発起人や役員などで，依嘱する時から学際的な研究への着意もあって選定され，人選は広範な学界にわたり多彩であったとみられる。

2　二つの研究路線

学際的な研究が，学会設立の目標として重視されていたので，二つの研究路線が，当初から成立していた。

一つは，個人研究路線である。学会出発のその月から，月例研究会が生まれた。次に数例をあげる。

〈9月例会〉　日本読書学会ノート　No. 1

1　昭31・9・20（木）
2　出席者　石山他11名
3　研究発表「言語心理について」（村石）

〈10月例会〉　日本読書学会ノート　No. 2

1　昭31・10・18（木）
2　出席者　波多野他12名
3　研究発表「読書と批評の心理」（波多野）

〈11月例会〉　日本読書学会ノート　No. 3

1　日時　昭31・11・21（水）
2　出席者　石山他13名
3　研究発表「児童雑誌について」（滑川・野村・亀村）

〈12月例会〉　日本読書学会ノート　No. 4

1　日時　昭31・12・14（金）
2　出席者　阪本他7名
3　部会第1部～第4部研究の状況報告

ほぼ上記のように月例会をもって，個人研究の発表を行い，自由討議が交わされた。いうまでもなく，このような月例個人研究発表会の形式は，今日に至るまで継承

されてきている。現在では，発表者を学会以外からも求め，聴講も広く開放している場合が多くなっている。

もう一つの研究路線は，部会組織の共同研究である。10月例会（前掲）において部会が設定され，研究に着手されている。その結果の報告を題名と部員のみ摘記しておく。

部会共同研究報告

〈読書科学・第２号〉　昭32・1・25

(1)　青年の文学作品への接近と理解に関する研究㈠
　　―漱石の「坊っちゃん」を中心に―
　〈日本読書学会第二研究部会〉　　係望月
　　岡本・阪本・佐藤・島崎・花田・村石・室伏等

(2)　読書社会学調査中間報告
　〈日本読書学会第四研究部会〉　　係平沢

①　都内千余軒中60店選出―層化無作為抽出―第一次抽出
②　書店ごと random start，無間隔無作為抽出―第二次抽出
③　第一・第二次抽出比の積が $1/40$ になるようにした
④　平沢・城戸・室伏・裏田・寺内その他助手数名

〈読書科学・第３号〉　昭32・4・25

(1)　青年の文学作品への接近と理解に関する研究㈡
　　―青年と漱石の作品―
　日本読書学会第二研究部会　　係岡本

①　漱石の６作品―「わが輩は猫である」他
②　質問―内容・閲覧時期・読み方・読後感
③　都内優秀中高校他―各８学級400名
④　学年別・地域差・男女差

(2)　読書世論調査の報告
　日本読書学会第４部会読書社会調査部会　　係平沢

「読書科学」第２号で報告したものの目的・設計・実施・方法・集計・問題点などにわたる報告

〈読書科学・第14号〉　昭35・3・30

(1)　文学作品鑑賞力の評価法
　　読書教育部会共同研究

①　客観的方法
　散文の部（勝又）・短詩の部（吉沢）
②　読書感想文による主観的評価の一方法
　ア　鑑賞と感想（望月）
　イ　感想文分析の手がかり（同）
　ウ　感想文による鑑賞力評価の一方法（同）
　エ　作品比較法（岡田）
　オ　読書反応法による鑑賞力の評価（岡本）

〈読書科学・第15号〉　昭35・6・30

読書過程の分析―その方法論的研究―
　読書心理部会共同研究

1　研究の計画（宇留野・望月）
2　読書中におけるＰ・Ｇ・Ｒの分析（阪本敬）
3　読書中におけるモノローグの分析（村石）
4　読後における面接の分析（板垣）
5　まとめ（村石）

以上に列挙したように，学際的な実地研究の中に，熱烈な期待をかけ，各人が調査研究に埋没した感があった。そして，参加メンバーに予想以上の満足感を与えたようであった。かなりの労力と時間を，むしろ積極的に投入して悔いなかった。それには，各人の若さが動力となったと思う。

しかし，この研究分野が，数年にして退潮を示すようになった。その経費の増大に追いつけなくなったこともあるけれども，一方では個人的な研究分野が，共同研究に食われることに堪えられなくなったことも理由にあげられたと反省している。

Ⅲ　学会路線の曲折

1　給油状況

学会会員の研究発表の場として，第一回の全国大会が開催されたのは昭和33年11月１日・２日の二日間で，「人間形成をめざす読書指導の実践」を主題とし，会員の共同研究および個人研究が発表されて，石山会長の講演で結ばれた。旧東京教育大学数教室が充てられ，思いの外多数の参会者を迎えたのであった。それから20年余の今夏７月28日・29日の二日間，第25回大会が都立教育

研究所において開催される運びになっている。年々の充実と発展は，真に同慶に堪えない。

ところで，年々の学会運営には，適合した経理面の給油が常に期待されるのであって，まず，それに見合うだけの経常費として学会費の収納が，基本的にきわめて重要であり，その他の差しくり等に可能な限りの円滑さが要請される。

学会が出発して，ちょうど6年間経過した昭和37年2月，「日本読書学会通信 No. 1」は機関誌の発行遅延を詫びつつ，「諸物価の高騰と郵便料金の値上げによって，今までの会費ではとてもまかなっていけなくなったのが主な原因である。」ので，今後の対策として，「ページ数を少し減らすことで，収支を合わせていくことにした。」と述べている。「さしあたり，第19号と第20号とを合併号として」，12月の発行予定を2月に延期するとし，「そこでこの際，会員の倍増について，とくにご協力を願いたい」と付け加えている。また，快ニュースとしてで，「研究活動の現状」の見出しのもと，学会は「読書の人格形成に及ぼす影響の実証的な研究」で，2年間にわたり，文部省から計100万円の科学研究費の交付を受けたともある。それから，賛助会員として朝日新聞社ほか6社を紹介している。いろいろと資金づくりのむずかしさを思わせ，全員には少なからず気にかかる情報を掲載していた。なお，昭和47年12月発行，通巻61号の「読書科学」には，阪本一郎氏執筆「日本読書学会の16年間」が掲載され，学会は朝日新聞社の「読書世論調査」に協力したり，その他外部からの研究委託に応じ，読売新聞・電々公社・学習研究社・東販等のために協力したりしたともある。学会諸氏が学会の給油のために犠牲を買って出て，研究との一石二鳥をねらったとも語られている。

2　海外読書研究との交流

本会設立の趣意からも察しがつくとおり，海外の読書科学との交流が，学会運営上の大きな眼目であると了承していたといえる。

〈読書科学〉第6号，昭33・3・25 の巻末に記載された「会報」には，次の記事が掲げられた。

理事会（12月17日）

議事　(1) Gray 博士招へいについて—シカゴ大学教授 Gray 博士を日本に招へいして研究集会を開く計画について協議

小委員会（12月18日）

議事　Gray 博士招へいの手続きについて

小委員会（1月28日）

議事　(1) Gray 博士招へいの計画について—原案審議

このあたりから，海外交流に積極的な意欲を燃やしたことがわかる。学会発足2年早々であった。

昭和50年4月1日，当時の会長倉沢栄吉氏の発案で，「日本読書学会通信　第1号」（A5判 4p.）が発行され，会誌に折り込みで届けられるという試みがあった。「ニュースレター・公開研究会・シンガポールへ」などの小見出しの情報の欄があり，「1975年度の研究活動に寄せて」および「海外ニュース」が続けて収められた。特に末尾の記事には「国際読書学会1974—1975・イギリス読書学会・ウィーン読書学会・ウィーンとコペンハーゲン・IRA年次大会・第六回国際読書会議」などの短文が手際よく配列されており，読者に親切な手引きとなった。筆者なども，とかく語学コンプレックス病にかかってしまい，外遊には尻込みしがちなのであったが，これらの記事を見るに及んで，第5回国際読書会議ウィーン大会および第6回シンガポール大会に参加，特に後者では恥を忍んで，「読書感想文の一研究」の発表をすることとなった次第である。この時はアジア大会でもあったから，特に英語の同時通訳が行われたため，胸なで下ろして日本語発表ができたのであった。なお，末尾には「事務局だより」が1ページ分出ている。とにかく海外読書研究の情報をもらうのには恰好なできばえであり，しかも無料の折り込みでもあった。材料集めの編集員と経費負担の事務局に思い及ばなければ，罰が当たろうはずというところで，この企画は読者の好評を博したのであった。

通信の第2号は，同年10月1日刊行，第3号は翌50年

2月1日刊行，および第4号は同年7月1日刊行であった。いずれも海外読書研究会・大会の開催予告，その参加者報告や，海外の研究者の来朝や本会への来訪，およびその講演会，歓迎パーティ等々の告知が収載された。それらの集会に参加すれば，通訳を介して相手の雰囲気に浸ることもできて，ある意味からは直接の交流を果たす役に立つはずである。

「読書科学」56号・昭47・1・20からは，この会誌から編集委員5名のほかに，John Downing および Donald Leton の外国学者両氏に同委員を依嘱している。特に後者の Dr. Leton はハワイ大学教授で，後に日本・ハワイ読書学研究会の約定が成り，毎年交互に会場を移し，盛んな集会となっているハワイ側の会長格，年と共に親密の度を加えている。とにかく数年来，海外の情報を入手する機会が急増されたことは確かであり，わが学会に新しい方向づけが与えられるに至ったのである。数十名もの会員が，アメリカ合衆国・ヨーロッパ・アジアの諸大会に，空路相たずさえて往復する近年の状況は，他の諸科学研究にも多くは見られない新傾向であるとされよう。日本読書学会（ＪＲＡ）の充実と発展を待望する次第である。

（筆者は昭和51年から53年まで会長）

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

読書科学の25年
——初期と会長時代を中心に——*

成城大学
岡本奎六**

「読書科学」創刊25周年。第100記念号の発刊の運びとなった。めでたいことである。

初期の日本読書学会に於ては，研究会が盛んであった。これを受けて，協同研究も盛んになり，多くの読書実験や読書調査が組織的に行なわれた。研究の成果を発表する研究大会も盛況で，参会者はこんにちより多かった。「読書科学」も毎号64ページ立てで，こんにちのものより厚く，多くの研究論文が掲載されていた。

こうした盛んな学会事業は，会員の研究意欲を刺激し，会員の読書研究に一層拍車をかける役割を果たした。わたしにとっても，これらの学会事業は育ての親であった。細々とではあるが，こんにちまで読書研究が続けられたのは，初期の学会事業に負うところが大きい，と考えている。そこで先ず，わたしの眼で見たこれら初期の学会事業について述べることにしよう。

1　初期の「読書科学」

創刊当時の「読書科学」は，編集者8名。その顔ぶれは，会長（理事長）の石山脩平(敬称省略，以下同様)，後のお茶の水女子大学長の波多野完治，二代目会長の阪本一郎，いまなお学会で御活躍の平沢薫，深川恒喜，五代目会長の望月久貴，村石昭三，それに末席にわたしも加わっていた。第2巻からは三代目会長の滑川道夫も加わり，9名となった。

一般に学会機関誌の編集陣といえば，中堅幹部中心であろう。本学会のように，中堅幹部より最高幹部が多く，しかもこれらの方が進んで盛んに投稿するという例は少ない。ちなみに，第2巻第4号（通巻第6号）までに，全部の編集者が投稿しており，二度，三度とその間に投稿しているものも少なくない。

現在は，会長，副会長が編集陣に名を連ねることはなくなった。しかしこういう最高幹部も，編集者も，進んで投稿するという傾向は伝統的に続いている。若手研究者だけの発表機関にならないところが，「読書科学」のおもしろいところである。

初期の「読書科学」は，64ページ立てである。一時はこれが32ページ立てになり，こんにちは48ページ立てになっている。こんにちと較べても，もっと多くの研究論文を掲載していたことがわかる。これを裏返していえば，当時は会員の読書研究が盛んであった，ということであろう。

初期の読書科学の編集に当っては，複数のものが投稿原稿に眼を通し，突っ込んだ審査を行なう，ということはなかった。64ページ立てで，多くの論文を掲載するゆとりがあった，ということもあろう。しかり何よりも，学会幹部が進んで投稿してくれたり，会員からのよい論文を紹介してくれたからである。論文の専門分野別も偏りなく，比較的多くの分野に散らばっていた。

編集者としてのわたしの仕事は，主に校正をすることであった。しかしそれもいつの間にか，そしてなぜだかも忘れてしまったが，やらなくなっていた。身近かに熱

---

* Twenty-five years of reading research : The early years and my term as president.
** OKAMOTO, Keiroku (Seijo University)

心な働き手の観察モデルがいなかったからではない。二度も脳溢血に倒れながらも，重い足を引きずるようにして学会の会合だけは休まれなかった石山会長，黙々として細かい事務的な仕事まで処理された阪本副会長――このお二人だけでも，観察学習のモデルとしては充分なはずだ。それを見習らわなかったわたしは，よくよく無責任，無気力，無能力の三無主義だったに違いない，と反省している。

2　初期の研究会

創刊号の会報欄に，《読書総合研究会ノート》と書いて，綜合研究会が昭和31年4月から，毎月のように持たれたことが記してある。これは学会創立世話人19名の研究会で，その性格，目的は，深川恒喜によれば，おおよそつぎのようなものである。

当時，読書指導が学校や社会の関心事となり，読書感想文の指導や，そのコンクールが盛んになってきた。そういう個々の感想文も大切だが，人間の成長歴の中で占める読書の意義や，その人間形成に及ぼす影響を解明することは一層重要である。そういう立場から，「読書の人間形成に及ぼす追跡的研究」を主題とした研究会が成立した。それが，この研究会である。この研究会は，いろいろな専門分野からの読書研究者19名が集まり，この主題研究の具体化をはかる意見発表と討論を重ねてきた。このように，深川は述べている。

深川のいうように，この研究会の成員は教育学，心理学，図書館学等に渉っている。中には生理学の島崎敏樹，司法畑の森田宗一，といった顔ぶれもみえる。こういう異なる専門分野の新しい視点からの読書研究を，小じんまりした研究会で聞いたり，話し合ったりすることは，おもしろくもあり，研究意欲をそそるものがあった。ここから，科学研究費の助成を受けた協同研究が発展するのであるが，それは当然のなりゆきといえよう。

19名の閉ざされた研究会とは異り，開かれた研究会も，他方では盛んであった。読書科学第2巻第1号（通巻第3号）によると，最初の公開研究会は，昭和31年2月5日に行なわれている。この公開研究会は，当時児童雑誌に対する社会の関心が高まっていたので，この問題をとりあげた。三つのグループによる児童雑誌研究の発表の他に，パネルディスカッションも持たれた。来会者は300人という盛況であった。

その後2年余り，公開研究会は途絶えていた。しかし，昭和33年5月27日に「第1回公開研究会」と銘を打ったものが開かれた。講師は亀井勝一郎で，場所は日比谷図書館である。この第1回公開研究会を皮切りに，つぎつぎに公開研究会が開かれている。その模様については，「読書科学第3巻第1号（通巻第7号）から，第4巻，第5巻のいくつかの号に記してある。

公開研究会は，閉された研究会とは幾分性質が異なり，啓蒙的な意味，会員獲得やソーシャルサービスの意味もあった。これに刺激されて，入会し，読書研究や読書指導研究を志したものも少なくなかった。研究会の講師は，さまざまな専門分野の読書研究家であり，その点わたしにとっても，読書研究の広い視野を獲得する上に有効であった。

3　初期の協同研究と研究大会

すでに述べたように，学会創立初期には盛んに研究会が開かれ，これが起爆剤となって，協同研究が始まった。その研究成果は，研究大会に報告されると共に，研究論文として「読書科学」につぎつぎに掲載された。

第1回研究大会は，昭和32年11月1日，2日に，東京教育大学で開催された。この大会第1日目の午前中に，講演と5つの協同研究部会中の3つの部会の発表があった。それは，「文学作品への接近と理解調査」（発表者・岡本奎六），「読書の社会調査」（室伏武），および「児童雑誌研究」（阪本一郎）である。最初の「文学作品への接近と理解調査」は，望月久貴を長とする部会であるが，その成員の一人であるわたしが発表することになった。

第1日の午後と第2日の午前にかけては，5つの分科会にわかれて，30点の研究発表が行なわれた。それらの

分科会の名称は，「読書指導の実践」，「文学教育と道徳教育」，「児童・青年の読みもの基準」「読書の基礎的研究」等である。このうち，「読書の基礎的研究」の分科会で，わたくしは個人研究の発表を行なったり，司会者の一員となったりした。

第2回研究大会は，翌昭和33年11月に開かれた。この時は，6つの分科会に分かれて，昨年同様30点の研究発表が行なわれた。分科会名は，「マス・コミへの接近」，「マス・メディアの相互作用」，「マス・メディアの効果の比較」，「読書教育」および「マンガの実態」である。この第2回大会では，協同研究の発表は分科会の中で行なわれた，村石昭三を長とする読書心理部会の協同研究に引き続き行なわれたパネルディスカッションに，わたしはパネラーの一人として加わった。別に個人の研究発表を行なうと共に，分科会の司会者の一員ともなった。

こんなわけであって，初期の研究大会は，わたし個人にとっても，研究発表を盛んに行ない，それが刺激となって研究意欲をさらに湧き立たせる機会となった。

初期の盛んな協同研究の成果は，研究論文として「読書科学」にも掲載されている。同誌の第1巻第2号（通巻第2号）から第7巻第4号（通巻第30号）までの間には，10点を越える協同研究の論文が掲載されている。このうち通巻第6号までにわたしが執筆した分だけでも3点の論文がある。他方では，研究論文を単行本の形で出版することも行なわれた。牧書店から昭和33年5月に出版された「読書による人格形成」はその最初のもので，その後も数点出版されている。

4　会長のころの読書学会

わたしが，日本読書学会の会長（理事長）に推されて就任したのは，昭和53年4月から昭和55年3月までの2年間である。このうち，最初の10カ月は海外出張でスタンフォード大学に行っていたため，滑川道夫副会長が代行された。そういうわけで，会長自身は無力であったが，つぎのようにさまざまな学会行事が盛んに行なわれていた。

(1)　「読書科学」の発行

初年度（昭和53年度）には，遅れて未発刊だった昭和52年度分の第21巻をあわせて4号分発刊すると共に，昭和53年度分の第21巻を2号分発刊した。

第2年度（昭和54年度）には，昭和53年度分である第22巻の残り2号分を発刊すると共に，昭和55年度分の第23巻を，第4号まで全部発刊した。つまり，2年間に3カ年分を発刊したということで，編集部を中心とした努力の成果ということができよう。なお当時の編集者は，阪本敬彦，嶋路和夫，高木和子，野地潤家，福沢周亮，増田信一，湊吉正，室伏武，ション・ダウニング，ドナルド・レトンの諸氏であり，専門分野も地域も広範囲にわたっていて，望ましい人選がなされている。

(2)　研究大会

初年度（昭和53年度）は，第22回大会で10月に，次年度は，第23回大会で8月に行なわれた。

初年度の研究主題は，「新しい読書生活の設計」である。例年のことであるが，この研究主題を主題にしたシンポジウムが行なわれた。その発言者は，大村はま，倉沢栄吉，林四郎，福沢周亮の諸氏である。講演も例年通りで，講師は外山滋比古氏であった。個人研究の発表者は9名で，例年よりやや低調である。

次年度の第23回大会の研究主題は「読書学の創造と読書教育」で，同じ主題のもとで行なわれたシンポジュウムは，司会：望月久貴，発言者：井上尚美，関口安義，田近洵一，福沢周亮の諸氏である。講演の講師は岡本奎六で，個人研究の発表者は17名となり，前年度の約2倍となった。

17名という発表者数は，最近では多い方である。発表者の量をもって必ずしも貴しとするわけではない。しかし，会員の多くが年に一度の大会には参加し，しかもその研究を発表するということは，発表者にとっても参会者にとっても研究意欲を高めることになる。

学会発足の頭初は，協同研究が組織的に行なわれ，その発表も研究大会を魅力あるものにし，参会者を増やす上に役立っていた。研究大会を魅力あるものにするため

には，シンポジュウムや講演と共に，研究発表を盛んにする工夫が必要であろう。

(3) 公開研究会

初年度は，7回公開研究会が開かれた。開催された月と講師名は，つぎのとおりである。

昭和53年6月ジェイムス・M・フルカワ，7月増田信一，9月井上尚美，11月藤田圭雄，12月生駒正美，昭和54年1月芳賀純，3月出雲路猛

次年度の公開研究会は8回で，つぎのとおりであった。

昭和54年5月岡本奎六，6月滑川道夫，9月湊吉正，10月岩崎本佳，大前知子，他に講演を深川恒喜，11月井上尚美，昭和55年1月首藤久義，2月島岡丘，3月岡本奎六。

なお，10月の公開研究会は大阪で行なわれ，本部からは，深川恒喜，増田信一両氏にお骨折りいただいた。地方での公開研究会を受け入れ側の熱心な地方会員と一体となって今後盛んにする必要があろう。そのことは，地方会員にも充分満足いただける学会造りをするためにも，全国的に，熱心な多数の会員を獲得するためにも必要なことである。

(4) 海外交流

初年度は，昭和53年5月にヒューストンでＩＲＡ年次大会が開かれ，阪本敬彦の他に渡米中のわたくしも出席した。

7月には，第15回英国読書学会に阪本敬彦が参会。8月には，ハンブルグの第7回世界読書会議に45名のわが国の代表団が参会した。研究発表者は，その中のつぎの8名である。

滑川道夫，倉沢栄吉，倉沢佐紀子，阪本敬彦，高木和子，福沢周亮，出雲路猛。

次年度は，昭和54年8月にホノルルで第1回日本・ハワイ読書会議が開かれた。代表団は29名で，このうち発表者は，村石昭三，滑川道夫，倉沢栄吉の三氏である。

上記のように，海外交流も順調に行なわれ，それ相応の成果をあげることができた。

(5) 読書科学賞

初年度は，第12回読書科学賞が尾原淳夫，読書科学研究奨励賞が斎藤稔子，増田信一の諸氏に贈呈された。尾原の読書科学賞は，永年にわたる学校図書館運動の功績と読書指導に対する研究と実践への貢献に対して贈られた。斎藤の読書科学研究奨励賞は，「読書科学」79号掲載の論文「再認課題における読書不振児の言語符号化について」，増田のそれは同じく第78号の論文「読書感想文の評価基準」に対して，それぞれ贈られた。

次年度は，第13回読書科学賞が望月久貴，読書科学研究奨励賞が有沢俊太郎の両氏に贈られた。望月の読書科学賞は，「読みの教育理論と実践的研究，および会創立頭初からの一貫した読書学建設活動への貢献に対して贈られた。有沢の読書科学研究奨励賞は，「読書科学」81・2号の論文「外国語としての日本語の読みについて」に対して贈られた。

このように，読書学建設に向っての功労者や，すぐれた研究者がつぎつぎに現われるということは，お互に喜びにたえない。

5 学会の今後の発展のために

学会を今後一層発展させ，学際的研究としての読書学を建設するためには，今後どのような活動を必要とするであろうか。

第1は，従来からの中心的な学会事業である「読書科学」の発行，研究大会および公開研究会の開催に一層力を入れ，これらを充実させることである。これらの日常活動は，会員の研究意欲を増進させると共に，研究に対する目を開かせてくれるからである。

「読書科学」の編集については，なるべく広い地域に渉り，熱心な地方会員に編集者として協力を願うこと，同様に広いさまざまな専門分野の研究者に，編集者として協力を願うことである。しかも編集がマンネリにならず，絶えず新鮮な血液を導入し，また新しい投稿者を発掘するために，改選期ごとに一部編集者の入れ換えを行なうことが望ましいであろう。

従来これらの点が適切に行なわれていなかった，という意味ではなくて，今後一層これらの点に留意する必要がある，ということである。

研究大会については，学校や社会の関心事となっている主題について，シンポジユウムを持つことも大切であろう。読書学の創造について，討論会を開くことも大切であろう。しかし何よりも，多数の会員が参加して，自由に研究発表ができるようないくつかの分科会が必要であろう。当面の目標としては，あらかじめ4～5分科会を公表しておき，20～30名の発表者を集めることをめざすべきであろう。

公開研究会は，これまで同様いろいろな専門分野の講師による研究会を持つと共に，他方では，地方における公開研究会を開拓すべきであろう。そのためには，ある程度会員がまとまっていて，しかも熱心な会員のいる地域を必要とするが，逆に公開研究会を持つことによって，そのような地域造りが可能になるであろう。

第2に，学会の今後の発展のためには，会員の多様な研究慾求に応えるようなキメの細かい事業計画を必要とする。たとえば，会員の中には研究主題は持っているが，適切な研究計画の立案に苦慮している場合もあろう。このような個人ないしは団体に対しては，学会として計画の立案を援助する機関を持つことも考えられる。また会員の中には，研究意欲はあるが，労力的，資金的に単独研究を行なうことが難かしい，という場合もあろう。このような会員に対しては，学会として協同研究を企画し，その一員に加わったり，研究協力者となる道を開くことも考えられよう。

（筆者は昭和53年から55年まで会長）

第 2 部

読書科学研究の25年

——「読書科学」論文から見た読書科学研究史——

ま え が き*

「読書科学」は，本号で通巻100号を迎えた。この間に本誌に掲載された論文は，原著368，資料・展望その他180，合計548の多きに達する。

第1号から第99号までのうち，〔注〕に列記した各号は特集号の形で編集されている。即ち，11点，通巻号数でいえば13号分が特集形式をとっており，残りの号，即ち全体の9割に近い号数は，会員の投稿によって編集されてきたことになる。

投稿によって編集されている号の内容は，実にさまざまであり，後進の研究者が特定の主題の論文だけを検索しようとするには不便である。そこで，100号記念事業のひとつとして，「読書科学」掲載論文から見た読書科学研究史をまとめて，ぼう大な論文の交通整理をしようとした。執筆者は出雲路猛，阪本敬彦，福沢周亮，増田信一の4名で，次ページ以下のように分担をきめた。4人の分担領域に含まれない諸論文も，整理の必要があるものについては，適宜いずれかの項目に含めることにした。4人がカバーしたのは，第1号から第99号までである。

執筆に際して4人が申し合わせた事項はたくさんあるが，中で最も重視されたのは，研究の流れが明らかになるように，各執筆者の考えのもとにまとめるという事である。そこで，どの論文を拾い出すかについても，執筆者の判断に全面的に任せ，各自が分担領域内の流れを見きわめながら行うこととした。拾い出す論文は「原著」を中心とするが，必要と認めた場合には，資料その他の論文を加えても良いこととした。

以上のような方法をとったので，でき上ったものは，観点，選択，まとめ方，そのほかすべての面で執筆者に責任がある。また，流れを重視したために，単独で孤立しているようなタイプの論文は，優れたものであっても拾われない場合があったかもしれない。このことは，前もってお断わりしておかなければならない。

文中に，青木(10—1)のように記されている論文は，第10巻第1号に掲載された論文であることを示す。巻末の文献目録は，心理学関係はひとつにまとめ，国語教育関係のものは，執筆者ごとに附してある。

〔注〕「読書科学」の特集号

第4号（2—2）「特集・文学教育」
第10号（3—4）「漫画研究特集」
第18号（5—4）「マンガ研究特集」
第22・23号合併号（6—4，7—1合併号）「特集・性格形成の適書目録」
第25・26号合併号（7—3・4号合併号）「特集・性格形成の適書目録」
第29号（（8—3）「特集・読書療法」
第30号（8—4）「特集・1964年の読書科学展望」
第34号（9—4）「特集・1965年の読書界」
第38号（10—4）「特集・1966年の読書界」
第42号（11—4）「年報・1967年の読書界」
第46号（12—4）「年報・1968年の読書界」

* Part 2. A quarter century of reading research: A compilation of selected papers from "The Science of Reading," 1956-1982.

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

読書科学研究の25年（I）
——読書理論・読書指導を中心に——*

東京学芸大学附属大泉中学校
増田信一**

はじめに

ここでは，国語教育関係の中の，読書理論・読書指導・図書館指導に関する研究物を対象としてみていくことにする。『読書科学』に掲載された国語教育関係の研究物は非常に多く，その中のどれを，ここでとり上げたらよいのか迷った。そこで，「読書科学研究史」を構築するにあたって，より基礎的な研究に限定して考察していくことにする。もれた研究物の中にも，基礎的な研究として注目したいものがあるのはもちろんである。

1 「読み・読書」そのものに関する研究

一口に「読書指導」といっても，その概念規定は一定していないから，人によって，頭に描く像はまちまちである。「読書指導と読解指導」「読書指導と鑑賞指導」「読書指導と読書教育」など，なかなか共通理解が得られないままに，それぞれの用語が，それぞれの立場で使われている。

「読書指導と読解指導」の関係について，望月（1—2）は，従来の読みの指導の中心であった「読解・鑑賞」は，学習者自身の読むことの経験の実態に即していなかったという反省から，一回の読みで「達読」できるようにすることが大切であると位置づけ，そのような経験を可能にする能力を分析し，そのうちの特定の能力をとり上げて指導することが必要であると提言している。「読みの指導形態」は「叙述→文脈→大意→主題」という順序によってなされ，読みの実態においては一回限りの達読法によるのであるが，指導の場面においては，数回の読みによって，分析的に指導するのだとしている。

「読みの意味」そのものについて，増田（14—3・4）は，読むという作業は，表面的には文章に書かれた内容を読みとることであるが，内面的には自分自身をどのように変革させ，人間的に成長させていくかということであるとし，これを徹底させなければ，ほんとうの「読み」の活動は達成されないとしている。そして，この指導は，すべての教師が心がけるべきであり，特に国語科を担当する教師にとっては最も本質的な指導であると述べている。

「読書と読解」との関係について，阪本（10—2）は，「読書」という用語の概念規定に関して，心理学者と国語教育研究者との間に大きな差のあることを指摘し，「読みの過程」をくわしく分析していき，「広義の読書」を次の三つの機能段階にまとめている。

1. 文字記号を意味化する読書—読みの基礎能力
2. 書き手の経験を読む読書—読解指導の対象
3. パースナリティの適応活動としての読書—狭義の読書指導の対象

そして，これらの指導を総称するときは「読書教育」と呼びたいとしている。この問題は，今だに共通理解に達しておらず，今後，いろいろな説が出てくるものと思われるが，阪本の論はその出発点となるべきものであると

* A quarter century of reading research : A compilation of selected papers from "The Science of Reading," 1956-1982 ; (I) Reading theories and the guidance of reading.

** MASUDA, Shinichi (Oizumi Junior High School, Tokyo Gakugei University)

思われる。

国語教育の実践面で，大きな足跡を残しつつある大村はまの「読書指導観」について，古矢(24—4)は，次のように紹介し，大村理念の精髄だとしている。

みなさまのいわれる読解指導は，読書指導の中の一部だと思います。ほんとうは読書指導だけでいいわけです。

「読書指導と鑑賞指導」の関係については，増田（13—1・2）が，西尾実の鑑賞指導についての三分類をとり上げ，西尾の言う「第三次鑑賞」(読み手が主体的な立場で能動的な価値判断をする批判的な段階）は，読書指導の中心的な事項であるとしている。そして，従来使われてきた「鑑賞」という用語は，この段階より以前のものであるとし，西尾の「第三次鑑賞」を「鑑賞」と呼ぶよりも「読み手と読書資料との対話」としたいと提案している。

「文学教育の問題点」について，滑川（2—2）は，言語教育の地盤を失った文学教育などというものは，もはや考えられないとし，主題と関連して，問題意識が表面に現われ，「話し合い」の中心になってみんなで考えていくという形は，文学教育における「集団的思考」であるとして，「集団思考」の大切さを呼びかけている。

ＩＲＡの会長として来日したこともある Mary C. Austin の読みの理論について，有沢(20—4)は，Austin の考えを次の五つにまとめている。

①子どもの成長・発達という観点から，過去の読みの教育（読みの教材，読みの教師，読みの方法）を批判し，多くの提言を行なった。

②子どもの全面的な成長・発達ということを実現するために最もふさわしい読みの方法（治療読み・個別読み）を発見し，その基本的理念をうちたてた。

③社会的に機能していく方法として読みを考えることと，人間形成の方法として読みを考えることとは，矛盾しない一つの考え方である。

④文学・児童文学の読みにも①～③の考え方がそのままあてはまるという点で，それはわが国の「鑑賞指導」と「文学教育」において行われる読みとまったく異質な読みとなっている。

⑤読みの教育の実際面や具体的な方法にも詳しく，理論と実践が見事に調和している。

日本では，このように大きな仕事をした人は，これまでには存在しないが，彼女のような大きな視点に立って，これまでの読書指導を整理し，新しい方向を導きだす動きが出てきてほしいものである。ここにとり上げた以外の研究にも，「読み」や「読書」の意味に言及したり，読書指導のあるべき姿について述べているものはあるが，理論化されるまでに至っていないのが惜しまれる。このへんに，日本の読書科学研究がまだ未成熟な状態に放置されている最大の原因があると思われる。

2　歴史的研究に関する研究

1955年に『読書科学』が創刊されて以来，読書科学に関する歴史的研究はきわめて貧弱である。実態調査や実践研究ばかりが多い実情からすると，「読書教育学」が構築されるのは，まだ先のことであろうとする観をいだくのは，私だけであろうか。

読書指導の実態について考えるとき，それが国語教育史の流れの中でどのような位置を占めるのかということが話題になる。「国語教育史要」については，増田（23—4）が，6期に分けてそれぞれの特色を述べている。

Ⅰ　学習者不在の古い一般教授法期（1868—1882）

Ⅱ　欧米教育思潮を国語教育に模倣した時期（1883—1908）

Ⅲ　指導法の実践的な工夫期（1909—1921）

Ⅳ　国語教育理論の確立期（1922—1945）

Ⅴ　教科構造探究期（1946—1957）

Ⅵ　国語学力再発見期（1958—　）

これを「読書指導の現状」について考えてみると，いったい，どの期に相当するのであろうか。

公共図書館側の動きについて，清水(13—3・4)(14—3・4)は，Ｌ.Ｙ.Ｌ（青年図書館員連盟）の結成とその活動の意義について述べている。Ｌ.Ｙ.Ｌは昭和２年に

阪神地区の有志によって設立され，近代的な公共図書館にするための運動を展開した。清水は，いろいろの活動の中で，「児童図書目録」と「児童図書件名標目表」の作成が，児童の読みの場を発展させる大きな要因となったと評価している。

阪本ら（8—1）は，東京高等師範学校附属小学校発行の月刊雑誌『教育研究』（1904年～1942年）について，読書指導の問題点がどのように変遷してきたか検討している。「読書指導の問題を知るのに役立つと思われるもの」はわずか29編であり，読書指導に対する関心の低さがまず問題とされている。その上で，それぞれの時代の問題点となったところを指摘している。特に注目すべきものとしては，次のものがある。

1906年　芦田恵之助「少年読物について」
1919年　馬渕冷佑「現実談を読ませよ」
1922年　田中豊太郎「童謡と教育」
1924年　斎藤菫雄「道徳教育の資料としての童話」
1924年　中山直太「小さい博士の養成」（読書否定論）
1927年　千葉春雄「読み方における目的の確立」
1928年　小林佐源次「児童図書館経営の研究」
1931年　山内才治「子供の生活と読み物」
1934年　佐藤末吉「読方指導方法の建設」
1937年　飯田恒作「読方指導と児童の感想」

いずれも，当時の国語教育界に大きな影響を及ぼした人たちの論だけに，大きな意味をもたらしたであろうと思われる。

具体的な読書指導史の資料の一つとして，阪本（9—1）は，東京府青山師範学校附属小学校の「学校家庭通信」（1903年—1944年，毎年8月を除く各月に発行）に掲載された読書指導関係の記事の抄録を紹介している。記事は43の事項からなり，記事を書いた教師の中には，「阪本一郎」「望月久貴」の名も見える。このような具体的資料は，それぞれの時代にどのような指導が行われて来たのかを知る上で，きわめて貴重なものである。ほかにもこのような貴重な資料はあるはずであり，その発掘が待たれる。

国語教育の実践史の上に大きな足跡を残した芦田恵之助の読書観については，庵逧（20—1）が，代表的な著述である『読み方教授』における読書観の構造をくわしく分析している。その上で，芦田の読書観が岡田虎二郎の影響を受けて形成されていった過程を，豊富な文献資料によって解明している。

倉沢（17—1）は，戦前の著名な研究者4人をとり上げて，「読む」ということがどのように考えられてきたのか考察している。4人とは，Edmund Burke Huey，奥野庄太郎，秋田喜三郎，勝部謙造であり，Huey を除いて，国語教育の主流ではない人ばかりを選んでいる。特に，服部の論——「視る」「考ふる」「わかる」の全体的機構の説——は，国語教育界ではなじみが薄いだけに注目に値する。

山本（19—4）は，秋田喜三郎の国語教育実践理論の現代的意義について論じ，次の3点にまとめている。

(1)　筆者との対話を指向する読みの指導
(2)　読書における内面的指導と自己確立
(3)　学習センターとしての環境整備

(1)はすでに国語教育界の大きな話題となっていることであるが，(3)は学校図書館や教室を学習センター化することへの呼びかけであり，現代の学校教育がとりくむべき課題である。

飛田は「日本近代読書論史序説」にとりくみ，「小泉信三の読書論」（12—1，12—2），「亀井勝一郎の読書論」（12—3），「小林秀雄の読書論」（13—1・2），「三木清の読書論」（13—3・4），「河合栄次郎の読書論」（15—2）について考察している。

3　読みの課程・読書能力に関する研究

「読みの過程」についての研究では，増田（14—3・4）が次の五つの過程にまとめている。

1　文字や語句を認知する過程
2　文章の表現内容を理解する過程
3　文章の内容を感情的に判断する過程
4　読み手が理性的に行動する過程

5　自己を確立する過程

従来の国語教育は，2の過程の指導に比重をかけすぎていたとし，4と5の過程の指導こそが重視されるべきであると強調している。

首藤（19—3）は，「読みの学習は基本的には文字をその子どもの既知の談話へ還元することだ」という立場に立ち，「読みの学習・発達プロセスのモデル」としてコーネルグループの「読みの発達位相」を採用し，それに，日本語における読みの学習・発達プロセスを位置づけている。

⑴第1位相　談話による言語の基本法則と日常生活にとって必要な語彙その他の言語技能の獲得。「絵読み」「読んでもらう読み」「真似読み」「字数読み」

⑵第2位相　書きことばを構成する文字の視覚的な弁別学習。

⑶第3位相　既知の文字と既知の音声との結合。「前・単語読み」「1字読み」

⑷第4位相　文字と音との対応の単位が，単音ないし音節から，語・文節・文へと次第に大きくなる。「逐字読み」「単語読み」「センテンス読み」

これらは，入門期の読みの指導についての分析であり，明治以来の入門期教材の「文字法」「単語法」「音声法」「文章法」「仮名語形法」，それに，「『もじのほん』式音声法」「石井式漢字教育法」などについて，それぞれの検討と統合の視点を追究している。

「基本的な読書能力の分析」について，増田（15—1）は，戦後の『学習指導要領』（22年版・26年版・33年版・43年版）と昭和23年の『学校図書館の手引』に示された読書能力とアメリカにおける読書能力の研究の成果をふまえて，読書能力を次のように分類している。

Ⅰ　読みの基礎的な指導（読解指導の対象）

1　読字力

2　語い力

3　文法力

4　読解力

Ⅱ　読みの応用的な指導（読書指導の対象）

1　読書興味の力（5つに細分）

2　図書選択の力（2つに細分）

3　情報処理の読みの力（6つに細分）

4　楽しみ読みの力（7つに細分）

5　創造的な読みの力（7つに細分）

6　読速の力（2つに細分）

7　読書を反省する力（1つだけ）

そして，30に細分した具体的な読書能力について，学年配当を示している。

平賀（16—3）は，「調べ読みの指導事項」として18項目をあげている。

1　情報の収集・選択に関すること（8項目）

2　情報の処理に関すること（6項目）

3　情報の生産に関すること（4項目）

「調べ読み」は，情報化社会での読みの活動の中心となるだけに，いっそうの具体化が望まれる。

青木（4—3）は，読書開始期指導をする中で「読書レディネスの要因」として14項目をあげ，「読字・読文力の発達段階」を次のように位置づけている。

1　文字意識化の段階（2才）

2　文字習得の段階（3才）

3　文字と語形結合の段階（5才）

4　文字と文結合の段階（6才）

5　文字と文章結合の段階（6才）

6　文・文章習得の段階（?）

そして，読書開始期に与えるべき本の条件について考察している。

国語科における読書指導単元を再構成して長編読書を推進しようと研究を積み重ねている鳴路（17—3）は，「長編の読書能力」として次の5項目を強調している。

ア　遅速調整力　読みのリズム。

イ　持続力　読み通す力。

ウ　停留力　立ち止まる力。時には立ち止まり考える力。

エ　イメージ構成力　描かれている長編の世界を構成する力。部分的なイメージを一連のものとして

つなぐ力。見える力。

オ　総括力　長編を読み終わった時，全体としてとらえ直せる力。まとめる力。

これらの読書能力は，短編読書では身につきにくいものばかりであり，長編読書の場でこそしっかりと育てる必要がある。

読書指導は，国語科だけでなく，すべての教科でとりくむ必要があるが，東京都九小学校グループ研究（4—3）では，昭和33年版の社会科の学習指導要領を分析して，学校図書館の場を使って指導すべき指導事項について検討している。その上で，「図書資料による調べ方の型」を8項目（「わかる」「話合う」「報告する」「比較する」「たしかめる」「ほりさげる」「構成活動する」「批判する」）に分類し，それぞれについて具体的学習活動（3～11）をあげている。更に「社会科学習で要求する調べ方の学年別配当」をあげている。この種の研究は数少ないものだけに，きわめて貴重なものである。

井上（17—3・4）は「批判的思考力」について，アメリカのドレッセル，ショートカ，スミス，ウルフ，ラッセルなどの諸説を紹介して総括し，その上で，アメリカの「批判的思考力テスト」の例を引き，日本でもこのようなテストを作成する必要があると呼びかけている。

4　読書感想の指導に関する研究

読書感想文の指導がどの程度行われているかという問題について，増田（19—1・2）は，全国の小学校と中学校の実践家210人のアンケート結果を報告している。その結果，公約数として，「読書感想文を書かせるのは年に3～4回」「読書ノートや読書カードは定期的に点検してやる」「校内読書感想文コンクールは年に1回実施する」「児童生徒の読書感想文のタイプとしては感じたことを単純に書いたもの」などが浮かび上がってくる。読書感想文を書かせる前の指導としては，小学校のトップが「構想メモを作らせた上で，きちんとした形で書かせる」なのに，中学校では「前から書くことを予告しておく」がトップであり，両者の指導に対する考え方の差がめだっている。

児童生徒の読書感想能力がどのように発達しているかという実態については，増田（21—3・4）が，小学2年・小学5年・中学2年・高校2年を対象に，全国的な規模の調査を実施している。

この結果によると，小学2年では読書感想文そのものを書かせること自体に問題があるし，小学5年でも「読解感想文（内容理解の段階まで）」しか書けない者の数が93.6%も存在していることがわかる。読解感想文程度の者は，中学2年で68.4%，高校2年で39.3%も存在しているから，「読書感想文」という用語を使うことの妥当性が問題になってくる。「読書感想文」というからには，読み手自身の考えが中心にならなければならないのに，本の内容にひきずられたままで終わってしまっている者がこれほど多いのは大問題である。

「読書感想文に見られる子どもの感動点の発達」については，阪本他（10—3）が全国学校図書館協議会主催の全国コンクールの入選作品2800点について調査し，「学年別の感動点の分布」を分析している。

安居（13—3・4）は，読書指導と作文指導の関連という面から読書感想文を位置づけ，読書感想文は，思想を形成していく学習としてもっと力を入れるべきだとして，主体の造型，個性の創造の方向への指導のあり方，学習のくみたて方を検討すべきであると提言している。

「文学作品鑑賞力の評価法」については，本学会の読書教育部会共同研究（4—4）がある。本学会ができてまもない頃（1960年）の共同研究であり，次のような分担に分かれている。

1	客観的方法　(1)散文の部	勝又昌義
	〃　(2)短詩の部	吉沢　洋
2	読書感想文による主観的評価	望月久貴
3	作品比較法	岡田　明
4	読書反応法	岡本奎六

現在では，このような共同研究がおこなわれていないだけに，当時の研究意欲の旺盛さがうかがえる。

「読書感想文の評価法」について，望月（5—3）は次

の評価法を立て，それを実験している。

A　特定の読解過程を手がかりとする重点評価

(1)　表現形態（用字・用語・文法・文体など）に即した感想

(2)　特定段落の局所に即した感想

(3)　すじまたは大意に即した感想

(4)　主題に即した感想

B　読解過程を手がかりとする総合評価

感想文についてAの(1)(2)(3)(4)の各項を評価し，それらを総合する。

増田（20—4）は「読書感想文の評価基準」を，「問題意識」「読書生活」「作文能力」の三つの柱に分け，「問題意識」のうちの「テーマ性」を，

A　単純反応の段階（A1～A4）—主題がない

B　内容理解の段階（B1～B4）—主題が低い

C　自己判断の段階（C1～C4）—主題が高い

D　行動変革の段階（D1～D4）—生活的である

E　人間変革の段階（E1～E4）

に分類している。「主題」とは，「読書感想文の主題」であり，読書材の主題と同一ではない。この評価基準では「読書生活」の実態まで評価に含めようとしているところに特色がある。読書感想文の指導については，いまだに「書かせっぱなし」の状態が続いているだけに，指導の深められることを期待したい。

5　読書活動の具体的な指導法に関する研究

「読書指導計画」は読書指導を推進するにあたってまず出発点となるものであるが，水野（14—3・4）は，小学校の学級担任が読書指導計画を作成するための試案を提案している。まず，計画を作成するにあたっての基本方針として，次の5項目をあげている。

(1)　読書を生活の中に投影させるものであること

(2)　学級担任が指導するためのものであること

(3)　指導効果のあがるものであること

(4)　創造性・弾力性に富んだものであること

(5)　集団と個の両面を尊重したものであること

そして，小学校5年の「読書指導計画例」（8ページにわたる大部なもの）をあげている。見出しの項目は，「生活の中の読書指導」「図書館の利用指導」「実践記録」の三つであり，最初の「生活の中の読書指導」は更に「単元」「目標」「指導内容」「指導上の留意点」「指導方法(場)」「評価」「資料となる図書・作品」に細分されている。このような本格的な指導計画が，現場に根づいていくことが必要であると思う。

橘高（16—1）は，高校における「読書指導の体系とその実践」を紹介している。その見出しを抜きだすと，次のようになる。

1　国語科との連繋

2　読書グループづくり

3　読書会の展開

A　校内読書会，B　ホーム・ルーム読書会

4　読書サークルの活動

5　校内読書感想文コンクールの実施

6　読書ノートの活用

7　図書委員活動とその指導

8　教師集団の協力

9　読書相談

このような計画を立てて実施するにあたって，最も重要なことは，全校的な体制作りであり，読書指導の全体像の中で個々の指導を着実に展開していくことである。

幼児期における「読みきかせ」が，子どもの性格・興味・社会性の発達とどのように関与するのか調査したものに，杉山ら（16—4）がある。読みきかせの多い家庭と少ない家庭との比較，読みきかせを開始する時期の違いの比較など，注目すべきデータが報告されている。

片桐（3—4）は「低学年における読書指導の展開」の例として，「つぎたし話の実験」を報告している。教科書教材の発展として「つぎたし話」を作るのである。「つぎたし話」に絵を加え，発表会を聞き，最後は文集の形にまとめている。

読書活動を活発化させるための方法の一つとして，「読書発表会による読書興味の指導」を，加藤(13—3・

4）が発表している。この学級読書会の特色は，全員が発表するという点にある。出し物も多種多様で，定期的に（年間15時間）積み重ねていくことによって，読書に対する積極的な姿勢を作らせようとする試みである。

読書量を多くさせることも，読書指導の重要な一面であるが，有定（3—1）は，伝記の指導を通して「国語科における多読指導の体系化とその方途」について発表している。

子どもの論理的思考力を向上させる方法の一つとして，合田（9—2）は，『ごんぎつね』と『杜子春』を例として，読書の過程をプログラム化するための実験シートを作成し，実験結果を報告している。このような試みが数多く出てきて，一つの方法として確立していくことが望まれる。

思考力を高めるための読書指導の方法はいろいろ試みられている。楮本（8—1）は「Subject Reading の試み」を発表している。この研究の特色は，教師がジャンル別に主題を選定し，指導をすすめている点にある。

伊藤（16—4）は「情報操作能力を高める読書指導」の一つとして，新聞情報を操作する学習活動を展開している。読前の指導では「読書の動機」「問題意識の喚起」「資料の収集・選択」，読中の指導では「知識・情報の獲得・処理・拡充・深化」，読後の指導では「定着」「応用・発展」などの事項をあげて，その系統化をはかろうとしている。

長（25—4）は「小学校高学年における読書レポートの指導」の実践報告のまとめで，「読書レポート指導を推進する上での留意点」を5項目あげている。

1　情報処理の技能を身につけるための，低学年よりの系統的な指導が必要である。

2　資料センターとしての学校図書館の役割を果たせるよう，資料の充実をはかる。

3　国語科の読解及び作文（表現）力の基礎技能を身につけるための指導が必要である。

4　児童の能力差とそれを少なくするための学習形態を工夫する。

5　訓練をくり返し行うことがたいせつである。

これからの読書指導をささえていく上で，どの項目も重要なものばかりである。

個人の読書力を高めるための個別指導については，皆川（21—3・4）が，集団指導と個別指導の実践を対比させながら，両者の得失を考察している。集団指導では扱いきれない子を個別指導する際のポイントとして，

①　読みの基礎能力をつける。

②　長編を読み通す力をつける。

③　能力に応じた読後の処理をさせる。

の3点をあげている。

学習の個別化をすすめていくと，「個人学習」の形態をとることになるが，矢田（16—3）は，それを読書指導にあてはめようとしている。そして，次の学習過程，

①　目標の設定

②　個人活動

③　フィードバック

④　まとめ

に重点をおくべきだと提案している。

以上，非常に雑然としたものになってしまったが，『読書科学』の第1号から第98号までに掲載された，国語教育関係（読書理論・読書指導・図書館指導に関するもの）の研究物にあたり，考察を加えた。「読書科学研究史」の一里塚となれば幸いである。

引用文献

青木照明（4—3，1960年）　読書開始期の指導——S児の読書歴から——（33—44ぺ）

有定稔雄（3—1，1958年）　国語科における多読指導の体系化とその方途——伝記の指導を通して——(5—12ぺ)

有沢俊太郎（20—4，1977年）　Mary C. Austin とアメリカの読みの教育——1960年代の読みの理論——(112—121ぺ)

庵逧巌（20—1，1976年）　芦田恵之助の読書観（8—21

ペ)
伊藤みつ子 (16—4, 1973年)　情報操作能力を高める読書指導 (139—143ペ)
井上尚美 (17—3・4, 1974年)　「批判的思考力テスト」について (108—115ペ)
楮本良平 (8—1, 1964年)　児童の思考を高める読書指導——Subject Reading の試み—— (16—20ペ)
片桐カヲル (3—4, 1959年)　つぎたし話の実験——低学年における読書指導の展開—— (45—49ペ)
加藤薫敏 (13—3・4, 1971年)　読書発表会による読書興味の指導 (164—171ペ)
橘高洋一 (16—1, 1972年)　高校生に読書意欲を持たせるための一つの試み (26—32ペ)
倉沢栄吉 (17—1, 1973年)　「読む」とは何か——戦前の諸家の論説を中心に—— (1—6ペ)
合田修 (9—2, 1965年)　読書指導の実験的研究——シートを利用して—— (19—27ペ)
阪本一郎 (9—1, 1965年)　読書指導史の資料 (41—50ペ)
阪本一郎 (10—2, 1967年)　「読書」と「読解」(1—7ペ)
阪本一郎　岩井皓子　関博子 (8—1, 1964年)　読書指導の問題点の変遷——雑誌「教育研究」に見る—— (43—53ペ)
阪本一郎　林久美子　亀井道子 (10—3, 1967年)　読書感想文に見られる子どもの感動点の発達 (1—9ペ)
嶋路和夫 (17—3・4, 1974年)　国語科における読書指導単元の再編成と長編読書の指導 (94—99ペ)
清水正男 (13—3・4, 1971年)　L.Y.Lとよみの場について——とくにL.Y.L結成を中心に(2)—— (122—131ペ)
清水正男 (14—3・4, 1971年)　昭和前期わが国のよみの場の発展について——とくに児童図書目録と児童図表件名標目表—— (77—81ペ)
首藤久義 (19—3・1975年)　「読み」の学習と教育——メソッド統合の視点——日本語の表記体系と子どもの学習・発達過程に即して—— (69—85ペ)
杉山良也・斎藤高子 (16—4, 1973年)　幼児期における読みきかせの関与に関する研究 (121—130ペ)
長知子 (25—4, 1981年)　小学校高学年における読書レポートの指導 (144—153ペ)
東京都九小学校グループ研究 (4—3, 1960年)　小学校の新指導要領における読書指導 (16—21ペ)
読書教育部会共同研究 (4—4, 1960年)　文学作品鑑賞力の評価法 (5—28ペ)
滑川道夫 (2—2, 1957年)　文学教育の問題点 (10—14ペ)
飛田文雄 (12—1, 1968年)　小泉信三の読書論について——日本近代読書論史のための覚え書きその1 (1—6ペ)
飛田文雄 (12—2, 1969年)　小泉信三の読書論について(二) (30—35ペ)
飛田文雄 (12—3, 1969年)　亀井勝一郎の読書論について (10—16ペ)
飛田文雄 (13—1・2, 1970年)　小林秀雄の読書論について (38—42ペ)
飛田文雄 (13—3・4, 1971年)　三木清の読書論について (132—138ペ)
飛田文雄 (15—2, 1972年)　河合栄次郎の読書論について (44—50ペ)
平賀増美 (16—3, 1972年)　調べ読み読書の指導 (87—92ペ)
古矢弘 (24—4, 1980年)　大村教室の読書指導論——実践の基底をなすもの—— (142—146ペ)
増田信一 (13—1・2, 1970年)　読書指導と鑑賞指導 (50—56ペ)
増田信一 (14—3・4, 1971年)　読書指導の基本問題(Ⅰ)——「読むこと」について—— (69—76ペ)
増田信一 (15—1, 1971年)　読書指導の基本問題(2)——基本的な読書能力の分析—— (29—37ペ)
増田信一 (19—1・2, 1975年)　読書感想文指導の現状——小・中学校の実践家210人のアンケートから——

(13—23ぺ)

増田信一（20—4，1977年） 読書感想文の評価基準(122—129ぺ)

増田信一（21—3・4，1978年） 読書感想能力の発達——読書感想文にあらわれた読み書き能力——（65—74ぺ)

増田信一（23—4，1979年） 国語教育史要——国語教育の変遷・現状・問題点——（121—129ぺ)

水野寿美子（14—3・4，1971年） 小学校読書指導計画作成にあたっての一つの試み——学級担任のための指導計画——（82—95ぺ)

皆川和子（21—3・4，1978年） 読書力を高めるために集団指導と個別指導をどのように進めるか(83—90ぺ)

望月久貴（1—2，1957年） 読解中心から読書中心へ(6—10ぺ)

望月久貴（5—3，1961年） 読書感想文の評価法（25—31ぺ)

安居総子（13—3・4，1971年） 読書指導と作文指導の関連——読書感想文を中心にして——（139—153ぺ)

矢田勉士（16—3，1972年） 個人の能力に応じた読みの指導——個人学習の試案——（100—106ぺ)

山本稔（19—4，1976年） 自己の啓発と創造をめざす読書指導の展開——秋田喜三郎「国語教育実践理論」の現代的意義——（105—111ぺ)

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

読書科学研究の25年(II)
——文学研究，教材論を中心に——*

東京都新宿区立落合第四小学校
出雲路猛**

はじめに

1955年「読書科学」は，創刊以来，四半世紀を超え，本号をもって100号を記念することになった。本学会が創設される頃から世は情報化時代を迎えており，学会の研究活動も勢い学際的な傾向と，積極的なその主張を入れて研究活動を続けてきた。本号においては，初めて国語教育関係の研究の中から，文学論および文学研究的な論文，教材論的な論を，特に取り上げ，読書指導，読解指導のワク内とは別の視点から，学会の業績をふり返ってみることにした。教材論については，なお読書指導，読解指導の領域において重複することをも考慮して，基礎研究に属すると思われる論に限ってふれることにした。

1 概観

読書指導の研究が進展することと平行して，子どもの読み物に関する関心が当然のことながら胎頭し，日本における児童文学作家の作家活動は，1960年代を啓機に，1970年代にかけてはその隆盛期を迎えている。これらの作品は，主として，学校図書館に迎えられ，学校図書館活動の興隆と共に作品として商品化された同書が，子どもの本の本流になろうとしてきたのである。

従来は，子どもの本のモデルが，世界名作ものなどに代表されていたが，趨勢は次第に子どもの本のオリジナルを児童文学へ移して行く傾向をみせていた。1955年以降学校においては読書指導の研究が深められ，あわせて地域の読書運動が全国的に拡大すると共に，児童文学の読解が，内容的な評価と共に浸透していったのである。

読書科学（12—4）は，年報1968年の読書界を編集しているが，第二代日本読書学会会長阪本一郎は，冒頭所見において「読書教育」という用語を用いている。1968年（昭43）は，文部省「小学校学習指導要領」が実施段階に入った年であるが，阪本はこの指導要領の特長の一つに学会が提出した読書指導の強化が取り入れられ，「B読むこと」の指導内容に「読書」に関する事項を強調する線が打ち出されたことを報じている。これは「読解」との分離ではなくて，国語教育のあるべき内容を明確にしたものであるという意味を述べ，「指導要領に細分された指導事項を体系化する必要」を指摘して，「読書教育」という見出し用語による論をしめくくっている。

読書と教育との強いかかわりを主張する考え方は，学校図書館活動の興隆と共に新しい教育的試行を多くの点で示唆してきた。

児童文学研究は，学校教育における読書指導の定着と1970年代にかけて輩出した特色ある日本児童文学作品，翻訳によって新に紹介される世界名品の新鮮な息吹きと，出版技術の向上とに刺激されて，急速に広い関心を呼び覚して行った。日刊新聞が，継続的に新刊の子どもの本の紹介を取り上げたのも，この頃であり世上の関心に答えてきたものである。

* A quarter century of reading research : A compilation of selected papers from "The Science of Reading," 1956-1982 ; (II) Literary research and theories of educational materials.

** IZUMOJI, Takeshi (No. 4 Ochiai Municipal Elementary School, Shinjuku, Tokyo)

また，1968年の「学習指導要領」が読書指導を国語科教育に位置づけたことによって，再び文学教育への声が高まり，文学教材による読み物指導の方法が，各地の研究会場を賑わせてきたのである。この読書指導の内容が，国語科の中では，「説明的な文章」という表現や，「文学的な文章」という表現によって，読解指導の教材，読書指導の教材が仕分けされるような傾向を生じてきた。読書指導の強調と共に，より目的的になった国語科教育の内容は，阪本が当初において指摘していたように，何らかの方法による国語教育の体系化と，総合的視野に立った国語教育のあり方が必要になってきていたのである。これら，一般的傾向とは裏腹に読書科学誌上に，十分な教材論の提出される段階には至っていない。

1963年，日本読書学会がその共同研究によって達成した「性格形成の適書目録」は，多くの問題を含みながらも，国語教育における教材研究の上にその方法論において一石を投じる提案であった。文部省が1964年「道徳教育指導資料」を発表することに先んじて，その先導的試行ともなっている。文学教育にかかわる教材や，これに属せられる文学作品の多くが，道徳教育のための教材として，多くの関心を得るようになるのも，この頃からである。

このような問題提起が行われる一面には，氾濫してきた子どもの本の出版物から，子どもの本の良し悪しを問い，よい本を選ぼうという考えが出てきていた。

子どもの本の良し悪しを，短絡的に二者択一することは危険であるし，できることではない。勢い，内容を読み味いながら作品の価値を問うことになる。しかも価値観の多極化はいっそう選択の基準を求めることを困難にしていた。しかし，文学を評価し，ある目的に向けて適書とする判断方法の研究は，児童文学にも文学としての内容を問い，作品に文学的な価値を見出すための客観的基準が求められていた。

児童文学論は，子どものための適書選択という問題含みの作業を超えて，文学研究の課題として，子どもの本の世界から胎頭してきたのである。

2　文学と読者の反応に関する研究

日本読書学会は「読書科学」(1—2) において (1957年) 青年の文学作品への接近と理解に関する研究を載せた。この研究は以後4号にわたってプロジェクトチームによる作業を通して研究結果を報告している。これは夏目漱石の作品により，読者の反応を調査し，読者が，どのような方法で作品に接近し，かつ，これを理解していったか，「青年は文学作品にどのように接近するか。また，それをどのように理解し，鑑賞・批評するか。この点の実態を明らかにするのが，本研究の目的である」としている。

第一回は作品「坊ちゃん」を中心に行った接近調査とその考察である。調査は，作品に関する知識の伝達経路，知った理由，作品の読み方，読んだ時期，読後感，動機等について，質問用紙により，選択肢の集計を求め，阪本が中心にまとめている。

第二回の報告は，第一回に引き続いて行われたもので漱石の作品から，新たに6作品を選び，この6作品に接近するようすを調査している。被験者を新にし，調査のねらいも接近の学年差，地域差，男女差などを新に加え，6作品にわたる接近の比重を比較しながら，岡本が代表してまとめている。

第三回の報告は，第一，二回の主として作品への接近に焦点を当てた調査研究に対して，主題も「漱石の作品に対する青年の読解鑑賞」と改め，読者の作品に対する理解度に焦点を当てた研究である。この理解調査の結果は，読み方，読速，語彙量，意味理解，段落意識，文脈意識語彙認知，大意把握，主題理解等，読者の読解力を測定する研究方法が駆使されている。望月が代表してこれを報告している。

第四回の報告は，第三回の研究を引き継いで，主題は「読解鑑賞行動を規定する要因の研究」となっており，「読書科学」第2号から4号に渉る研究方向を一歩前進させて，読解鑑賞を規定する要因の研究を行うと，岡本は述べている。研究の原理，および方法は，レビン(Le-

win, K.)の行動方則に因ったとしている。

この一連のプロジェクトチームによる共同研究は，文学作品の読者に及ぼす影響について，また読者の文学作品の受け止め方について，その実態を客観的，実証的に解明したものであった。日本読書学会が，「読書科学」にふさわしい科学研究として，読書における「読み」の基本問題，文学作品鑑賞の測定の方法の問題等について，提案し，学会の頭初において，その本命を期する研究としたのである。

この研究が文学作品を取り上げていることによって，文学が読者および読書生活の基本を占めていることをも示唆しており，国語教育の中で，文学研究の重要性を指摘している。

「文学作品分析の試み」——"チャタレー夫人の恋人"をめぐって——は，文学と情動の関係を客観的に測定した研究である。(2—4)

この研究は，被験者にD. H. ローレンス著，伊藤整訳"チャタレー夫人の恋人"と，春本，およびカストリ雑誌を読ませ，この反応をPGR法（嘘発見機）と質問紙を併用する調査にとらえて，読者の性的興奮度を測定し，比較検証している。宇留野はこの研究において，文学作品の評価の適正を求めようとしている。当時(1958)"チャタレー夫人の恋人"がわいせつ罪に問われ，訳者伊藤整と出版社とが被告とされて世上を騒がせていた時代である。このような事件が，言論の自由を犯かす危険ありとして，原告への非難が，文学作品の評価に対する関心をも高めていた。宇留野もまたこのことに対する正義感を論の冒頭（はしがき）で述べている。

この研究は文学作品の評価のための実証研究である。読者が文章表現を読むことによって生ずる行動や感情に，多くの影響を受ける事実を客観的に突きとめている。これらの影響が，最も端的に表れるであろうと思われた性的興奮の測定によって，心理的影響度を明らかにしたのである。宇留野は「われわれは，作品評価の適正を目ざして評定法（質問紙法）及び皮膚の電気現象を手掛りに作品分析を試みた。前者の方法は，なるべく客観的にという点から露骨性とか嫌悪感等を数量化したのである。後者の方法では，主として情緒反応を手掛りに，読書中の心的状態を明らかにすることにつとめた」と述べている。この実験が，文学作品分析とその正当評価に向けて残された問題点を実験者自ら「われわれの比較に用いた文章は，問題の個所を五分に限って行った。実際場面では，こんな短い文章ばかりはないであろう。また，作品の価値や興味というものは，全体を通じてはじめて完全といい得るであろう」と，文学作品評価のこの検証において最大の弱点を指摘しているのである。しかしともかく，作品評価の方法に，機械的検証の方法もあり得ることへの提案として意義ある研究であった。

文学と読者の反応に関する研究に属する児童文学とのかかわりについて，阪本の「児童文学の鑑賞の心理」がある。(2—2) 阪本はこの論において，Ⅰ児童文学の心理的機能，Ⅱ児童の文学鑑賞につて考証している。

Ⅰにおいては，阪本は，児童文学が子どもに与える教育的効果の見地から，論証においてつぎの点を指摘している。

1　言語能力の発達を助長し，言語生活をゆたかにする。
2　ものの見方，考え方，感じ方を学ぶ。
3　夢を与え，想像力を伸ばす。
4　情緒をうるおし，美的情操を養う。
5　人格的適応を全うさせる。

Ⅱにおいては，子どもの文学鑑賞のあり方を，

1　おもしろいという感じ
2　自己の投射
3　希望的思考
4　行動の自立
5　表現の鑑賞

として論述し，この5においては「文学の鑑賞で大事なのは筆者の表現技術の評価であるが，これは子どもにはほとんど行われない。そこが無能な作家のばっこを許す盲点になっている」と指摘し，児童文学が教育的見地からも，秀れた作家による高い文学的レベルへの向上が要

求されていることに触れている。

因に，「読書科学」(2—2) は，創刊以来第4号目として，「文学教育」を特集している。この号は総じて，文学の教育におよぼす影響について，問題点や人間形成とのかかわり，および，教育における指導技術の問題等を挙げて特集の内容としている。

絵本と幼児の反応に関する研究は，松本 (5—1) がとり上げた「幼稚園における絵本の実態」が，読書科学で幼児についての研究としてとり上げた論の嚆矢である。

この後，幼児と読書とのかかわりを絵本を対象に行った研究が，幾つか挙げられる。

岡田は「幼児の絵本に対する反応」(9—2) の研究で2才1ヶ月～3才10ヶ月にわたる1幼児を長期間の追跡調査によって，絵本に対する幼児の反応を明らかにしている。ここでは，幼児の言語反応，動作の反応，飽和（あきる）までの時間，字数とのかかわり等について，かなり精密な調査と分析がおこなわれている。さらに岡田は，幼児の読書への発達段階に関する仮説的提言をしており，あわせて，現行絵本の批判にも触れている。

「絵本と子ども」(12—2) では，阪本らが幼児の読書実態調査としてまとめている。出雲路ら (19—1・2) は「絵本に関する母親の意識調査」をまとめている。抽出した5つの公立幼稚園の幼児を対称に，幼児の絵本への接近が母親の絵本への関心に大きく影響されることを指摘し，予想した母親の関心度の低さは，調査結果からみてむしろ逆の結果を発見し，母親が，かなり高い意識をもって絵本を選択し，また，高い評価意識を持っていることを明らかにしている。この調査は共同研究によるものであるが，日本の母親の教育レベルの高さを示すものとして，絵本の内容の向上と，幼児への教育的な働きかけの大きいこととに，対外的な注視を集める研究であった。また出雲路は1幼稚園内の共同研究として，「幼児と絵本のかかわり合いに関する研究」(24—1) を発表している。これは，幼稚園が教育環境として絵本を積極的に幼児の身近かに配置することにより，幼児にさまざまな働きかけをし，幼児の集団的な生活を通じて，個々の変容にかなり大きな影響を与えているということを検証している。このための調査は定期的に行う読み聞かせにより，補助者が，集団の中で表れる幼児の状態を記録していく方法によっている。この調査は1年間の長期間にわたり，記録を採って分析し，検討していったものである。継続的な観察記録のために選択した絵本は，幼児達が関心を示すであろうと思われる作品を意図的に扱っている。結果はそれぞれの絵本に対する評価になっている。したがって，向後，絵本を児童文学の一部と考えようとする場合，文学としての評価に，幼児の反応を内容としていくための実験ともなっている。

3　児童読物としての作品研究

読書の問題が，読者（読み手）の側に当てた研究の進められていく一方，作品研究に焦点を当てていく研究も進められてきた。やがて，これらの研究は，作品そのものを論じていく文学論にもなっていく。

読者の心理的啓発や，ひいては人格形成にかかわる教育的な効果の関係を究明する研究のため，「性格形成の適書目録」を作成する標準読み物研究特別委員会が，日本読書学会に創設された。阪本は「読み物による性格の形成と読書療法」(6—4・7—1) を発表し，同号によって「子どもの性格形成の適書目録〔1〕低・中学年用」が発表された。日本読書学会標準読み物研究特別委員会は，この適書目録〔2〕高学年・中学校用を (7—3・4) で完成している。これは適書選択の基準を性格標目体系表に表し（第1部），性格索引（第2部）に対応して，作品リスト（第3部）が挙げられている。「子どもの性格指導の立場から，その指導目標となるべき性格標目を立て，おのおのの性格標目の指導に利用できる作品を求めるという順序をとった。(阪本)」と解説している。教育的な目標をはっきり掲げて，これに効用する作品のリストアップに関する研究であった。

このような実用的な研究の結晶がまとまる以前に，子どもの読み物としての作品の研究が始められている。「児童読み物に関する一考察——児童向け世界名作物語

の検討――」(3―2)の本田の研究は，成人対象の文学作品（主として欧米文学，紫式部を一部取り上げている）が，童話化（本田）して，児童文学界に流入している現象の要因を究明し，童話化した作品と原作との作品の比較を試み，児童に与える影響を検討すると述べている。これは，子どもの本の本質，児童文学のあり方について，現象的な問題からの接触の仕方ではあるが，その本質論に低触する重大な提案であった。つまり，児童向けに作品を改作することの是非を問い，児童向けの故に文学的な価値がゆがめていく子どもの本の課題を突きとめているのである。これについては，後に，伝記読み物の貧困性にもかかわって，子どものための本とする故に生ずる危険と，児童文学の作品論に及ぶ問題を含んでいた。1969年，前述の本田の提起した問題から10年後の読書科学（12―2）に「童話の原話と再話の比較研究」として久本らの研究が，再度，この問題に関係している。しかし，このような客観的な実証と，作品の本質論とのかかわりに至るためには，もう一歩の前進が，実証的な研究の面で期待されている。

弥吉の「冒険探偵小説の児童に与える影響」(6―3)は，毎日新聞読書世論調査票の内容分析に基づく研究である。これは一般的に少年少女に愛好されているとされる冒険小説と探偵小説が，児童に与える影響を分析しながら，文学ジャンルとしての両者にそれぞれ異なる性格があることを解明している。これは，世論調査の分析から，少年少女の心理的要因と冒険小説，探偵小説に対する満足感との相関性を究明しており，文学ジャンルの相違性を実証的に論じている。

子ども達の読書反応から，文学作品の性格を論ずる研究には，また「“グスコーブドリの伝記”“とべたら本こ”と子どもたち」がある（6―3）。渡辺は読書指導の課題として研究にとり組んでいるが，子ども達の読書体験を通じて，二つの児童文学作品の性格の違いにふれているのである。

現行の空想科学小説（ＳＦもの）について，中学生が大きな魅力を寄せている実態から，すぐれた空想科学小説を読ませたいという願いを述べる望月は，大阪市立の中学校の実態調査から「中学生の読みものとしての空想科学小説（ＳＦ）について」(8―1)を発表している。これは作品研究には及んでいないが，子どもの本の世界に，文学ジャンルとしての空想科学小説（ＳＦ）の必要性と，読書の渇望に対して優れた作品の少いことを指摘している。

読書科学（3―2）は，第3回公開研究会の記録として「児童文学の創作と指導」を掲載した。これは，“コタンの口笛”をめぐって，作家石森延男を招聘して，異色の長編児童文学「コタンの口笛」について公開討議をした記録である。滑川が石森文学誕生の経過や背景について述べ，コタンの口笛の中学生，小学生による読み取りの状況がくわしく報告されている。作者石森延男の言葉を掲載して，日本児童文学の画期的な業績をたたえている。滑川が「日本の現在の慢性的不況という日本児童文学の貧困の現状において非常に大きな意味をもっている。」という指摘が，この公開研究記録を意義づけている。一時的に非常な活気をみせた児童文学界であったがいまだに作品の内容的な貧しさは，日本児童文学においてぬぐいきれない。児童読物としての作品研究の貧困もこのことと無縁ではあり得ない。作家の問題であると共に読み手の評価の向上が，これとかかわっている。読み手が，単に子ども達であるという側からのみ，作品が提示されているが，作品研究は，むしろ，高い鑑賞力と鋭い批評精神に貫かれた成人社会において，子どもの読み物が，読者層を拡げていく今後に期待されている。

4　児童文学論

読書科学の誌上において，文学論が登場することは，いささか場違いの感がしないでもないが，国語教育の中で，文学教育が論ぜられ，文学教育における教材論は，当然ながら作品論にならざるを得ない。国語教育の中での文学研究の重要性は言うまでもないが，その反面に作品研究の貧困性が指摘されているのである。

実証的，科学的，あるいは機械的検証をともなう研究

としては，とり上げ難い文学論を，読書科学として取り上げることは，科学と文学の背腹を密接にしていくことによって，人間精神の向上もあるという文化の世界史的な課題である。20世紀的課題から21世紀的課題に向けては，科学と文学の背離が，大きな問題なのである。学際的な研究の必要性ということからだけでなく，読書科学が文学的課題とまともに取り組む方向は，むしろ学会の向後の使命の重大性を示唆していると思われる。

読書科学における児童文学論とみえる最初の論説の登場が，黒田の「読書科学における児童文学序説」(3—1)である。黒田は鈴木道太著「親と教師への子供の抗議」に刺激されて論を起したといっている。論理的体系的でない著書から，むしろ子供の実態が明瞭にわかるという黒田の感覚から「科学的とは～」という懐疑に立って児童文学の本質にせまろうという意図があったようである。しかし「弁証法的認識」という形通りの解釈の単純さと論旨の不明瞭さが，その後4号にわたる論説を不統一にして，野心的な課題への挑戦に失敗している。しかし，児童文学を，文学，芸術という概念のワクに含めて考えたいという指摘(3—3)や，児童文学における「ことば」，すなわち文体とのかかわりへの洞察は(4—1)，児童文学論の核心を突いているのである。この論の最終稿と思われる「新しいマスコミ時代の新しい読書」(4—3)では，マスコミが取り上げている言語環境から文学のリアリティーに変化が起っている事実にふれて，やや飛躍した読書へのアピールをしている。これらの論の飛躍は，今日のマスコミによる言語環境の混乱を通じて，新時代の教育課題となり，批判の対象となってきている。

文学論というよりは，作家論に入れるべきかもしれない「石川啄木の性格と読書の効果」(9—2)は，弥吉が，啄木初期の動向から，啄木の多読とそれからの模倣の関係を突き，その後の創作活動が「摂取模倣のみであったか？　独創的な短歌が開いたのと前期の詩と関係があるのか？　その原因として彼の性格を中軸として読書や創作の結果に，ある種の傾向や思想や情動が発生したのではなかったか？」の仮説的疑問を解明するための文献研究による考察である。結論として啄木の驚異的な多読も，天才性も，ただ一冊の図書，一人の著者との出合い—姉崎嘲風—が強烈に一生を定めたことを考証して，読書科学への問題提起としている。

児童文学論に正面から取り組んだのが，出雲路の「児童文学におけるファンジター論」である。この論文は，(15—1)より(16—1)において，誌上4号にわたって論述している。出雲路は，児童文学に個有のジャンルとしてファンタジーがあるということを仮説的な課題とし，文学分野における新しい開拓として児童文学分野を位置づけようとしている。始めに，ファンタジーの読者への影響から文学としての特長を模索し，ファンタジーの形態上の特長を指摘する。さらに作品世界を，児童文学作品(「ふしぎの国のアリス」・「ナルニヤ国物語」・「宮沢賢治童話」等)そのものを通してファンタジーのオリジナルを論じている。作品にあらわれる時相の問題や文学としてのリアリズムについては，読者との関係を論じつつ人間解明の文学として，児童文学の存在を改めて見直そうとしている。

出雲路は，また，「児童文学におけるファンタジー論」の補説として，「児童文学への文体論的試論」(20—3)を挙げている。かつて黒田が，児童文学の個性であるとみた文体上の指摘を，児童文学作品の比較考証によってこれが具体的な事実であることを論証し，稀な研究として，児童文学における文体の研究に低触したのである。ここで，改めて，児童文学におけるリアリズムが論究されている。

「昔話　桃太郎像の変遷」は，滑川が(8—2)において論を起し，(13—1・2)の間に5号に及ぶ論説である。滑川は，論の序においてこの論は「児童文学的考察であって，民俗的なものでない」ことをことわっている。室町期以来の豊富な文献に基づき，大別して，明治以前と明治以後に別けて形象化されていく桃太郎像を解明している。大正，昭和期に至っては，軍国像化していく桃太郎像を論じている。

昔話として，永く子ども達のアイドルであり，日本のお伽話の代表である桃太郎が，どのような経路をたどって，子どもの身辺に不離の存在となっていったのか，その頂点が明治期にあるとみた滑川は，古典的な形成過程を，民俗的な視野でなく，児童文学としての昔話を形成する過程として考証している，お話の中心になる主人公が，口承童話として，時代の背景をとらえ，地域の伝承と混合していくさまは，民俗学的な興味でもあるが，一つのポイントを巌谷小波童話の形成においている。説話の形成過程については，民俗学的な解明の方法を柳田国男によって啓発されているが，滑川は，小波に至るまでの文献的考察から，明治以降の国民思想として定着していく義務教育の尋常小学読本が，その教材化において桃太郎像を形象化してきたと論究している。その教材化において，題材として選択される国民的な要因を，一つは口伝の持つ優れた物語性にとらえ，一つには，日本軍国時代の趨勢にのり易いパターンを持っていたことを客観的に論証している。小波時代にすでに韻文化された物語の調子のよい流れと，物語の起伏に口承文学の典型を備えていたこと，さらにこのような韻律と単純化されたパターンが子どもたちのアイドルとなり，親しみ易く豊かな空想性は物語に親しむ庶民の子ども達の成長期の野心とも結合していったであろうことを伺わせて，絢爛たる文献は論旨を一層豊富なものにしている。

滑川はこの伝承説話の優秀性を指摘するとともに「このはなしを，侵略思想とするのは，まちがっている。かつての軍国主義者たちが，利用したにすぎない。」と述べて，説話の卓越を認め，「桃太郎のような強健な子どもを生むように若返えりたい（中略）願いを秘めて子どもたちに語り継いだものにちがいない。」といって論を結んでいる。本学会に表われた児童文学論であると同時に教材論として多くの示唆を含んでいる。

5 児童雑誌

児童雑誌に関する研究は，雑誌のよし悪しを判ずる基準発見の研究に始まっている。阪本（2—1）は，俗悪化していく児童雑誌の傾向に歯止めを求める方向で基準模索の提案を含む調査研究である。阪本（2—2）は「児童雑誌の評価」を自作の評価表に基づいて調査し，その結果を報告している。しかし，時代はこれ以降，児童雑誌が，阪本の評価表によると，恐らく俗悪化のみの方向をたどることになる。「少年雑誌の戦記ブーム」は，清水ら（7—2）による共同研究として，誌上のシンポジウムを掲載した。実態調査においても成蹊小学校教育研究所グループ（2—1），水野（4—3），「児童娯楽雑誌の1964」谷川（8—4）等の実績があるが，これらの調査研究とは裏腹に以降，現在に至る20年間は，ひたすら児童雑誌の俗悪化と，青年雑誌との混合化が進み劇画ブーム，マンガブームが誌界の支配的な傾向を形成してきた。つまり児童雑誌の調査研究も，この四半世紀に及んで，雑誌向上の啓蒙的役割りは果せなくなっている。

引用文献

出雲路猛（15—1，1971年） 児童文学におけるファンタジー論（Ⅰ）（17—28ペ）

出雲路猛（15—2，1972年） 児童文学におけるファンタジー論（Ⅱ）（51—60ペ）

出雲路猛（15—3，1972年） 児童文学におけるファンタジー論（Ⅲ）（96—102ペ）

出雲路猛（16—1，1972年） 児童文学におけるファンタジー論（Ⅳ）（18—25ペ）

出雲路猛（20—3，1976年） 児童文学への文体論的試論（86—96ペ）

出雲路猛・竹ノ谷真知子・三井和子（19—1・2，1975年） 絵本に関する母親の意識調査（1—12ペ）

出雲路猛・林一三子・兼城洋子・水野ひろ子・坂東和子・玻座真千香子（24—1，1980年） 幼児と絵本のかかわり合いに関する研究——幼稚園の幼児に，絵本はどのような役割を果しているか——（20—26ペ）

宇留野藤雄（2—4，1958年） 文学作品分析の試み——“チャタレー夫人の恋人”をめぐって——（18—24ペ）

エールリッチ，B.（4—2，1959年） “子供の本におけ

る物語と絵について”抄訳（58—62ペ）
岡田明（9—2，1965年）　一幼児の絵本にたいする反応（28—32ペ）
岡本奎六（2—1，1957年）　青年と漱石の作品（6—10ペ）
岡本奎六（2—3，1958年）　読解鑑賞行動を規定する要因の研究（54—59ペ）
熊谷孝（2—2，1957年）　文学教育と人間形成（15—18ペ）
黒田映侑（3—1，1958年）　読書科学における児童文学序説（1—4ペ）
黒田映侑（3—3，1959年）　読書科学における児童文学序説（2）（22—26ペ）
黒田てるゆき（4—1，1959年）　読書科学における児童文学序説（3）（32—37ペ）
黒田てるゆき（4—3，1960年）　新しいマスコミ時代の新しい読書（45—50ペ）
阪本一郎（2—1，1957年）　児童雑誌の性格（24—32ペ）
阪本一郎（2—2，1957年）　児童文学の鑑賞の心理（19—26ペ）
阪本一郎（2—3，1958年）　児童雑誌の評価（42—53ペ）
清水慶子・霜田静志・鳥越　信・滑川道夫・飛田文雄（7—2，1963年）　少年雑誌の戦記ブーム（41—47ペ）
谷川澄雄（8—4，1965年）　児童娯楽雑誌の1964年（20—25ペ）
中村明（13—1・2，1970年）　川端文学の方法——人物表現の特質と稲妻の文体の成立（1）——（15—22ペ）
中村明（13—3・4，1971年）　川端文学の方法——人物表現の特質と稲妻の文体の成立（2）——（93—107ペ）
滑川道夫（8—2，1965年）　昔話桃太郎像の変遷㈠（1—10ペ）
滑川道夫（9—1，1965年）　桃太郎像の変遷㈡（13—18ペ）
滑川道夫（12—1，1968年）　桃太郎像の変容㈢（7—17ペ）
滑川道夫（12—2，1969年）　昔話　桃太郎像の変遷㈣（1—14ペ）
滑川道夫（13—1・2，1970年）　桃太郎像の変遷㈤（31—37ペ）
日本読書学会第二研究部会（1—2，1957年）　青年の文学作品への接近と理解に関する研究（第一報告）——漱石の「坊ちゃん」を中心に——（20—26ペ）
日本読書学会標準読み物研究特別委員会（6—4・7—1，1963年）　子どもの性格形成の適書目録〔1〕——低・中学年用——（6—110ペ）
日本読書学会標準読み物研究特別委員会（7—3・4，1964年）　子どもの性格形成の適書目録〔2〕——高学年・中学校用——（1—119ペ）
久本智子・芳賀純（12—2，1969年）　童話の原話と再話の比較研究（15—22ペ）
本田和子（3—2，1958年）　児童読物に関する一考察（8—17ペ）
松本武（5—1，1960年）　幼稚園における絵本の実態（29—41ペ）
望月久貴（2—2，1957年）　漱石の作品に対する青年の読解指導（27—38ペ）
望月道子（8—1，1964年）　中学生の読みものとしての空想科学小説（ＳＦ）について——ＳＦ実態調査集計の考察——（21—27ペ）
弥吉光長（6—3，1962年）　冒険・探偵小説の児童に与える影響（16—20ペ）
弥吉光長（9—2，1965年）　石川啄木の性格と読書の効果（1—8ペ）
渡辺正巳（6—3，　1962年）「グスコーブドリの伝記」「とべたら本こ」と子どもたち（21—31ペ）

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

読書科学研究の25年(III)

——1号から50号までの心理学的研究を中心に——**

野間教育研究所
阪本敬彦**

読みの過程

初期に行われた，日本読書学会の共同研究の一つに，読書心理研究部会の「読書過程の分析」があり，この成果は，いくつかに分けて発表されている。まず，宇留野と阪本の報告（4—2）は，1958年に行われた共同研究のうち，読書中の情緒反応に関する研究の詳報である。ここでは，同一の作品が，スライドと本で与えられた時では，受け手の情緒反応にどのような違いがあるかを問題とし，中学2年と小学5年の女子に，「ひとふさのぶどう」の本とスライド，「山椒太夫」の本とスライドを与え，集団PGRとプログラム・アナライザーにより情緒反応を測定するとともに，質問紙と作文により内省反応をとったものである。その結果，スライドでは中学生より小学生に，文章では小学生より中学生に，反応が多いこと，両作品とも文章よりスライドに反応が多いこと，両作品間では，スライドでも文章でも，「ひとふさのぶどう」の方が反応が多いこと，などを報告している。

つづく，読書心理部会共同研究の報告（5—1）は，このグループが，第2回研究大会に発表したもののまとめで，この共同研究の全体のわくぐみが明らかにされている。日本読書学会第四特別委員会第一研究部会の報告（5—3）は，男子大学生に「次郎物語」「眠狂四郎」「ドンファンの血」のように，どぎつさの違う作品を与えた時に，脳波，呼吸，その他の生理反応の違いが記録されるか否かを確かめようとした予備実験を含んでいる。これの本実験の結果は，原野（6—1・2）が報告している。ここでは，かなり露骨な性的描写を内容とするものと，電気洗濯機の使用法を書いたものを男子大学生に読ませて，PGR，呼吸，心搏，プレティスモグラフィの4つを測定し，PGR，呼吸，心搏では，二つの読書材料によって差が見られるが，プレティスモグラフィでは，読書材料間に差がなかったことなどを報告している。

阪本の報告（6—1・2）は，文章のおもしろさ，ユーモアなどが，PGRにどの程度の反応となってあらわれるかを見ようとしたものである。ここでは，笑話と普通の話とを読ませて比較すると，笑話の方にPGR反応が多いこと，などが結果として得られている。岡本の報告（6—1・2）は，読み手が読書材料を微音読するときに，考えたこと感じたことをモノログとして発声させ，モノログ分析によって読みの心理過程に迫ろうとしたものである。読み手のモノログは，抵抗，確認，まとめ，文脈意識，予測，推論，行動批判，人物評価，文体批判，一般化，感情，連想，の12のモノログに分けて整理されている。これらのモノログのうちどれが多いかによって，読み手は，①批評型の読み手，②感情型の読み手，③文章理解型の読み手，④未熟型の読み手，⑤文体批判型の読み手に分けられるという。また，岡田（8—1）の研究では，モノログ法を小学生に適用している。

---

* A quarter century of reading research : A compilation of selected papers from "The Science of Reading," 1956-1982 ; (III) Psychological research, Nos. 1-50.

** SAKAMOTO, Takahiko (Noma Institute of Educational Research)

読みの能力

ここには，読みの能力の実態，測定，発達，学習などにかかわる研究をまとめる。

村石（4—1）は，幼稚園児のリテラシーについて報告している。就学前児童の読み書きについての討論が，さかんになる初期のころの論文である。阪本ら（11—3）（12—1）が2号に分けて発表したものは，読みの活動の基礎となる，幼児のお話の能力の発達調査である。ここでは，3歳，4歳，および小学校2年生について，絵本を読んでやってから再話させること，すでに知っている物語を再話させること，絵を見せて作話させること，お話の冒頭だけを聞かせ，つづきを作話させること，の4種の実験を行っている。

小学生を対象としたものでは，まず永沢と福沢の研究（4—3）がある。これでは，小学校6年生について，意味把握，漢字，速読，単語の理解，知能，興味を調べて，相互の関連を見ている。中野と小出の研究（8—2）は，僻地の小学校で，読みの力を伸ばすことを全校的規模で意図的に指導した際の調査結果をまとめたものである。阪本と高木の研究（11—1・2）は，小学校4，5，6年生を対象としたもので，回帰読書力成就値によって不振群と良読群とを区別し，両群の読書力構造，知能構造，不安傾向，家庭環境などを比較したものである。

漢字学習については，福沢と福沢（7—2）が，中学生を対象とする調査結果から，知っている言葉を表わす漢字の方が，知らない言葉を表わす漢字よりよく読めることなどを報告したものがある。また福沢（11—3）は，小中学生を対象とした調査を行い，熟知していることばの漢字がよく読めることなどを報告している。河井の調査（11—1・2）は，読みにおける語彙の発達を追求したものだが，単語を漢字で与える場合に，振りがなの有無と文脈の有無とが，語彙理解にどう影響するかに焦点を当てている。

佐藤（11—3）（13—1・2）は，大学生に行った速読訓練の効果について，2回に分けて報告し，第1報では速読訓練の効果があったこと，第2報では進歩の多かった者と少なかった者の比較などを報告している。岡田の研究（11—1・2）は，読みの柔軟性の発達の様子を，普通児と弱視児について調べた研究と，読書力訓練が速度と柔軟性に及ぼす影響を調べた研究との，2部から構成されている。また岡田（10—1）（10—2）は，速読に関する文献研究を2編に分けて発表している。

佐藤の3編（9—3）（10—1）（12—1）は，盲児の点字触読能力の発達を調べた研究で，第1報告では，触読能力の発達の様子，第2報告では，触読力と視力・失明年齢・知能・学力・生活年齢との関係，第3報告では，盲学校に中途編入した生徒達の触読力についてまとめている。

渡辺（5—1）（5—2）は，教護施設の中学部に収容されている非行少年の読書能力を調査し，2回に分けて報告している。

読みやすさ

印刷された材料の読みやすさは，(1)文章の難易と，(2)印刷の見やすさの2側面から研究される。まず前者については，庵逧（1—1）が，難易度＝文長偏差値＋漢字数偏差値，の公式を発表したものがある。庵逧の公式では，小1から小6までの各学年児童にとって，文章がどの程度難しいかを，5段階に評定できるように工夫してある。波多野と小笠原（4—2）は，クローズ法で読みやすさを測定する時，従来200語～400語の文章が必要だとされていたのに対し，より短い文章にも適用し得る方法を工夫し，通常はそんなに長くない児童向文章や，広告文などにもクローズ法を適用できることを示した。阪本（6—1・2）は，自己の「教育基本語彙」（牧書店・1958年・現在絶版）の語彙表に基づいて，文章の語彙の難易度を数量化し，小1から中3までについて，5段階で評定する方法を発表した。つづいて阪本（7—2）は，文の長さに着目し，日本語文章の長さは，語数で数えるのが合理的で便利であることを提案し，国語教科書の文長測定の結果を発表した。さらに阪本（8—1）は，文長

比重点に基づく文章の難易基準を，小1から高3までについて発表した。つづいて阪本（8—2）は，同じ手法を用いて週刊誌の文長測定を行い，週刊誌の情報記事は，文長の観点だけからみれば，小学校3～4年の教科書の程度に相当し，きわめて読み易く書かれていることなどを報告し，また阪本（9—1）は，大正8年から昭和25年までに発表された現代小説の文長を測定して，谷崎潤一郎，平林たい子，室生犀星は長文系であるのに対し，山本有三，川端康成，丹羽文雄は短文系の作家であることなどを報告している。一連の阪本の読みやすさ研究は，阪本（14—1・2）で「阪本の公式」とも言える測定法にまとめられた。この公式は，漢字率，基本語彙率，長文率の3要因で，読みやすさが測定される構成になっている。また，読みやすさの文献的研究としては，波多野と小笠原（2—2），上野（3—3）（5—2）の諸研究がある。

印刷の見やすさについての研究は多くないが，村石ら（5—2）は，最適の活字を求める基準についての文献研究を発表し，つづいて村石らの報告（6—1・2）において，カナ文字の配列における最適な文字間隔と行間隔を求めた実験の結果を発表している。

性格・態度

読書と性格，読書と態度との関連を探ろうとした研究は，初期に多く発表された。

多読児と不読児の性格を比較した研究としては，阪本（4—3）が，小学校3—6年の多読児と不読児各70名を選んで詳細に調べたものがある。これでは，一般向性では両者に大差はないが，社会的外向，とくに社交性および統率性において多読児がすぐれ，また多読児には劣等感が少なく，明朗で社会的適応の良好なものが多いことなどを報告している。また阪本（6—3）は，中学と高校の1～2年生の多読者164名，不読者152名を選出して調査し，向性と多読不読との間には関係が見られないこと，多読者には，自尊感情，自己統制の良好な者が多いことなどを報告している。

松村と板垣（3—3）は，読書の過程にみられる人格の類型をとらえ，それに基づいて，人格形成に役立つ読書指導のあり方について考察しようと試みた。そして，読書における人格の硬さが，読みのプロセスの中で解消していくような読書指導が行われれば，それは人格の発展につながるものであろうとの仮説を立てている。木村(9—3）は，人生観の確立と読書との関係に関する調査の中で，性格に関する質問項目を設けているが，「自分の性格を何かによって見つけ出したことがある」と答えた高校生の中では，「友人」の影響で見出したとする者が男女とも1位を占めるが，男子では2位が「書物」，女子では「宗教」についで3位が「書物」であること，そしてその書物は，「次郎物語」「罪と罰」「ジャン・クリストフ」などであることなどを報告している。

次に態度については，林ら（2—3）の読書社会調査の報告があり，読書人は非読書人よりも，文化主義的態度を示すものが実際主義的な者より多く，階層・職業に対して自由主義的態度の者が専制主義的態度の者より多いことなどを結論としている。

読書によって，読み手の態度がどう変るかという問題は，実験的手法では検証されにくいのであるが，いくつかの試みがなされている。日本読書学会第四特別委員会第二研究部会の共同研究（5—3）は，小学5年生と中学2年生に「次郎物語」，高校2年生に「頭脳」を読ませて，読む前と読んだ後に態度の変容がみられるかどうかを調べたもの，岡田の報告（6—1・2）は，同じ共同研究の一部を，小学生の「動物となかよしになるには」についてまとめたもの，日本読書学会第二研究部会の報告(6—3)は，上記の共同研究の総まとめともいうべきものである。

来（10—1）は，共に「職業」を主題としながら，理想主義的観点にたつ読み物と，現実主義的観点にたつ読み物とを中学2年生に読ませて，読前読後の意見変容の様子を調べた。その結果，どちらの読み物にも，その主張する方向への意見変容の傾向がみられたこと，読み手の先有傾向である理想主義的読み物の方が，より大きい変容をもたらしたこと，主題に関心のない者には意見変容

がみられないこと，などを報告している。

読書療法

この領域の研究の数は多い。これは，故大神貞男理事という，きわめて熱心な研究者が存在したからだ。その反面，同理事の没後，文字通り火の消えたようになってしまった領域でもある。まず大神の研究を，順を追って眺めてみる。

大神の最初の論文（8—1）は，警察の補導歴のある中学3年男子非行少年に対する臨床例である。各種の検査と面接の結果，この少年の問題点は，父親に対する敵意にあると判断し，読書療法による治療を試みている。読ませた材料は「次郎物語」と「仔鹿物語」である。次に大神（9—1）は，常習恐喝少年の，治療例を報告している。与えた本は，「仔鹿物語」「小公子」「家なき子」である。大神の第3報告（9—3）では，強姦・恐喝・窃盗などを犯した，重罪犯罪少年の治療過程を報告しているが，ここでは，「にんじん」「仔鹿物語」「家なき子」「夜あけ朝あけ」「ヘレン・ケラー」「野口英世」「狭き門」を使っている。大神の第4報告（10—1）では，家出少年をとり上げ，「次郎物語」「仔鹿物語」「ヴィチャーと学校友だち」「家なき子」「家なき少女」を使っている。大神の第5報告（10—2）は，恐迫性の性非行少年を対象としたもので，「次郎物語」「家なき子」「夜あけ朝あけ」「美しい暦」「狭き門」「野口英世」「イワンの馬鹿」を読ませている。大神の第6報告（10—3）は，窃盗・傷害・強姦を犯した高度非行少年混血児（19歳）を扱ったもので，「家なき少女」「次郎物語」「真実一路」「破戒」「仔鹿物語」「伊豆の踊子」を使っている。「読書科学」第11巻第1・2合併号には，大神の論文が2編掲載されていてまぎらわしいが，あとに載っている大神（11—1・2，88—90ぺ）の方が第7報告で，中学卒業後，職を転々とした末に，非行を犯した少年の例が報告されている。ここで使われた本は「嵐」「真実一路」である。大神（11—1・2，48—51ぺ）は，症例第8報告で，小学3年生の夜尿症を軽快した例である。用いた読み物は「アンデルセン」「愛の学校」「親指姫」「きこえぬ鐘」「みにくい家鴨の子」「ベーブ・ルース物語」「マッチ売りの少女」「パンヤンの鹿の物語」で，3月に夜尿80％だった子を，6月には28％にまで軽快している。また大神の第9報告（11—3）では，中学卒業後1年あまりの非行少年（強姦，子ども略取）を対象としたもので，「次郎物語」「路傍の石」「嵐」「仔鹿物語」「にんじん」「真実一路」「家なき少女」「やまっ子六代目」「美しい暦」を利用している。

大神（13—1・2）は，この9件の報告のあと，第1，3，6，9の4ケースについて，追跡調査を行っている。それによれば，4少年とも，その後警察のやっかいになったような事はなく，まじめに暮している。また大神（12—3）（13—3・4）は，前述の9件の事例報告をうけて，読書療法の治療理論を確立しようと試み，第一論文では非行原因論，次の論文では治療目標理論を展開している。

大神以外の論文等については，まず「読書科学」第8巻第3号が読書療法特集号として編集されているのが目を引く。ここには，室伏（8—3）の読書療法研究のレビュー，小野（8—3）のアメリカの読書療法理論の紹介，阪本（敬彦）と高木（8—3）の精神医学の分野での読書療法論の紹介，阪本(敬彦)と山中（8—3）のC. Shrodesの読書療法論の紹介，阪本(一郎)（8—3）の，わが国の読書療法研究事例の紹介，野間教育研究所（8—3）が編集した文献目録が掲載されている。

阪本（6—4～7—1）はまた，読み物による性格形成と読書療法について論述しているが，これは，日本読書学会標準読み物研究特別委員会（6—4～7—1）（7—3・4）が編集した適書目録の理論的基礎となっている。これらの適書目録は，読書指導においてのみならず，臨床場面の読書療法においても，有力な指針となるものである。

そのほか，上吉川（8—1）の報告では，小学校現場における問題児の治療例が，楮本（9—1）では，性格問題児を読書および読書会活動を通して治療しようとしたケースが，大野（9—1）では，結核で長期療養中の児童に

「アルプスの少女」をスライドで与えて，その療法効果を探ろうとした試みが，阪本（11—1・2）では情緒不安定児に対する読書療法の事例が，半田（11—3）では中学校の生徒指導の一環として行った事例が，それぞれまとめられている。

漫　画

漫画を扱った研究は，大きく3種類に分けられる。その1は，児童の実態調査などによって，漫画の読み手の姿をとらえようとするもの，その2は，漫画そのものの内容分析，作品論の類，その3は，漫画の歴史に関する研究である。

実態調査的なものとしては，まず波多野と木村（1—2）が，都市と農村の児童を比較して，農村における漫画の浸透は，都市におけるよりも著しいこと，都市の児童では，学年上昇につれて，漫画から離れていく傾向があるが，農村ではこの傾向が見られないこと，などを報告した。阪本（3—4）は，親の意見を調査して，漫画を読みすぎて困るという意見は2割前後にすぎず，自ら積極的に指導に乗り出している親は少いことなどを報告している。また阪本と西尾（3—4）は，読書興味の一般的な発達を調査した資料の副産物として，子どもがどんな漫画，絵物語に感動しているかを分析している。つづいて阪本（4—2）は，小学生7,000余名を調査して，好まれる登場人物，好まれる時代背景，好まれる構想，好まれる内容などについて報告している。阪本の研究（9—3）は，当時流行の「鉄腕アトム」と「サスケ」を中心とした調査で，ロボット漫画，忍者漫画のどういうところに子どもが引きつけられるかを探ろうとしている。このほかに，小規模な調査としては，笹川（1—2），野田と黒沢（3—4），岡田（5—2）のものがある。

漫画の内容分析，作品論の領域では，相沢ら（3—4）が，昭和32年ごろから流行した戦争漫画に焦点をあてて，その内容分析を行ったものが一番古いが，ここではまだ，分析の方法が十分に確立されていない。阪本（9—2）は，「鉄腕アトム」と「サスケ」の内容分析を行っているが，ここでは，物語の構成，主人公の性格，図がら，手法など，分析の柱を立てて論を進めている。個々の漫画の作品論は，阪本一郎の独壇場の感があり，阪本（5—1）と阪本（5—2）で「赤胴鈴之助」，阪本ら（11—2）で「サザエさん」，阪本（11—3）で「のらくろ」，阪本（12—1）で「冒険ダン吉」，阪本（12—2）で「長靴の三銃士」をとり上げている。また，阪本（5—4）は，「月光仮面」と「変幻三日月丸」を例として，正邪闘争説話の諸類型が少年漫画にどのように現われているかを論究したものである。また，視点の変ったものとしては，東京学芸大学読書科学研究会（3—1）の研究がある。これは，1957年4月号の児童向き雑誌に掲載された漫画，計153編についての語彙調査で，延べ3万語あまりの資料を整理している。独立した論文とは言えないが，伊藤（3—4）の内外漫画の比較研究も参考になる。これは，日本読書学会第4回公開研究会の記録である。

漫画の歴史的研究としては，木内ら（5—4）の子ども漫画史と，関戸ら（5—4）の漫画に関する文献目録がある。前者は，明治以前から昭和34年までの児童漫画史の概略に，昭和1年から34年までの「子どもマンガ史年表」と，「単行マンガ本出版統計」（昭4—34）が付けられたもの，後者は，1945年から1960年にわたる時代に発表された漫画に関する文献の，解題つき目録である。

読書興味

この領域の研究は，初期にいくつかかたまっている。阪本の研究（3—1）は，自己の読書興味診断検査のデータの公表であり，阪本と西尾（3—3）のは，小学校児童約4,000名を対象として，「最近読んだ本の中で，おもしろかった，読んでよかったと思うものを五冊ほど」書かせて，学年別の読書傾向を探り，図書選択の変化を，児童の生活課題との関連においてとらえようと試みたもの，阪本と野口（3—4）の報告は，同じ手法で，中・高校生約4,000名を対象として調査したものである。小規模な調査や，読書興味指導の実践研究には，荒井(2—1)の高校の調査，中島（12—3）の学校図書館ＰＲ活動を

読書興味指導に関連づけることに焦点をおいた中学校における実践報告，加藤（13—3・4）の小学校での実践記録がある。また文献研究としては，佐藤(3—2)のものがある。

これら一連の読書興味研究のあと，長い間論文が途切れていたが，1979年になって，阪本一郎の「読書興味の発達と指導」(23—2・3）が発表されている。これは，阪本の読書興味研究の総決算ともいえる論文であるが，その足跡をたどるには「読書科学」に収載された論文だけでは不十分と思われる。

読書の実態

この領域は，本来，読書社会学が扱うもので，「読書科学」の論文を見ると，初期に集中して発表が行われていることが分かる。しかしそれは長つづきせず，中・後期にはほとんど論文が見られない。それどころか，現在は，100号を記念するレビューを行う研究者もいないというのが正直なところである。このままでは，本号の展望から消えてしまうのだが，あまりにもったいないので無理を承知の上で，心理学的研究の枠の中でまとめておく。

大規模な読書実態調査は，新聞社が行ったものの結果を投稿した形の報告と，日本読書学会の特別委員会が行ったものの報告とがある。前者は，佐々木（1—1）(2—1）の報告で，これは毎日新聞社の読書世論調査の結果を要約して，昭和21年から30年までについて，2回に分けて連載したものである。後者には，日本読書学会第四研究部会（1—2）(2—1)，日本読書学会読書社会学部会（3—2）などがある。前者も後者も貴重な資料ではあるが，「読書科学」の報告だけでは，そのごく一部しか見ることができず，これらを参考にして，もとの報告書にあたることが必要となる。また，本間と古野（9—1）は，実態調査の分析に基づいて，大学生の読書について報告しているが，これは，論文に明記されていないが，前記の読書社会調査を行ったグループによる大規模調査の結果を報告したもののようである。

日本読書学会読書科学総合研究第3分科会（6—1・2）は，文部省の科学研究費による総合研究の分担発表であるが，勤労青少年の読書実態を報告している。また，同じ総合研究の分担発表としては，ほかに，北島（6—1・2）の公共図書館における青少年の実態調査がある。

（引用文献は，次の論文の巻末にまとめてあります）

The Science of Reading, Vol. 26, No. 2 (1982)

読書科学研究の25年 (IV)

——51号から99号までの心理学的研究を中心に——*

筑波大学
福沢周亮**

はじめに

本稿では，「読書科学」第51号～第99号を対象として，心理学関係の“原著論文”を中心に，心理学的な研究の流れをみてみたい。

同じ，または同じと認められる，主題のもとに論文をまとめてみると，次のようなグループができた。「読書療法」「読字学習」「漫画」「絵本と読みきかせ」「文章の記憶や理解」「読みの能力」である。これらに“資料”の研究法に関する諸論文を一つのグループとして加えると，大きな流れがわかるようだ。

以下，これらのグループを中心に取りあげる。

1　読書療法に関する研究

読書療法は，領域のうえで臨床心理学と重なるという意味で，“読書科学”の中に特異な位置を占めているのであるが，山本 (14—1・2)，日下 (14—1・2)，大神 (15—2, 16—3, 18—3) によって，事例研究や理論的研究が行われている。

とくに大神 (16—3) は治療理論の建設を試みた。これは，「非行原因論と読書療法の治療理論 (No. 1)」(12—3) と「読書療法の治療理論 (No. 2) ——治療目標理論について——」(13—3・4) に続くもので，読書療法のメカニズムを人格成層説と関連させて，「1. 表層である態度層の治療機制として同一視。2. 中間層である，適応性性格の治療機制として，情動解発，洞察および同一視。3. 深層の反社会的性格の治療機制として，さらに感情転移の操作」と分けている。

2　読字学習に関する研究

研究対象になった文字に一貫性がないため，内容のうえではまとまっているとはいえないが，文字の読みの学習に関する研究ということでまとめられるいくつかの研究が，ここ10年ばかりの間に発表されている。

福沢 (18—1・2) は，小学校1—6年生を対象として，漢字の読字学習を促進するための基本語彙を選定し表として提出した。これは，漢字の効果的な読字学習は，個々の漢字について選んだ高熟知度の言葉を媒介にするのが望ましいという，先行研究の結果を踏まえて，当時の教育漢字の一つ一つについて，望ましいと思われる言葉を選んだものである。今井 (23—4) は，幼児を対象として，片仮名と漢字の読字学習を取りあげ，次のような結果を得た。単語の音節数と有意味度が等しい場合には，片仮名と漢字の読みの相対的な学習難易度には差がなく，継時的呈示法（先に絵を呈示し，それを移動させてから次に文字を呈示する）は，同時的呈示法（文字と絵を同時に呈示する）よりも有効であった。また，文字だけを呈示する方法よりも，絵に続いて文字を継時的に呈示する方法のほうが効果的であることが示唆された。

次に，スタインバーク (Steinberg, D. D.) を中心と

---

* A quarter century of reading research : A compilation of selected papers from “The Science of Reading,” 1956-1982 ; (Ⅳ) Psychological research, Nos. 51-99.

** FUKUZAWA, Shusuke (University of Tsukuba)

する一連の研究を取りあげておく。スタインバークら（24—1）は，平仮名と片仮名の読字学習の難易度を問題とし，スタインバークと陳（24—4）は，3歳の健聴唖児に読みを教えることを試みた。また，スタインバーク（25—2）は，単語から帰納的に，単語を構成する個々の片仮名の読字学習が可能であることを示し，スタインバークと河野（25—3）は，英語の単語とアルファベットについて読字学習を比較した。

なお，1947年から1979年までの仮名の読み書きに関する心理学的研究の概観が，今井と福沢（24—3）により行われた。また，今井と森岡（21—1・2）が，幼児の書字学習を検討しているので，ここで触れておく。

3　漫画に関する研究

漫画に関する研究のすべてが心理学的な研究というわけではない。しかし，心理学研究者によっても手がけられており，心理学的研究も含んで一つのまとまりになっているため取りあげる。

阪本（15—1）は，子供向きの「ストーリ漫画」の変遷を次のように跡づけた。(1)「遊び絵」時代（明治20年頃まで），(2)西洋ポンチ時代（明治30年頃まで），(3)凸坊漫画時代（明治40年頃まで），(4)漫画不振時代（明治45年頃まで），(5)プロ漫画家余技時代（大正10年頃まで），(6)児童漫画家発掘時代（昭和5年頃まで），(7)太政翼賛時代（昭和20年頃まで），(8)漫画ユーモア喪失時代（昭和30年頃まで），(9)漫画週刊誌時代（昭和40年頃まで），(10)現代（昭和40年頃以降）。また，阪本（16—2）は，漫画研究の一環として「魔の救援者（magic helpers）」を取りあげて論じ，竹中ら（16—3）は，『ハレンチ学園』と『銭ゲバ』を中心にして，子供週刊誌の漫画の現状を，阪本（18—3）は，『正ちゃん』と『ズク小僧』を取りあげて，わが国における初期の新聞連載の子供漫画を，考察した。阪本（24—1）は，また，週刊誌の漫画と劇画を検討した。

阪本（17—2）では，漫画の文法とその読みものモデルが問題とされ，漫画を読む過程が次のように分析された。「この過程では「新経験の期待」に始まって「状況の理解」「物語の図式の設定」「展開の予想」と続き，「予想と合致」するか否かによって二つのコースに分かれる。一つは脱ユーモア物のコースで，「認識法則の確認」「達成水準の評価」と進み「理想水準か」否かが問われる。そして「感動経験」か「普通経験」に分流する。その二はユーモア物もしくは謎解き物のコースで，「情緒的衝撃」「認識法則の転換」と進み，「新認識法則の成立」するか否かが問われる。もし成立すれば「笑いの経験」もしくは「なるほど経験」となり，成立しなければ「当惑」してフィード・バックが起こる。これらの経験は「蓄積」されて，現実の「行動」および他の物語を読むときの「状況の理解」あたりに利用される」

片桐（22—1・2）は，高校生の，漫画に対する意識の調査をし，大城（23—4）は，漫画の表現特性を，その形式的側面について計量的に分析して次のような結果を得た。因子分析の結果，「一般因子」「無発話因子」「動き因子」「クローズ・アップ因子」「表言因子」の5因子を抽出，クラスター分析の結果，ほぼ3個のクラスター構造（「無発話」「表言」「表現一般」のブランチを構成）を認め，判別分析の結果，描画特性で73%，表言特性で84%，表現特性全体で87%の判別の成功度を認めた。大城は，また，漫画を記号論的な視点から検討し（24—3），SD法と因子分析により印象を分析した（26—1）。

4　絵本と読みきかせに関する研究

沢田ら（17—3・4）は，幼児にとって面白い絵本とはどのようなものであるかを検討した。5歳児と6歳児に読みきかせを行い，その反応を調べると共に，絵本の内容を分析したのである。その結果，面白いとされた絵本では，「内容が記憶されやすく，疑問反応がより多く生じ，笑い，驚きなどの積極的反応が多く，負反応が少ない」ことが共通して見出された。高木ら（18—4）は，3歳児を対象にして絵本の読みきかせを行い，結果を次のようにまとめた。「読みきかせの回数が増すにしたがい，(1)物語を楽しむ積極的反応が増加し，絵本に集中し

ない消極的反応が減少する。(2)言語反応の内容および反応数と絵本の段落との関連が示すように，物語の内容の展開と結びついた反応が増加する。(3)読みきかせ終了後の記憶内容は，物語としての展開の必然性をも含んだまとまりのあるものになってくる」また，小和田ら（20—4）は，5歳児を対象に，読みきかせの効果を実験的に検証するため，読みきかせの前後に行ったお話し作りを検討した結果，読みきかせの効果を推定させる差が次のような指標に現れた。すなわち，名詞数，接続助詞数，つながり得点である。なお，高木（22—1・2）の報告は，上記と関連した内容をもつので，ここで取りあげておく。お話し，絵本の読みきかせ，テレビという三つのメディアが，幼児の物語理解にどのような効果をもつかを比較したものである。5歳児（『きかんしゃやえもん』使用）では，3群を比較して絵本群が，4歳児（『ぐりとぐら』使用）では2群を比較して，テレビ群よりも絵本の読みきかせ群が，理解成績でよかった。

漢那（22—4）は，長期間（ほぼ1年間）にわたっての絵本の読みきかせが，読書力にどのような効果をもたらすかを検討した。対象は小学校1年生である。事前と事後の読書力テストの結果によると，読みきかせ群はそうでない群よりも，語や文・文章の理解で効果をあげた。田中（20—2）は，4歳児を2群に分け，一方に絵本『いたずらこねこ』の原文を，他方に改作したものを，読みきかせにより8回にわたって与え，その影響するところを分析した。その結果，原文が「幼児に絵本の世界を鮮明にとらえさせるために重要な働き」をするのに対し，改作したものでは，幼児の「絵本への没入の程度が浅く，絵本の印象が幼児の反応を制約する度合」がゆるかった。

以上は，いずれも絵本の読みきかせが主題に入っており，しかも実際に読みきかせを行った結果を分析したものであるが，絵本そのものを対象とした研究もある。

阪本ら（14—1・2）は，50冊の絵本の基本語彙率（小学校3年までに学習すべき語彙5000語（阪本一郎『教育基本語彙』による）の中に含まれる語の比率）を出し，「調査の対象として選んだなかには，子ども不在の絵本は存在しない」と結論した。阪本は，また，物語絵本の研究のために「人物の深さの係数（character-depth)」を提案（19—1・2）し，物語絵本を評定尺度法を使って評価することを提案（20—1）した。大城（24—4）の「絵本評価尺度の多変量解析」は，この阪本の提案の検討と簡約版の構成を目的とした。

5　文章の記憶や理解に関する研究

「文章の記憶や理解」をかなり広く解釈しなければならないが，この問題を主題とした研究がかなり大きなまとまりになる。

丸野と高木（22—3）は，物語や有意味文を処理し理解していく過程の中での“予測”という問題が，どのような観点で研究されてきているかを概観すると共に，“注意の集中度”の程度により2群に分けた幼児を対象にして次のような結果を得た。「(1)物語の各部位（起承転結）に対する上位群の集中度及び記憶得点は下位群のそれよりも有意に高い。(2)物語の情報展開と既有知識を手がかりとした被験者の予測—確認の処理様式との一致度を示していると思われる物語各部位に対する集中度の分散は，上位群では情報展開が進むにつれて小さくなっていくが，下位群には顕著な傾向がみられない。(3)物語の各部位に対する集中度と理解・記憶得点との間には高い相関（$r=0.82$）がある」大井（25—1）は，ATI (aptitude-treatment interaction；適性処遇交互作用）を枠組として，小学校5年生の読みの過程が，挿入質問により，どのように変化するかを分析して次のようにまとめた。5年生256名を「1ページの後に1質問」「1章の後に数質問」「質問なし」の3群に割り当て，10適性（知能検査の9下位検査で測定される能力と文法能力）による群ごとの重回帰分析を，教材の知識記憶および内容理解のそれぞれに対して行ったところ，群間に有意な差は認められなかったが，読みに関与する知的能力の，質問による変化が認められた。内田（25—2）は，小学校5年生3群にそれぞれ条件を違えて文章を与え，教示によって「視

点」が与えられることによって，文章のどこに注目して処理が行われるか，その結果どのような再生や理解度が示されるかを検討し，「視点が与えられれば常に文章学習が促進されるとはいえない」としながらも，次のようにまとめた。「教示によって与える視点や先行情報は，文章中の情報への注目を左右し，処理範囲を規定すること，そして最終的に構成される「マクロ構造」の構造，並びに構造化の程度まで規定することがわかる」

次に，池田による「読書材料と理解の関係」をみた一連の研究を取りあげる。いずれも，大学生を被験者に，読書材料として，類型は異なるが「読みやすさ（readability)」が同じと認められる二つの文章——宮本百合子『伸子』，中山義秀『厚物咲』——を用いて，2回ずつ音読させた結果を検討したものである。音読速度からの分析（23—4）では，両材料とも読速度は1回めよりも2回めのほうが有意に速く，1回め，2回めとも読速度は『厚物咲』より『伸子』のほうが有意に速かった。読速度と理解度の相関係数ρは,『伸子』で-0.156，-0.282,『厚物咲』で-0.147，0.024であった。この場合，相関係数の負の値は，読速度が遅いほど理解得点が高いことを示している。また，理解課題の分析（24—2）では，因子分析の結果,『伸子』で3因子を,『厚物咲』で2因子を抽出し,『伸子』の印刷上の「見やすさ（legibility)」を『厚物咲』と同じ条件にした検討（24—3）では，読み誤りが多くなったこと，2回めの音読で遅いほうの理解得点が有意に高かったこと，などを認めた。

鹿内による，大学生を被験者とした，散文教材の学習に関する研究の報告5編は，これだけで一つのまとまりをつくっている。「散文により構成された教材」という扱い方は，「文章」という扱い方とはやや異なるがここで取りあげる。鹿内（22—3）は，散文教材を読みによって学習する場合，特定の「知識目標」を学習目標として事前に呈示すると，特定の知識の学習は促進されるが，特定の「知識目標」の呈示は，教材内容の理解というより高次の学習には不利であること，認知的枠組や一般的目標の呈示は，要素的知識の学習には不利であっても教材の理解には有利であることを結論としてまとめた。また，鹿内（23—1）は，散文教材の構成上，重要と思われる二つの変数（呈示される節見出し語の種類，教材を構成する中心的概念の名辞のファミリアリティ）が，散文教材の学習に及ぼす効果を検討し，「見出し語やアンファミリア語は，閲読行動に対する方向指示刺激として有効である。しかし，見出し語変数の注意喚起効果は，教材内容を要約するという学習条件に固有のものであり，統制群ではこの効果はみられない。ファミリアな語による表現は，既有知識の想起手掛りとなる。……ファミリア語の挿入は，散文教材理解の促進要因のひとつと考えられる」とまとめた。また，鹿内（24—1）は，要約・ノート・アンダーライン活動が散文教材の学習に及ぼす効果を検討し，「自由再生パフォーマンスは要約＜ノート＜アンダーライン＜統制の順で増加した」「要約・ノート・アンダーライン活動の学習促進効果は，教材の初頭部分でのみみられた」と要約した。また，読書感想文の記述が科学的読書材の学習に及ぼす効果をみた研究（24—2）では,「感想文の水準に対応して学習パフォーマンスは向上している。とくに，自己の経験・社会的現実等の既有知識と読書材中の情報を関連づけていると評定される感想文記述者は，読書材中の情報もよく学習していることが示された」と結果をまとめ，主題の呈示と予想活動が物語文の理解におよぼす効果をみた研究（25—1）では，「物語中に，とくにアンファミリアな地名・人名が多くでてくるときには，被験者はこれらを記憶するというセットを形成する。このセットが優勢であるため，物語に先立って主題を呈示しても理解は促進されない。しかし，このようなセットを形成させなければ主題の呈示は理解を促進する。さらに，呈示された主題に基づき物語の内容などを予想させた場合，単に主題のみを呈示した場合より，被験者は主題に対して多くの注意を払う（主題再生がすぐれる)」とまとめた。

次に，以上とは，かなり観点の異なる研究であるが，堀（22—1・2）は，大学生を被験者に，『かさじぞう』と『こぶとり』の詳細型物語とあらすじ型物語のイメー

ジを比較し，「主人公のイメージは，あらすじ型と詳細型とでは異ならないが，脇役のイメージにおいて異なることが確認された。そして，あらすじ型は詳細型よりも単純な人物像を持ち，詳細型よりも人物像をはっきり描き出すが，個々人の個性という点では詳細型のほうがよく描いている」とまとめた。

6　読みの能力に関する研究

「読みの能力」をかなり広く解釈して，関係すると思われる研究を取りあげる。

岡田（14—1・2）は，小学校1～6年生を対象に，既製の読書力検査，国語学力検査，知能検査を用いて「一般に読書力といわれているもの」の因子分析を行った。嶋路（20—2）は，児童を対象に，読書力検査などを用いて調査し，「長編読書力」の基礎的な要因の一つとして想像力を指摘した。庵逧（22—3）は，大学入試の解答を分析して，高校卒業生の国語学力を検討した。

高木（15—3）は，小学校2年生を対象に，「SPWテスト（話しことばのシンタックス能力を測定するテスト）によるシンタックス能力の測定とその妥当性の検討」と「SPW転移テストによるシンタックス能力測定の試み」を行い，シンタックス能力を反映するものと仮定した「転移効果有群」のほうが，「転移効果無群」よりも，読書力偏差値，読解テスト，回帰読書力成就値で優れていることを認めた。

また，大西ら（15—3）は，4歳と5歳の幼児を対象に，読書レディネスに関する問題を取りあげて，「標準化された読書レディネス・テストによって測定された幼児の読書への適合度と，幼児の読字結果とがどのような関連にあるか」を検討し，「字の読めるものが必ずしも読書レディネスで進んだ水準にあるとはいえない」とまとめた。

次に，「読みやすさ」の問題と関連させながら読書速度の発達を問題とした，阪本の一連の研究を取りあげる。まず，「読みやすさ」の基準を検討して(14—1・2)，基本語彙率，漢字率，長文率の3条件が「読みやすさ」の測定を可能にすると結論した後，「読みやすさ」を統制した文章を小学校2年生～中学校3年生に与え，読書速度の発達を次のようにまとめた（15—2)。「小学校2～3年と，6年から中学校へかけては有意の差がなく，3～4～5年の間は急昇し，中学1年にかけては，次第にゆるやかになる発達が見られた。この結果は，学年相応のリーダビリティを持つ読書材料を与えられても，なお3～4～5年には，速度の発達が現れることを示している」また，上記と同様の学年に，上記で使用した文学的文章（生活文）と新たに用意した理科的文章（説明文）を与え，次のように要約した（16—4)。「文学的文章を読むのと理科的文章を読むのとでは，その正確度はおよそ半減するのであった。……文学的文章では一般に女子が勝れているが，理科的文章ではその差が少なく，中学生では男子のほうが勝れるというような傾向が見られた。……学年別に総合して統計すると，2～3年と7～8年との間には有意差が認められず，その他の隣接学年の所要時間には有意の差があった。しかも20%の危険率を見込めば，上記の学年間にも差があるということになる」

また，「見やすさ」の問題に関係して，ダン—ランキン（Dunn-Rankin, P.）ら（16—2）は，タイポス35と名付けられた平仮名活字の識別の困難度を，重複指数により示した。

佃（16—2）は，読書による態度変容の問題を小学校6年生を対象にして取りあげ，次のようにまとめた。「読書の作用は，態度を全く変えてしまうことより，あらかじめ有していたものを補強する傾向が大きい。……純効果としては，権威志向の作品Aに接した者は，より権威主義的な意見への変化が多く，民主的共同志向の作品Bに接した者は，より民主的な意見への変化が多くみられた。ことに，児童の一般的な先有傾向に沿った作品Bによる態度変容は，作品Aよりも顕著であった。……よりのんきで，思考的活動性の低い者は，読み物により意図された方向への変化が多くみられた」なお，平賀（17—2）は，高校生の読書傾向と読書に対する意識を，1967

年から1971年にわたって，毎年11月に調査した。横田（14—1・2）は，小学校6年生を対象に，読書興味や読書の目的などを調査した。岡田（16—1）は，毎日新聞社の「読書世論調査」を分析した。阪本（23—2・3）は，読書興味を取りあげパーソナリティの発達との関連を概説した。早津（24—1）は，高校生を対象に「読んでおもしろかった本」「感銘の深かった本」を調べた。

次に，とくに弱視児を対象とした佐藤の一連の研究を取りあげる。読書速度の検討（17—3・4）では，次のように要約した。「小学校1年から6年まで，各学年とも，弱視児の読速度は普通児に比して遅い。……読速度の発達をみると，小1から小4までの発達は著しいが，小4以後は停滞する。正確度については小1から小6まで，学年別に有意な差はない。……視力と読速度は低い相関がみられる。正確度では視力と関係ない」。読解力の検討（18—4）では，弱視児は，正視の時間の場合には読解力の総点と下位能力において普通児より劣っていたが，時間を倍にした場合には普通児との間に有意差はなかったとまとめた。さらに，読字力の検討（19—3）では，次のように要約した。「正規にきめられた時間では，小1，小2群も小3～小6群もいずれも普通児より劣っている。時間を倍にした場合は，小1，小2は普通児のレベルに達していたが，小3～小6群はまだ普通児より劣っていてもう少し時間を必要とするようであった。……視力の上昇とともに成績はあがっている。視力のとくに劣るものは時間を倍にしても普通児の水準に達しない」

また，斎藤（21—1・2）は，小学校3年と4年の読書不振児と良読児を対象にして，読書不振児における言語的符号化について言語媒介理論の立場から検討し，次のようにまとめた。「平均再認量は熟知刺激において有意に多かったが読書能力と発達水準の要因は有効でなかった。……符号化が容易である熟知絵刺激に対しては読書力のいかんを問わず言語ラベルが用いられたが，新奇刺激になるとリハーサル様式が言語ラベルから視覚イメージに変換される。このことは3年において特に顕著である」

鉾木は，児童を対象にして，視点の心理学的分析を行った。文の述部に焦点を合わせた検討（25—1）では，「1，3年生では，自分の視野と絵内人物の視野が対立する場合，自分の視点からの記述が比較的多かった。対して，6年生では絵内人物の視点にたつ反応が95%以上をしめていた」という要約にみるように，1年生，3年生と6年生とでは異なることを認め，直接話法における視点の移行を問題とした検討（25—3）では，「6年生，2年生ともに，地文の示す人物（話者）ではなく，その発話の内容である会話文の主語の指示する人物の視点にたって事態（猫の動き）を表現している組み合わせを正しい表現としてうけいれることがわかった。そのさい，人物の位置は無関係であった」とまとめた。また，4年生と6年生を対象として（26—1），「読み手の視点の移行を，絵内人物への文による指示の仕方の違いを主要因として，発達的に検討した」

7　研究法に関する研究

ほとんどが“資料”として掲載されているのであるが，「読書の研究法」が解説を兼ねて取りあげられており，一つの大きなまとまりになっているので，関係する“原著論文”にも触れながら，とくに取りあげる。

坂野（21—3・4）は事例研究法を，山田（22—4）はクローズ法を考察した。山田には，他に，クローズ法に関する2編（22—1・2；23—2・3）がある。今井（23—1）は統制群法を，守（23—2・3）と堀（23—2・3）は，それぞれSD法（semantic differential）を考察した。守が基礎の理論を，堀が読書研究への適用を問題としている。有沢（23—4）は「よみの歴史的研究法」を主題とし，中山と安部（24—4）は発達的研究法を，海保（24—4）は「情報処理論的アプローチと反応時間」を主題とした。また，田中（25—3）は内観法の利用価値を検討し，被験者の内省報告にもとづく言いよどみを分析した（24—2）。なお，渋江（22—4）が用いた心理曲線法は「読書の研究法」の一つであり，茂呂（25—2，26—1），大城（23—1）の検討は，研究法上の問題として取りあげ

ることができる。

引用文献

相沢孝利・種田庸宥・山口清二郎・七条美喜子（3—4，1959年） 戦争マンガの内容分析（18—21ぺ）

荒井積（2—1，1957年） 本校生徒の読書興味傾向の調査について（50—55ぺ）

有沢俊太郎（23—4，1979年） 読書の研究法(Ⅵ)——よみの歴史的研究法——（130—137ぺ）

庵逧巌（1—1，1956年） 文章の難易度よりみた適書選択の基準について（試案）（29—33ぺ）

庵逧巌（22—3，1979年） 高卒生の国語学力の一側面——入試解答の分析による考察——（59—68ぺ）

池田進一（23—4，1979年） 読書材料と理解の関係(1)——音読速度からの分析——（115—120ぺ）

池田進一（24—2，1980年） 読書材料と理解の関係(2)——理解課題の分析——（56—62ぺ）

池田進一（24—3，1980年） 読書材料と理解の関係(3)——Legibility 要因の検討——（112—118ぺ）

伊藤逸平（3—4，1959年） 内外漫画の比較研究——第4回公開研究会の記録——（50—60ぺ）

今井靖親（23—1，1979年） 読書の研究法(Ⅲ)——統制群法の原理と応用——（25—31ぺ）

今井靖親（23—4，1979年） 幼児の読字学習における指導法の検討——片仮名と漢字の学習難易度と絵の呈示効果——（97—104ぺ）

今井靖親・福沢周亮（24—3，1980年） 「かな」の読み・書きに関する心理学的研究の展望（77—78ぺ）

今井靖親・森岡裕子（21—1・2） 幼児の書字行動に及ぼす指導法の効果（14—22ぺ）

上野英夫（3—3，1959年） 「読みやすさ」の研究にかんする展望——研究の歩みと問題点について——（54—60ぺ）

上野英夫（5—2，1960年） 文章の理解しやすさに関する研究Ⅰ——理論的研究——（8—18ぺ）

内田伸子（25—2，1981年） 説明文の記憶と理解に及ぼす視点の効果（45—58ぺ）

宇留野藤雄・阪本敬彦（4—2，1959年） 読書中の情緒の測定（4—10ぺ）

大井佳子（25—1，1981年） ＡＴＩによる読み過程分析の試み——児童の読みに及ぼす挿入質問の効果——（11—19ぺ）

大神貞男（8—1，1964年） 犯罪少年の読書療法による臨床例（37—42ぺ）

大神貞男（9—1，1965年） 常習恐喝少年の読書療法による治療例（19—25ぺ）

大神貞男（9—3，1966年） 非行少年の読書療法による治療例——第3報告：重罪犯罪少年Ｓ．Ｆ．の場合——（8—14ぺ）

大神貞男（10—1，1967年） 家出少年の読書療法による治療例——症例第4報告——（1—7ぺ）

大神貞男（10—2，1967年） 非行少年の読書療法による治療例——第5報告：恐迫性の性非行少年ＭＴの場合——（9—15ぺ）

大神貞男（10—3，1967年） 非行少年の読書療法による治療例——第6報告：高度非行少年混血児ＫＭの場合——（18—24ぺ）

大神貞男（11—1・2，1968年） 非行少年の読書療法による治療例——症例第7報告——（88—90ぺ）

大神貞男（11—1・2，1968年） 夜尿症児の読書療法による軽快例——症例第8報告——（48—51ぺ）

大神貞男（11—3，1968年） 非行少年の読書療法による治療例——症例第9報告——（22—28ぺ）

大神貞男（12—3，1969年） 非行原因論と読書療法の治療理論（No. 1）（28—34ぺ）

大神貞男（13—1・2，1970年） 読書療法の予後追跡研究（43—49ぺ）

大神貞男（13—3・4，1971年） 読書療法の治療理論（No. 2）——治療目標理論について——（154—159ぺ）

大神貞男（15—2，1972年） 補導委託所における読書療法集団化の試みについて（61—66ぺ）

大神貞男（16—3，1972年） 読書療法の治療理論（No.

3) ——治療構造および治療機制について—— (81—86ペ)

大神貞男 (18—3, 1974年) 知能障害を伴なった常習交通違反少年の読書療法的接近について——読書療法の症例研究 No. 15—— (86—91ペ)

大城宜武 (23—1, 1979年) 説話意味論研究——瘤取説話を記述する試み—— (11—19ペ)

大城宜武 (23—4, 1979年) 漫画の表現形式——漫画認知の機制に関する基礎的研究 1—— (105—114ペ)

大城宜武 (24—3, 1980年) 漫画の理論——記号論的アプローチ—— (99—111ペ)

大城宜武 (24—4, 1980年) 絵本評価尺度の多変量解析 (125—133ペ)

大城宜武 (26—1, 1982年) 漫画の情緒的意味体系——漫画認知の機制に関する基礎的研究(2)—— (1—9ペ)

大西誠一郎・塚原美代子・佐藤真理子 (15—3, 1972年) 読書レディネスに関する研究(Ⅰ) (79—86ペ)

大野陽子 (9—1, 1965年) 物語の療法効果について——TAT反応の変化を通して—— (38—40ペ)

岡田明 (3—2, 1958年) 読解過程の研究(Ⅰ) (18—28ペ)

岡田明 (6—1・2, 1962年) 読書による態度変容の実験的研究——ノン・フィクション「動物となかよしになるには」の場合—— (17—22ペ)

岡田明 (8—1, 1964年) モノローグ法による読書過程の分析的研究 (7—10ペ)

岡田明 (10—1, 1967年) 速読に関する文献(1) (45—51ペ)

岡田明 (10—2, 1967年) 速読に関する文献(2) (44—51ペ)

岡田明 (11—1・2, 1968年) 読みの柔軟性に関する研究 (16—21ペ)

岡田明 (14—1・2, 1971年) 児童の読書能力の因子分析的研究 (7—13ペ)

岡田滋男 (16—1, 1972年) 読書世論史(Ⅰ)——「読書世論調査」から—— (2—17ペ)

岡田文男 (5—2, 1960年) マンガと子供についての一考察 (31—36ペ)

岡本奎六 (6—1・2, 1962年) 読書過程の分析的研究——モノログ法による—— (1—8ペ)

小野泰博 (8—3, 1965年) 読書療法の理論をめぐって (8—15ペ)

海保博之 (24—4, 1980年) 読書の研究法(Ⅷ)——情報処理論的アプローチと反応時間—— (154—163ペ)

楮本良平 (9—1, 1965年) 性格問題児の読書治療の一つの事例研究 (26—29ペ)

片桐啓恵 (22—1・2, 1979年) 高校生のマンガに対する意識——アンケート調査の結果から——(39—50ペ)

加藤薫敏 (13—3・4, 1971年) 読書発表会による読書興味の指導 (164—171ペ)

上吉川脩 (8—1, 1964年) 問題児の読書による治療指導の事例研究 (33—36ペ)

河井芳文 (11—1・2, 1968年) 読みにおける語彙の発達 (22—29ペ)

漢那憲治 (22—4, 1979年) 読み聞かせの効果(Ⅰ)——読書力におよぼす読み聞かせの効果についての一考察—— (95—103ペ)

木内守正・長谷川真一・日野俊顕 (5—4, 1961年) 子どもマンガ史 (1—35ペ)

北島武彦 (6—1・2, 1962年) 青少年の読書生活の実態調査——公共図書館における—— (49—53ペ)

木村典子 (9—3, 1966年) 人生観の確立と読書との関係に関する調査 (22—28ペ)

日下哲夫 (14—1・2, 1971年) 読書療法の事例研究 (27—31ペ)

小和田公・金野悦子・渡辺順子・高木和子(20—4, 1977年) 絵本の読みきかせに関する研究Ⅱ——おはなしつくりにおよぼす読みきかせの効果の検討——(105—111ペ)

斎藤稔子 (21—1・2, 1978年) 再認課題における読書不振児の言語的符号化について (1—13ペ)

坂野雄二 (21—3・4, 1978年) 読書の研究法(Ⅰ)——

事例研究法――(91―95ペ)

阪本一郎(3―1,1958年) 読書興味診断の試み(32―37ペ)

阪本一郎(3―4,1959年) 児童漫画の世論調査の試み(1―9ペ)

阪本一郎(4―2,1959年) 小学生の漫画の興味(32―40ペ)

阪本一郎(4―3,1960年) 小学生における多読児と不読児との性格の比較研究(1―9ペ)

阪本一郎(5―1,1960年) 漫画「赤胴鈴之助」論(Ⅰ)(15―20ペ)

阪本一郎(5―2,1960年) 漫画「赤胴鈴之助」論(Ⅱ)(25―30ペ)

阪本一郎(5―4,1961年) 少年漫画の一断層――「月光仮面」と「変幻三日月丸」とを例にして――(36―45ペ)

阪本一郎(6―1・2,1962年) 文章の語彙比重の査定法――Readability の研究の一つの試み――(37―44ペ)

阪本一郎(6―3,1962年) 多読者と不読者との性格の比較研究――中学生と高校生について――(1―6ペ)

阪本一郎(6―4,7―1,1963年) 読み物による性格の形成と読書療法(1―5ペ)

阪本一郎(7―2,1963年) 国語教科書の文の長さとその測定法(17―24ペ)

阪本一郎(8―1,1964年) 文の長さの比重の査定法――Readability の研究の試み――(1―6ペ)

阪本一郎(8―2,1965年) 現代ジャーナリズムの文の長さ(11―17ペ)

阪本一郎(8―3,1965年) わが国での読書療法の研究と事例(30―35ペ)

阪本一郎(9―1,1965年) 現代小説の文長構造(30―37ペ)

阪本一郎(9―2,1965年) 最近の児童漫画と子ども(Ⅰ)(40―47ペ)

阪本一郎(9―3,1966年) 最近の児童漫画と子ども(Ⅱ)(15―21ペ)

阪本一郎(11―3,1968年) 児童漫画「のらくろ」の作品分析(1―11ペ)

阪本一郎(12―1,1968年) 『冒険ダン吉』の作品分析(18―24ペ)

阪本一郎(12―2,1969年) 児童漫画「長靴の三銃士」(36―42ペ)

阪本一郎(14―1・2,1971年) 読みやすさの基準の一試案(1―6ペ)

阪本一郎(15―1,1971年) 子どもストーリ漫画略史(1―16ペ)

阪本一郎(15―2,1972年) 読書速度の発達の一様相――リーダビリティとの関連において――(39―43ペ)

阪本一郎(16―2,1972年) 魔の救援者たち――児童漫画の研究――(39―46ペ)

阪本一郎(16―4,1973年) 読書速度の発達の一様相(Ⅱ)――文学的文章と理科的文章との比較――(113―120ペ)

阪本一郎(17―2,1973年) 漫画の文法とその読みのモデル(48―57ペ)

阪本一郎(18―3,1974年) 『正ちゃん』と『ズク小僧』――わが国初期の新聞連載子ども漫画――(59―68ペ)

阪本一郎(19―1・2,1975年) 人物の深さの係数について――物語絵本の研究のために――(25―31ペ)

阪本一郎(20―1,1976年) 物語絵本の評価法(提案)(1―7ペ)

阪本一郎(23―2・3,1979年) 読書興味の発達と指導(44―50ペ)

阪本一郎(24―1,1980年) 活字ばなれの時代(14―19ペ)

阪本一郎・西尾宗人(3―3,1959年) 小学校児童における読書興味の発達についての一調査(13―21ペ)

阪本一郎・西尾宗人(3―4,1959年) 漫画に対する児童の興味の一調査(13―17ペ)

阪本一郎・野口隆(3―4,1959年) 中・高等学校生徒における読書興味の発達についての一調査(29―32ペ)

阪本一郎・今井路子・篠原寛子(11―3,1968年) 幼児

のお話の能力の発達(1) (29—33ぺ)
阪本一郎・今井路子・篠原寛子 (12—1, 1968年) 幼児のお話の能力の発達(2) (36—41ぺ)
阪本一郎・榎本鈴子・松浦百合子 (14—1・2, 1971年) 絵本の語彙調査 (14—19ぺ)
阪本一郎・岩坂安希子・相模優子・友正真子(11—1・2, 1968年) 四コマ漫画の作品分析——「サザエさん」を素材にして—— (30—47ぺ)
阪本一郎・中村美子・松本律子・島田早苗 (11—1・2, 1968年) 情緒不安定児に対する読書療法の事例研究 (52—65ぺ)
阪本敬彦・高木和子 (8—3, 1965年) 精神医学における読書療法 (16—24ぺ)
阪本敬彦・高木和子 (11—1・2, 1968年) 回帰成就値による読書不振児の研究 (1—15ぺ)
阪本敬彦・山中輝子 (8—3, 1965年) C. Shrodes の読書療法論 (紹介) (25—29ぺ)
笹川郷 (1—2, 1957年) こどもの読んでいるマンガの実態と読書指導 (34—40ぺ)
佐々木碩哉 (1—1, 1956年) 読書実態の推移——昭和二十一年から三十年まで——読書世論調査の九年間 (37—41ぺ)
佐々木碩哉 (2—1, 1957年) 読書実態の推移 (読書世論調査の九年間) ——Ⅱ—— (55—61ぺ)
佐藤泰正 (3—2, 1958年) 読書興味・関心の発達 (1—7ぺ)
佐藤泰正 (9—3, 1966年) 盲児の点字触読に関する発達的研究 (39—47ぺ)
佐藤泰正 (10—1, 1967年) 盲児の点字触読に関する発達的研究(2)——点字触読に影響する要因—— (8—19ぺ)
佐藤泰正 (11—3, 1968年) 大学生に行なった速読訓練の効果(1) (12—15ぺ)
佐藤泰正 (12—1, 1968年) 盲児の点字触読に関する発達的研究(3)——盲学校中途編入者の点字触読能力—— (25—35ぺ)
佐藤泰正 (13—1・2, 1970年) 大学生に行った速読訓練の効果(2) (1—6ぺ)
佐藤泰正 (17—3・4, 1974年) 弱視児の読書速度に関する研究 (75—80ぺ)
佐藤泰正 (18—4, 1975年) 弱視児の読解力に関する研究 (97—104ぺ)
佐藤泰正 (19—3, 1975年) 弱視児の読字力に関する研究 (86—92ぺ)
沢田瑞也・小林幸子・田代康子・高木和子 (17—3・4, 1974年) 絵本のおもしろさの分析——内容の分析と読みきかせ中の反応を中心として—— (81—93ぺ)
鹿内信善 (22—3, 1979年) 散文教材理解に及ぼす学習目標呈示の効果 (79—88ぺ)
鹿内信善 (23—1, 1979年) 節見出し語及びファミリア語が散文教材の学習に及ぼす効果 (1—10ぺ)
鹿内信善 (24—1, 1980年) 要約・ノートおよびアンダーライン活動が散文教材の学習におよぼす効果 (1—9ぺ)
鹿内信善 (24—2, 1980年) 読書感想文の記述が科学的読書材の学習に及ぼす効果 (45—55ぺ)
鹿内信善 (25—1, 1981年) 主題の呈示と予想活動が物語文の理解におよぼす効果 (1—10ぺ)
渋江芳夫 (22—4, 1979年) 心理曲線法と連想法を取り入れた読書指導 (104—111ぺ)
嶋路和夫 (20—2, 1976年) 長編読書力の基礎的な要因とその指導 (52—64ぺ)
鈴木情一 (25—1, 1981年) 視点の言語心理学的研究——文の述部に焦点をおいて—— (20—31ぺ)
鈴木情一 (25—3, 1981年) 視点の言語心理学的研究——直接話法における視点の移行について—— (96—107ぺ)
鈴木情一 (26—1, 1982年) 視点の言語心理学的研究(3)——主観述語における指示条件に焦点をおいて—— (10—23ぺ)
スタインバーグ, ダニー・D. (25—2, 1981年) 帰納法による仮名の読字学習 (59—69ぺ)

スタインバーグ，ダニー・D.：折坂利津子・中峰朝子（24—1，1980年）　平仮名と片仮名の読字学習難易度の同等性（10—13ぺ）

スタインバーグ，ダニー・D.：河野利津子（25—3，1981年）　英単語とアルファベット文字の読字学習の比較（89—95ぺ）

スタインバーグ，ダニー・D.：陳省仁(24—4，1980年)　ある三歳健聴唖児の読みの学習（134—141ぺ）

関戸信夫・高野婦美・南条悦子（5—4，1961年）　漫画に関する文献目録（1945—1960）（46—62ぺ）

高木和子（15—3，1972年）　読みの指導への心理言語学的接近(Ⅰ)——入門期におけるシンタックス能力の個人差測定の試み——（87—95ぺ）

高木和子（22—1・2，1979年）　幼児の物語理解におよぼすメディア特性の影響——テレビ視聴による物語理解を中心として——（1—9ぺ）

高木和子・小林幸子・田代康子・沢田瑞也(18—4，1975年)　絵本の読みきかせに関する研究(1)——くり返し読みきかせによる分析——（105—113ぺ）

竹中由美・真瀬けい子・阪本一郎（16—3，1972年）　子ども週刊誌のマンガの現状——『ハレンチ学園』と『銭ゲバ』を中心にして——（73—80ぺ）

田中瑩一（20—2，1976年）　絵本の受容に関する研究（Ⅰ）——物語絵本の文章表現の相違が幼児の反応に及ぼす影響について——（37—51ぺ）

田中敏（24—2，1980年）　認知—発話の言いよどみにかんする内省報告の分析（63—68ぺ）

田中敏（25—3，1981年）　認知心理学における内観法の利用価値（108—114ぺ）

ダン－ランキン，ピーター：レトン，ドナルド・A：佐藤政人（16—2，1972年）　タイポス35にみる平仮名の類似性（35—38ぺ）

佃典子（16—2，1972年）　読書による態度変容について（54—62ぺ）

東京学芸大学読書科学研究会（3—1，1958年）　児童漫画における語彙の研究（19—27ぺ）

読書心理部会共同研究（5—1，1960年）　読書過程の分析——その方法論的研究——（1—14ぺ）

中島章一（12—3，1969年）　読書興味指導と学校図書館P・R活動との関連（41—48ぺ）

中野善達・小出馨（8—2，1965年）　僻地児童の読書力に関する研究（18—22ぺ）

永沢幸七・福沢周亮（4—3，1960年）　読書力に関する一考察——意味把握・読書速度等の相互関係を中心にして——（51—57ぺ）

中山勘次郎・安部一子（24—4，1980年）　読書の研究法（Ⅶ)——発達的研究法——（147—153ぺ）

日本読書学会第二研究部会（6—3，1962年）　読書による態度変容の実験的研究（36—49ぺ）

日本読書学会第四研究部会（1—2，1957年）　読書社会調査中間報告（27—29ぺ）

日本読書学会第四部会読書社会調査部会　平沢薫・笹[illegible]浩太郎・裏田武夫・桶本正夫・室伏武（2—1，1957年）「読書世論調査」の報告（11—16ぺ）

日本読書学会第四特別委員会第二研究部会（5—3，1961年）　読書による青少年の態度の変容の実験的研究（1—16ぺ）

日本読書学会第四特別委員会第一研究部会（5—3，1961年）　読書過程の実験的研究（'60年度研究第一報告）——主として脳波について——（17—24ぺ）

日本読書学会読書科学総合研究第3分科会（6—1・2，1962年）　勤労青少年の生活と読書——「勤労青少年に関する読書実態調査」報告——（59—73ぺ）

日本読書学会読書社会学部会（3—2，1958年）　第四回読書社会調査の中間報告（34—38ぺ）

日本読書学会標準読み物研究特別委員会（6—4，7—1，1963年）　子どもの性格形成の適書目録〔Ⅰ〕(6—110ぺ)

日本読書学会標準読み物研究特別委員会(7—3・4，1964年)　子どもの性格形成の適書目録〔2〕(1—119ぺ)

野田彰・黒沢浩（3—4，1959年）　子どもの雑誌批判をめぐって——最近の漫画を中心に——（10—12ぺ）

野間教育研究所（8—3，1965年）　読書療法研究に関する文献目録（36—46ぺ）

波多野完治・小笠原生子（2—2，1957年）　やさしい文章とむずかしい文章——デール博士の立場——（54—60ぺ）

波多野完治・小笠原生子（4—2，1956年）　読み易さの研究——クローズ法の応用——（16—23ぺ）

波多野完治・木村斐子（1—2，1957年）　子どもとマンガ——ある実態調査——（30—33ぺ）

波多野完治・中村明（4—1，1959年）　川端康成における人物描写——文章心理学的研究——（4—23ぺ）

林知己夫・竹内郁郎・富永健一（2—3，1958年）　読書人と非読書人の態度調査（1—41ぺ）

早津秀雄（24—1，1980年）　現代国語の学習と読書——読書の実態とその対策について——（27—32ぺ）

原野広太郎（6—1・2，1962年）　読書中における心理・生理反応に関する研究(2)——読書材料と心搏，脈波，呼吸，ＰＧＲとの関係について——（9—12ぺ）

半田茂雄（11—3，1968年）　資料　読書療法の事例研究「経営的にはあくした生徒指導」より（49—52ぺ）

平賀増美（17—2，1973年）　高校生の読書傾向とその意識——全寮制高校の読書調査（1967～1971）より——（35—47ぺ）

福沢幾男・福沢周亮（7—2，1963年）　漢字の学習指導に関する基礎的研究——読みについて——（25—32ぺ）

福沢周亮（11—3，1968年）　漢字における読字の困難点に関する発達的研究（Ⅰ）（16—21ぺ）

福沢周亮（18—1・2，1974年）　教育漢字における読字学習のための基本語彙に関する研究（3—36ぺ）

堀啓造（22—1・2，1979年）　詳細型物語とあらすじ型物語の登場人物のイメージの比較（30—38ぺ）

堀啓造（23—2・3，1979年）　読書の研究法（Ⅴ）——ＳＤ法による読書研究——（55—62ぺ）

本間康平・古野有隣（9—1，1965年）　大学生と読書——実態調査の分析から——（1—12ぺ）

松村康平・板垣葉子（3—3，1959年）　読書における人格の硬さに関する研究——人格形成に役立つ読書指導の原理を生み出す試み——（7—12ぺ）

丸野俊一・高木和子（22—3，1979年）　物語の理解・記憶過程における予測の役割（69—78ぺ）

村石昭三（4—1，1959年）　幼稚園児のリテラシー（24—31ぺ）

村石昭三・阪本敬彦・加賀秀夫（5—2，1960年）　最適の活字を考える基準について（19—24ぺ）

村石昭三・阪本敬彦・加賀秀夫（6—1・2，1962年）　カナ文字の識別に関すを研究(1)（23—27ぺ）

室伏武（8—3，1965年）　読書療法研究の史的展望（1—7ぺ）

守一雄（23—2・3，1979年）　読書の研究法（Ⅳ）——ＳＤ法の理論——（51—54ぺ）

茂呂雄二（25—2，1981年）　日本語文章の形式的表示(1)——命題翻訳を中心に——（70—78ぺ）

茂呂雄二（26—1，1982年）　日本語文章の形式的表示(2)——統括性を中心に——（24—36ぺ）

山田純（22—1・2，1979年）　日本語クローズ法の基礎的研究（10—18ぺ）

山田純（22—4，1979年）　読書の研究法（Ⅱ）——クローズ法——（119—127ぺ）

山田純（23—2・3，1979年）　クローズ法と文理解と文章理解（33—43ぺ）

山本晴雄（14—1・2，1971年）　非行少年に対する純粋読書療法の事例（20—26ぺ）

横田和子（14—1・2，1971年）「読書の目的」に関する調査（32—43ぺ）

来明子（10—1，1967年）　読書による意見変容の実験的研究（26—35ぺ）

渡辺正亥（5—1，1960年）　非行少年の読書能力（Ⅰ）——特に中学生について——（21—28ぺ）

渡辺正亥（5—2，1960年）　非行少年の読書能力（Ⅱ）——特に中学生について——（37—49ぺ）

第 3 部

想 い 出 と 提 言

ドナルド・A・レトン 104

有沢俊太郎・出雲路　猛 105

今井　靖親・裏田　武夫 106

尾原　淳夫・金平聖之助 107

佐藤　泰正・鹿内　信善 108

嶋路　和夫・高木　和子 109

波多野完治・浜中　重信 110

飛田　文雄・福沢　周亮 111

増田　信一・松村　康平 112

室伏　　武・山田　　純 113

首藤　久義・村石　昭三 114

[Part 3] Reminiscences and Proposals

Reflections

University of Hawaii
Donald A. Leton*

This is a moment in the history of the Japan Reading Association for which members and officers of the Association, and supportive family members, may be justly proud. I am very honored to participate in this commemorative issue of the *Science of Reading*. When informed that I was to receive the Annual Award for contributions to the field of reading in Japan I was very awed and humbled. The privilege of serving the editorial board for *Science of Reading* has provided me with a number of intrinsic rewards. The most important of these has been the opportunity to learn about the important reading research conducted in Japan. I would apologize for most of the U. S. reading specialists who remain uninformed about the significant work in reading in Japan.

On several occasions in presenting speeches to the Board of Directors and members of J. R. A., I have had the opportunity to share my ideas and interests in the study of reading. These speeches have included, "The Neurocognitive Bases of Reading Skills," and "Computer Simulation of Reading." I appreciated the excellent translations and the gracious, patient audiences for these topics.

The opportunities to host members of the association and to plan program activities for the Japan-Hawaii Reading Conferences have been a distinctive social privilege. Members of the Hawaii Reading Association enjoyed the social and professional contacts at the conferences. These occasions were memorable life events for me and my family.

My reflections on receiving the award included the following kinds of thoughts: "Please allow me to serve J. R. A. and the journal so that I may become deserving of the award." "Convey my respects to the teachers in Japan for their outstanding success in teaching reading; to the parents for their facilitative assistance; and to your children. They live and practice the ideals and the cultural values of reading." "The services of the editors for *Scince of Reading*, and the officers of the Association have provided you with professional wisdom, national renown and inspirational leadership."

There are a number of causal factors for the superiority of your reading achievement and for the general academic excellence of your students. If and when students and teachers in the U. S. learn about the efficiencies of your syllabary (*Kana*) and graphic (*Kanji*) scripts for reading development, and as they struggle with the irregularities in the English alphabet, they will envy you. They might even consider some revolutionary changes in English orthography.

In spite of the differences in the orthographies and oral languages we must recognize that reading is panhumanic. It serves a common educational purpose within societies, and it bridges all of the world's cultures and civilizations. The dissemination of literature and research on reading in Japan will serve the ideology of our profession. This may be an appropriate occasion to review the growth and dynamics of the Japan Reading Association and to view its future directions.

* Recipient of J. R. A. 15th Annual Merit Award for Contributions to *The Science of Reading*.

有沢俊太郎　第13回読書科学研究奨励賞受賞

私は，これから国語教育の研究を進めようとしているものの一人という立場で，この学会に期待することを次の二点について述べてみたい。

(1)　読みに関心をもつあらゆる人に開かれた学会

大会や月例会に出席して感じることは，実に様々な専門家のご意見に触れることができる，ということである。私にはこれが大変勉強になる。同じ研究対象でも，専門が違えばまた異なるように扱うことができることを，しばしば知らされる。実践家のご発表には，自分の考えていることの妥当性が生徒の反応という事実によって検証されることを期待する。

本来，読みは複雑な言語行動なので，その研究は特定のアプローチだけでは不十分になりやすい。自分の専門分野を大切にしながら，なお他の分野への目配りが必要な研究領域である。

これまでの学際的な視点を，今後も持ち続けていっていただきたいと思う。

(2)　『読書科学』の性格

学会誌は，(1)で述べた学会の特色をよく反映するものでなければならない。様々な専門家が集まって成立している学会なのだから，学会誌も様々な分野からの執筆者を得ることが大切だと思う。内容面でも，原著論文のほかに実践記録，資料，書評，月例会要旨など多様性をもたせていただきたい。

I．R．A．では，複数の学会誌にそれぞれ固有の役割を受け持たせているようである。『読書科学』だけが季刊で発刊されているわが国のばあいとはもちろん事情は異なるけれど，それだけこの学会誌に課せられた使命は重いともいえる。地方に住んでいるものにとって，学会員の意識は主に学会誌によって得られる。様々な会員の必要性に合わせた情報の提供を願うものである。

出雲路　猛　第7回読書科学研究奨励賞受賞

1960年代は「児童文学」ということばが世界的に流布していました。ウィーンで発行していた「Bookbird」はChildren's 'Literature という言葉をつかって，世界各地で出版される子どもの本の批評をしていました。優れた日本児童文学も，この頃，おおいに現われていました。

わたしは日本の児童文学の胎頭に大きな関心を持ちながら，児童文学は，高い芸術の領域で，文学として評価しなければならないと考えていました。

この時期に読み込んだ「ナルニア国物語」や「ホビットの冒険」は，日本に宮沢賢治や新美南吉が存在した以上に，わたしには大きな衝撃でした。“児童文学は文学である”という実感があったのです。わたしが，「児童文学におけるファンタジー論」を手掛けたのは，この実感を得た直後でした。連続掲載する論の半ばから，石森延男先生の同感というお言葉と励ましが，わたしを力づけました。存外の受賞にも驚きましたが，わたしは，この論を進めながら，児童文学を，文学として，高い芸術として発見していたという実感は，狂いのないものであったと思っています。

1974年，この受賞を機会にＩＲＡウィーン会議に出席しました。この機会は，わたしの実感をさらに確かめてくれました。ウィーンのフールマンガッセにＩＢＢＹの本部を尋ねました。その事務局(Dr. Richard Banberger)の計いで，オーストリアの児童文学作家ミラ・ローベ女史と児童文学，子どもの本について語り合うことができました。彼女は，「この仕事は愛がなければできません」という言葉を，児童文学にたずさわるものの本心として打ちあけてくれましたが，わたしの肝に銘じて忘れられない言葉になりました。子どもの本を流れる児童文学には，純な人間性の発露があり，子どもへの純一な愛が，ごまかしのない作家評価につながり，磨かれた作品を生みだす根源であると思ったのです。

今井　靖親　第15回読書科学研究奨励賞受賞

(1)「読み」を研究対象としうる学問として，国語学，国文学，言語学，心理学，教育学，図書館学，生理学，文字学，文化人類学など，実に多くの種類を挙げることができる。日本読書学会は，「読み」というこの学際的領域について，理論的・実践的に研究する者たちの“集いの場”でありたいと思う。しかし，本学会の現状を見る限りでは，まだ同好の士の集まり方，あるいはその活動力は弱い，との感は否めない。上記の個々の学問領域で，「読み」に関する研究を行なっていながら，本学会の存在すら知らない人も少なくないはずである。そのような人々に本学会への参加を呼びかけ，同士をふやしたいものである。なお，このことにかかわって，本学会の「名称」と「目的」に，いささか不満を表明しておきたい。会則によると，「本会は日本読書学会と称する」（第1条）とあり，また「本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって，日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする」（第3条）とある（下線は筆者による）。つまり，会則では，Reading を広義の「読み」とはとらえず，「書（本）を読む」という狭い語義でとらえ，かつ表現しているように思えるのである。

(2)本学会の特徴の一つに“国際性の豊かさ”が挙げられよう。本学会の国際読書学会への加盟，国際読書会議への参加，日本・ハワイ読書会議の開催などがそれをよく証明している。学会自体の規模は小さいとは言え，会員がこれだけ国際的な研修活動の機会を持てる学会は，日本には他にないのではないか。これは本学会の阪本敬彦事務局長のご尽力に負うところ大なのであるが，我々会員も，せっかくの機会をできるだけ利用して，積極的に国際理解・国際親善の役割を果すように心がけたいものである。

裏田　武夫　創立当時理事

私の日本読書学会創設の思い出は，学会内部の方々は別として，朝日新聞社の当時広告部におられた桶本正夫氏と切り離すことはできない。桶本正夫氏は現在神奈川新聞社社長として健在であり，読書学会に関係のある一人として喜びにたえない。

さて，当時阪本一郎先生や深川恒喜先生たちが，どのようにして朝日新聞社と結びついたのか，私はまったく知らない。これは学会の歴史のために，ぜひ先生方に明らかにしておいていただきたいものと思っている。多少門外漢として類推を許されるならば，朝日新聞社側にもいくつかの要因があったのではないかと思われる。全国紙として朝日新聞は，地域地区によって必らずしも他の全国紙をリードしているわけでもない。それがそのまま広告掲載料金に関係してくる。そこで大きな意味で朝日新聞がクオリティ・ペーパーであるという地歩を築くための一方法として読書研究（当時はまだ学会設立にまで行っていなかった）に結びついたのではないだろうか。もし，それだけなら次元の低い話である。ここに桶本氏が登場してくる。桶本さん（こう呼ばせていただく）はまったくの朝日人であった。と同時に，たいへんな読書家でもあった。広告文中に自分の理解しえない語句があると，必らず本によって理解しようとしたし，毎夜どんなに遅く帰宅しても，就寝前の読書は欠かしたこともない。そして，テレビなどのマス・メディアが日常のコミュニケーション生活に占める割合が急激に増大するなかで，国民の読書ばなれ活字ばなれを深刻に憂えておられたようである。私自身も実はこの憂いに共感して，多少お手伝いさせていただいたわけである。当時朝日新聞社（もちろん旧館）の会議室で開かれた研究会も，何かしら総合科学としての読書科学樹立の熱気があったような気がする。桶本さんを思い出しながら，創設時の初心にかえって，学会の使命を再思してほしいと念願する。

尾原　淳夫　第12回読書科学賞受賞

わたしが，読書科学賞を受けたのは，第22回読書学会研究大会の席上である。ときは昭和53年10月14日，ところは，荒城の月を思わす筑波大学附属小学校であった。奇しくも，わたしは，「社会の変化に対応する読書行為と読書技術」について発表し，次いで阪本一郎名誉会長が「読書興味の発達と指導」と題して発表され，記念すべき研究大会であった。更には，阪本一郎先生の指示を受けて原案作成をわたしがした，図書館教育研究会編「読書指導通論」　学芸図書　ができあがり，初めて手にしたのがこの会場であった。思い出多い日であった。

「あなたは　永年にわたり　学校図書館運動に力を注がれ　読書指導の研究と実践に貢献されました」が賞状の文面である。永年とは古いことである。古いだけがわたしの取りえであったかも知れぬ。

全国学校図書館協議会の創設に参画し，昭和25年２月27日に発足した。初代会長に久米井束，そして二代会長に阪本一郎が就任。その頃，阪本一郎先生は，「読書指導―原理と方法―」を牧書店から昭和25年９月８日に出版され，新しい読書指導理論を打ち立てられ，この書がわが国の斯道啓蒙の定本となった。わたしもまた，この書を座右の書とした。

やや遅れて昭和31年，日本読書学会が誕生し，初代会長石山脩平。この会もまた，二代会長に阪本一郎が就任。このようにして，わたしは阪本一郎先生と読書研究と行を共にすることになった。

第１回国際読書学会がパリのユネスコ・パレスで開催された。ときは昭和41年８月8・9日であった。当時わたしは大阪市指導主事をしていて，阪本一郎先生は日本女子大学教授で，本会の会長であった。招きにより，日本代表として，たった二人で出かけることになった。この時が，わが日本読書学会が世界の檜舞台に出た初めであり，私にとって，特に思い出深い。

金平聖之助　第10回読書科学賞受賞

第10回読書科学賞授与の連絡を事務局からいただいた時，正直のところ，キツネにつままれた想いであった。そのうちに，大学卒業後，主として幼児雑誌の編集という，あえていえば読書学会に隣接した分野にたずさわってきたとはいえ，日常業務におわれ，読書学の研究に手がつかないまま，すごしてきた自分が受賞というのは，何かの手ちがいではないかという不安感にかられ，折返し，滑川道夫先生へご連絡したところ，“米国の児童向けペーパーバックの調査が評価されたのではないか”というご返事がかえってきた。確かに，実務上の必要もあり，1960年代半ばあたりから米国で盛んになった，児童ペーパーバックについての情報集めや調査をつづけており，一度は学会の研究会で発表させていただいたこともあると思い返し，喜んでお受けする気持ちがかたまっていった。

米国の児童の読書は学校・公共図書館備え付けのハードカバーの借出しというのが主流となっていたのだが，それでは“楽しみ読書”（“reading for pleasure”）のうえで最重要と思われる“好きな時に，いつでも取りだして，くり返し読む”という条件を充たされないのはいうまでもなかった。その欠点を埋めたのが，ハードカバーと同じ内容でありながら価格はその⅙程度という低廉なペーパーバックの出現であった事実を知るに及び，児童ペーパーバック熱はますます高まる一方であった。

受賞式の当日，自分の受賞によって，わが国出版界においても児童ペーパーバックへの関心が強まる契機が，たとえかすかであってもつくりだされるのではないかという秘かな願いを抱いて会場へ向かったのであった。

さいごに当日，ご一緒に受賞された大村はま先生から控え室において，国語教育についての姿勢やご経験を，直接，おうかがいできたのは，受賞の喜びにまさるとも劣らぬ感激であったことを，ぜひつけ加えておきたい。

佐藤　泰正　第3回読書科学研究奨励賞受賞

学会創立の頃の思い出ということで何か書いてほしいという原稿依頼ですが，思えばもう26年も前のことで記憶もおぼろげです。何を書こうかと迷いましたが，当時のことを思い出すままに“学会”が誕生した経過などにふれてみたいと思います。たしか，創立のための第1回の会合は有楽町にあった朝日新聞社の会議室で行なわれました。当時，朝日新聞の広告部長をしておられた桶本さん（現北海道支社長）がこの会の世話をして下さったためでした。読書問題の研究に関心をお持ちの先生方が20人近く集まりました。石山脩平，阪本一郎，波多野完治，島崎敏樹，平沢薫などの諸先生のなかにまじって私も末席におりました。皆，高名の先生方ばかりの中で当時まだ20代だった私は，大変かたくなっていたのを憶えています。座長に石山先生が互選され，会は進行しました。事務局原案は読書科学研究会を創立しようとのことでした。その時，会の名称について島崎先生が発言をもとめ，研究会というよりは学会という名まえにして，スケールの大きなものにしたらという提案がありました。私も心ひそかにそう思っていましたが，私のような若輩が口をさしはさむのは恐れ多かったので，島崎先生の発言は我が意を得たりという思いでした。この提案が採用され学会ということになったわけですが，そうでなければ，読書科学研究会ということで発足していたのです。今になって考えれば大変よかったと思います。そして，何回か準備委員会が開かれ，創立のための大会，いわば第1回日本読書学会が開かれる運びになりました。第1回の大会は東京教育大学で行なわれ，約500名近くの出席者があり，盛会のうちに学会が発足したのです。当時の様子がほうふつとしてきますが，あの頃の先生方の大変お若い姿が目に浮んできます。時代の流れをつくづく感じます。

鹿内　信善　第14回読書科学研究奨励賞受賞

日本読書学会の会員としていただき，ようやく4年になろうとしています。長い歴史をもつ学会の歩みに，ごく最近加わったにもかかわらず「読書科学」が通巻100号を迎えること，たいへんうれしく思っております。それだけ，私の研究生活の中で読書学会がしめる位置は大きなものとなっております。

私事で恐縮ですが，ここ数年，散文学習を研究テーマとしております。最近の文章学習研究は，大きく3つに分けられると言われています。ひとつは，コンピューター科学や言語学を背景とした，認知科学に基盤をおくもの。第2は，従来の，語単位の記憶や学習研究から得られた知見を，より大きな文章単位に適用しようとするもの。第3は，オースベルやフレーズなど，もともと教育実践に興味と関心をもつ研究の流れをくむものです。私の立場は第3のものにちかいと思います。したがって単に実験的にきれいな研究ではなく「教授＝学習過程の研究として位置づけることのできる研究を……」とこころがけております。幸いにも，「読書科学」に発表される論文の多くが，このような方向性をもっているように感じております。このことに意を強くして，私も「読書科学」を発表の場とさせていただいております。

これまでの文章学習に関する研究には，再生や再認を理解のメジャーにしているものが多く見うけられます。これには理論構成上の必然性があるかと思います。しかし，教授＝学習過程の研究という枠組の中でこの種の研究をすすめていくためには，従属変数のメジャーも実際の教室場面に応用できるものでなければいけないと考えております。この点については，様々に工夫をしてきたつもりではおりますが，未だ試行錯誤の段階です。多くの方々の御批判・御指導をお願い申し上げます。

嶋路　和夫　第8回読書科学研究奨励賞受賞

私が読書科学研究奨励賞をいただいたのは，昭和49年ですから，もう7年前になります。受賞の対象になったのは，「長編文学の読書指導」に関する一連の論文でした。当時のこの研究は，今も私の読書指導の実践の強力な支柱になっています。

そのころは，学会誌「読書科学」には，現場の小・中学校の先生達の研究論文も多く，また，夏の研究大会にも，多くの小・中学校の先生達も参加され，質問討議も厳しいものがあったように思います。私も何回か発表させていただきましたが，鋭い質問を受けたこともありました。それだけに，参加した収穫が多々ありました。

ところが，最近は，小・中学校の現場からの論文や夏の研究大会への参加者が少ないように思われます。それには，いろいろな原因があるのでしょうが，何はともあれ，現場人の科学的研究に学ぶ姿勢が希薄だと思うのです。大学の先生方を中心とする科学的な研究は，確かにそのまま，あすの読書指導に使えるというものが少ないかもしれません。それを実践に結びつけるための再構成をするのが，私達現場人の腕の見せどころなのです。研究理論に学び，サイエンスに裏打ちされた実践を志向するべきなのです。このあたりの努力が，どうも不十分なようです。すぐに役立つようなインスタント的な報告を期待するから，「どうも，むずかしい研究だ」と敬遠しがちになるのです。

今後，「読書科学」などに掲載されている研究を実践に結びつけた実践論文（これも立派な研究論文だと思うのだが）が出てきてもよいのではと思うのです。今，こんなことを考えながら，「読書科学」を読んでいます。

高木　和子　第2回読書科学研究奨励賞受賞

私が読書科学研究奨励賞を受けたのは，1968年，大学を卒業して4年目の夏であった。卒業間際になってから学問への興味がでてきた私に多くの勉強の機会を与えて下さったのが，阪本一郎先生，敬彦先生をはじめとする読書学会の諸先生であった。学問の世界のきびしさも何もわからないままに，諸先輩のお手伝いでＩＲＡ関係の文献の紹介や，読書力テストの作成，実験計画の実施などの仕事に精一杯の努力を傾けていった。受賞の対象となった論文は，こうした中で阪本敬彦先生の御指導で野間研の仕事の一環としてなされたものである。当然論文も連名での発表であったから私一人が受賞する筋のものではなかった。しかし，諸先生方が奨励賞なのだから若い人にといわれて私がいただくことに決められたと聞いた。表彰されるなどということは小学校卒業以来なかったことなので，非常に緊張し，これからも頑張らねばと思ったことを記憶している。

現在の私は，幼児期における言語発達と認知発達との関連および，それらを支えている要因は何かを主な研究テーマとしている。このテーマ選択の発端は，奨励賞をいただいた前後の関心にある。つまり，何故，読書不振児ができるのか，そうした子どもを出さないようにするにはどうしたらよいのかを考えなくてはならないと思ったことが出発点となったのである。読書力を支える言語能力，そしてそれの基盤になっている認知の発達について解明していかねばならないと考えている。

あれから10年余がすぎた。心理学の分野においても，統計的処理による法則性の推定という枠を越えて，一人一人の子どものものの考え方や学習能力を支えているものは何かについての，きめ細かい分析によって真実に近づこうとする動きがでてきている。わが学会員が積みあげてきた，現実の子どもを直視した研究の成果が，学問の進歩に大きく寄与する時が来ているといえよう。

波多野完治　創立当時理事

読書科学が創刊されたころ，わたしは“放送教育”にこっていた。放送教育は，ラジオやテレビを教室にもちこみ，これらの媒体の力によって生徒の学力を増大しようという試みである。わたしは放送教育に凝っていたので，読書を放送教育によってのばすことができるのではないか，と考えた。そのころ，ラジオには，“名作をたずねて”という番組があり，小学校各学年ごとに，毎週一回名作というものをダイジエストして大体の筋がわかるように放送していた。もちろん名作のふんいきもいくらかつたえられるように工夫されている。なにしろ，毎週毎週名作を聞くということになると，各生徒は一年に二十編ぐらいの名作を知ることになる。（中には二回にわたるものがあり，それに夏休みが入るので，これ以上はできない）。一年間で20編としても，六年間では120編になる。この放送をきっかけにして，生徒に読書をさせるとしたら，相当に読書力がつくのではないか，というのが，わたしの構想であった。

このわたしの構想は，その後現場の実践者によってとりあげられ，ＮＨＫが毎年募集する放送教育実践記録としても，二つか三つ，大へんよい実践の記録がでてきたと記憶する。しかし，それはわたしの期待したような，全国的運動とはならなかった。また名作をたずねての放送担当者たちも，毎年同じものを放送化するのは，あきるらしく，現在では，現代作家のものをかなりたくさんまぜているようである。

“読書科学”は毎号たのしくよませていただいているが，わたしが特に注目したのは，“読書論”の系譜についての研究である。これはよいものであったが，おしいことに未完で立ちぎえになったのではないか。わたしは読書論を通じて日本人の読書哲学がつかめるとおもっているので，この研究の再開をのぞんでいる。

浜中　重信　第３回読書科学賞受賞

編集委員会の方から，読書科学賞を受けた頃の想い出をということですが，私の受賞は1969年で今から13年も前のこと，記憶も明確でありません。しかし，当時は最後のご奉公として大阪市立北天満小学校に在職していましたので，その頃の記録の中から想い出深いものを抜粋したいと思います。

その頃，学校は増改築の真最中で毎日騒然としておりました。図書館も書庫となり，図書を教室に備えて読ませるのが精一杯でした。私はそのころ「読書指導は国語の中で」と強調して，先生方にお願いしていました。

一方，読書指導はまず母親からと考えていましたので母親読書会に力を注いでいました。

この読書会は，私が赴任した1968年から退職する1972年まで続けました。会員は約70名であったが，単に読書についての話し合いだけではなく，校下の実情について知るよい機会ともなったので，学校経営にも大きな参考になりました。２年めには感想文集を編集してＰＲをかねて全ＰＴＡ会員に配布しました。その感想文の一部を紹介したいと思います。

私の序文「前略……子どもに読書させるためには，まず母親からと始めた読書会が，やがて母親自身の読書興味に発展し，生活を反省するための糧として生かされるようになりました。……後略」

一会員の感想文「前略。……子どもを通じて読書の大切さを知らされて生まれた読書母の会です。もし校長先生が来られなかったら恐らくこの会の誕生がなかったでしょう。まだ１年半の短い期間ではありますが，回を重ねるにしたがって一歩一歩向上するのを感じます。学校生活を終えて二十余年，読書から遠ざかっていた私たちほんとうに仕合せだと思います。……後略」

そして，私は今もなおこの人達とお付き合いをさせてもらって，この機会に恵まれた仕合せを感じています。

飛田　文雄　第5回読書科学研究奨励賞受賞

たぶん43年の春のころではなかったかと思いますが，読書指導の何かの集まりのとき，ぐうぜん阪本一郎先生のおとなりに座を占める光栄に浴しました。会食になって，ふと小生，先生に，前から考えていた日本の読書論史について，おうかがいしました。どなたがどんなふうにおやりになっているかということをです。どちらかというと，口の重くいらっしゃる先生ですが，そのときは，こんせつていねいに現状をお教えくださいました。要するに，まだまとまったものはないということでした。それをお聞きして，小生の心中に，なにかぼつぜんとしたものがわきました。

それから数か月たってからとおもいますが，先生から「読書科学」に載せてやるから，日本読書論史について書いてみないかというご指導をいただきました。

ゆうやくして最初にかかったのが，小泉信三の読書論でした。先生のお手もとにお送りしましたところ，同誌の43号・44号に連載してくださいました。ひきつづき書けとのおすすめにより，45号に亀井勝一郎，47・48合併号に小林秀雄，49・50合併号に三木清，56号に河合栄治郎の各論を載せていただきました。以下「読書科学」の編集のごつごうもあって，いまだに未完のままですが，46年8月の大会で，特に「読書科学研究奨励賞」を受賞いたしました。

先生のおすすめがなかったら，小論も日の目を見なかったであろうことをおもいますと，先生のお目のくばりかたに，今さらに畏敬の念を禁じえません。

先生のあとをついで，「読書科学」の編集にたずさわるかたがたも，ただ寄稿を待つだけでなく，しかるべき若い人々に，ねらいを定めて研究を要請し，その成果を発表するよう，積極的に指導ないしはたらきかけをしていただきたいと存じます。100号記念に一言呈します。

福沢　周亮　第11回読書科学賞受賞

読書学会という，この学際的な性格をもった，その意味でユニークな学会を，今後とも発展させていきたいと考えている一人として，いくつかの“案”を記してみたい。

1.　率直にいって“読書”学会は名称でかなり損をしている。国語教育界で「読解」と「読書」が分けて使われていることもあって，一般に，読書学会の守備範囲をかなり狭く考えてしまうようなのだ。従って，研究大会における主題やシンポジウムの内容，月例研究会の主題や内容，「読書科学」の内容などを，今までより更に広げる必要があると思う。そして，「読み」に関する幅広い学会であることを積極的に知らせる必要がある。

2.　今後ますます学際的な性格を強めるために，様々な分野の研究者や実践者を会員として迎えるようにしたい。現在は，国語教育・心理学・教育学の分野に属する会員が多いのであるが，社会学・文学・言語学・図書館学などからの参加を得るよう，入会を働きかける必要があると思う。

3.　「読書科学」に教育実践の記録を載せるため，その働きかけを積極的にしたい。ただし，その論文は，行われた実践の意図と記録の方法が明確で，記録が具体的なレベルで詳細にとられていることを条件とする。実践記録といっても，中途半端に抽象化されたものは，案外有効な情報にならないのだ。

4.　過去に何回かあったように，学会としてチームをつくり，プロジェクトを手掛けるのも一つの望ましい行き方であろう。ただし，チームといっても，集団で活動するのではなく，一人一人の活動が集約された結果チームになるような形態が望ましいように思う。

増田　信一　第12回読書科学研究奨励賞受賞

私がこの学会に入会したのは，昭和42年のことである。ちょうどその年，10年間勤めた公立学校から，現任校の国立附属校へ転じた。それまでも，読書指導についての実践や研究発表は続けていたのであるが，これを機会に，読書指導について，もっと詳しく研究したいものだと考えた。それからの10年間は，勤務校の研究集録に「国語科における読書指導」を読けて発表した。そして末尾に，それぞれの年の「読書指導文献リスト」を載せることにした。このリストは，7年間にわたって継続された。

毎年，文献リストを作成するためには，その年に発表された読書指導に関する研究物を集めて，丁寧に読んでいかなくてはならない。このつらい仕事を7年間も続けることができたのは，そのころ，この学会で，「○○年の読書界」という企画を立て，その読書指導の担当が私に与えられたためである。当学会を代表する著名な研究者にまじって，この役を果たしていくことは，光栄なことだと感じたし，一生懸命がんばった。そのおかげで，7年間も文献リストを続けることができたのである。

私は今年になって，『読書感想の指導』（学芸図書）を出版することができた。これも当学会の「読書科学」に少しずつ発表してきたものが中核となっている。この著書についても，この学会が私に与えてくれた恩恵は深いものがある。

最近になって，私は読書指導を「読書教育学」の域にまで高めなければならないと考えるようになった。児童や生徒に密着した指導だけでは学問と成り得ないし，教育現場から遊離した理論だけでも，学問とは成り得ないことを痛感しはじめたのである。読書教育学を建設するためにしなければならないことは，山のように待ちかまえている。現在私にできることから少しずつかたづけていこうと思っている。

松村　康平　創立当時理事

学会の創設は，創始ではあっても文化の伝承である。人脈の歴史を担うものではあっても，特定の個人か，親密な少数個人の，創唱による。そして，協調者，趣旨への賛同者たちをえて，組織化が起動する。私は，賛同者のひとりとして参加する機会をえた。それは，すでに読書科学に業績の顕著な波多野完治先生がおられる同じ大学（お茶の水女子大学）に私がいて，これは出身大学も所属もちがい専攻は同じ心理学でもそれぞれに独自の領域を開拓している大内茂男さんの，新生学会のはば広い展開を期待しての，推薦などがあって，だったろう。

学会初期の活動「読書による人格形成」の共同研究に参加して，はじめて研究を共にする研究者，現場の先生がたとの協力からは，新しい知見を学び，とくに，研究活動の場の特性に規定される研究内容の性質に，気づくことがあった。同名の著書（学会編）に，私は（川崎恵美との共同で）「童話の分析—現代日本の三大作家*の作品について—」を執筆している。*小川未明・坪田譲治・浜田広介

学会への参加は，読書科学への関心を高め，研究意欲を促進した。委員会（理事会）での会合では，いわば中堅にあって学びながら，参加の仕方は，他の研究者・委員とは異なる独自性が，研究の視点・研究方法において発揮できることに，自己納得のいく貢献の証を求める性質のもので，つくられていく主流を担うつもりはもとより，その資格を他から認められることへの期待はさらになく，しかもそのような参加の仕方は，学会の創設からなおしばらくは必要であると，自認していた。そして，「読書科学」誌への若干の寄稿，あるときの研究会で，「読書療法」について，関係理論・役割読技法を述べてからは，学会への参加の仕方を変えて，今日に至っている。その間に，「関係学研究」の創刊（1973），関係学会の創設をみ（1979），学際交流が今後に期待できる。

室伏　武　創立当時理事

学会の創立は，本来，阪本一郎・深川恒喜先生などが中心になって「読書による人間形成」をテーマとした研究会が生まれ文部省科学研究費による総合研究から端を発したものである。当時，学校図書館運動が全国的に燃え上がり，また読書に対する社会の関心が高まった時代を背景としていた。特に，この道の先達であった阪本一郎先生を中心とする読書指導の研究や，全国の国語教育や学校図書館の関係者にとって，読書と人間形成に対する理論的方法論的な解明が急がれていた時代であった。当時，アメリカにおける読書や読書指導の理論や方法の導入期を終り，わが国における独自の研究や実践が芽ばえはじめた頃であったと言える。

アメリカ，シカゴ大学のグレイなどの研究に刺戟され読書，読書心理学，読書生理学，読書社会学，読書教育などの領域にわたって，教育学，社会学，心理学，精神医学や図書館学などの関心のある方々がこの研究に参加した。今日で言うところの学際的研究を志向しようとしたものであった。そして，いくつかの研究がなされ，それなりの成果があったと評価できると言ってよい。その意気が盛んであった時代であった。

こうした状況の中で，この研究会が母体となって日本読書学会という名称に改組し，阪本一郎先生をその中心として発足することになった。学会とすることは，一部の方々の意見で決められたものであり研究会といった考え方が基本であったと記憶している。第1回の創立総会は，石山脩平先生を会長，阪本一郎先生を副会長として東京教育大学附属小学校の大講堂で行なわれ，講堂が溢れるばかりの盛会であった。年を経るに従って低調になり今日に至っている。ある意味では，華やかな発足に対して真に読書を学ぶ人たちの地道なものであり，本当の姿であるかも知れない。

山田　純　第14回読書科学研究奨励賞受賞

読書科学研究を生涯の仕事にしようと決意したのは，1976年頃，わずか5年前であり，まだまだ勉強不足の新参者(new comer)である。当時，新参者として，読書科学が何故そんなにも魅力的かと尋ねられたなら，何となくやりがいのある仕事であるとしか答えられなかった。D. LaBerge and S. J. Samuels, "Toward a theory of automatic information processing in reading," *Cognitive Psychology*, 1974, **6** は，"The complexity of the comprehension operation appears to be as enormous as that of thinking in general" と述べているが，無限に拡がる reading comprehension の複雑性が人の心を惹きつけるのかもしれない。しかし，もうひとつに，読書教育の重要性があると思う。専門家であれ，素人であれ，読書教育の重要性を否定する者はいないであろう。時代が時代であるためかもしれない。P. Weaver and L. Resnick (*Theory and practice of early reading*, LEA, 1979, p. 1) は20世紀ほど読書教育が多くの人々の関心を集めた時代はないと述べている。

このような状況の中で，わが国の読書科学研究の一分野として読書教育学の樹立にも力を注ぐべきだと思う。D. Durkin, "What classroom observations reveal about reading comprehension instruction," *RRQ*, 1978-79, **14** と K. S. Goodman and F. V. Gollasch, "Word omissions: Deliberate and non-deliberate," *RRQ*, 1980, **16** とが最近，筆者の目を引いたが，前者は，学校で読みを「教える」ことが実際にはどのようなことをすることを指しているのかを，後者は，子どもがどのように「読む」かを，それぞれ具体的に示してくれる。そのような研究からも読みの核心にふれる理論が生まれると思う。多変量解析をするだけが研究ではない。わが国でも，上記のような基礎的研究が強く望まれる。それは，われわれ学会員の双肩にかかっていると言うべきであろう。

首藤　久義　第11回読書科学研究奨励賞受賞

「提言」というテーマをいただきましたが，「提言」というほどのことはできません。ひとこと述べさせていただきます。

読書科学研究奨励賞をいただいて，私は力づけられること多大でありました。これからも若い芽が伸びるのを奨励するために，この賞が，できるだけ多くの人に贈られるよう願います。

むこう見ずで，がむしゃらに模索している人々が，孤立するのではなく，たがいに顔を合わせ，議論をたたかわせながらワアワアやる中から，何か突拍子もない研究の進展が起こるのではないかと思います。外国の人をも含めて，未熟な若々しさが交流し合える場がもたれることが，この学会では可能ではないでしょうか。

私自身は未熟なひとりとして暗中模索しております。

村石　昭三　創立当時理事

学会創立世話人19名の中に佐藤泰正（筑波大）と私の名がある。一流学者にまじって若輩の私どもが入っているのが当の私にも，また今もっていよいよ不思議に思われる。もっとも，私は国語研究所に入って，草島時介先生の眼球運動測定のお手伝いをし，読みの研究に興味を持ち始めた矢先だったから，阪本一郎先生の学会へのお誘いには責任も何も考えずに，お願いしますと申しあげたのだろう。

で，本当は，若輩の私どもは学会の小間使い，走り使いの実務を受け持つためだったのだろうが，ほとんどそれはせずに過ぎた。というのも，朝日新聞広告部の桶本さんがそんな実務雑務を研究会場も何も一手にひき受けて処理してくれたからである。お蔭で学会創立までの準備的研究会にも参加できた。このことを懐しく思う。

日本読書学会会則（1981 年 7 月改正）

第１章　名称と事務所

第１条　本会は日本読書学会と称する。

第２条　本会の事務局は当分の間財団法人野間教育研究所内に置く。

第２章　目的と事業

第３条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2. 会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3. 会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4. 読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
5. 内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6. 会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7. 会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第３章　組織と運営

第５条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第６条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第７条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1. 会　　長　　1　名
2. 副 会 長　　1　名
3. 常任理事　　若干名
4. 理　　事　　若干名
5. 監　　事　　2　名

第８条　理事及び監事は，正会員が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前記の互選によるもののほか，正会員の内若干名を指名して，理事に加えることができる。

第９条　理事は理事会を構成し，本会の事業執行の責任を負う。

第10条　副理事長は理事の互選により選出し，理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し，会長事故あるときは，その職務を代行する。

第11条　常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前項の互選によるもののほか，理事の内２名に限り指名して，理事会の承認を経て，常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長，副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ，本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は，本会の会計を監査する。

第13条　役員の任期は２年とし，原則として互選の年の４月１日から翌々年の３月31日までとする。

第14条　本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条　本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

1. 事務局長　　1　名
2. 書　　記　　若干名

事務局職員に関する規定は別に定める。

第16条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第４章　会　　計

第17条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条　会費は当分の間年額5,500円とし，毎年３月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条　本会の会計年度は毎年４月１日より始まり翌年３月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第５章　雑　　則

第20条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

Vol. 26, No. 2 July, 1982

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: Eikichi Kurasawa **President-elect**: Takahiko Sakamoto

EDITORS

Sunao Ohara Takahiko Sakamoto Junichi Tajika Junya Noji
Shusuke Fukuzawa Shinichi Masuda Shozo Muraishi
John Downing Donald Leton

CONTENTS

Part 1 On the Occasion of the 100th Anniversary Issue of "The Science of Reading"

On the occasion of the 100th anniversary issue of "The Science of Reading"……*SAKAMOTO, Ichiro*……42
Reminiscences of a quarter century ……*NAMEKAWA, Michio*……46
Thoughts on reading and reading guidance : The mid 1970s ……*KURASAWA, Eikichi*……51
The Japan Reading Association : Its start and progress…*MOCHIZUKI, Hisataka*……56
Twenty-five years of reading research : The early years and my term as president ……*OKAMOTO, Keiroku*……61

Part 2 A Quarter Century of Reading Research : A Compilation of Selected Papers from "The Science of Reading," 1956-1982

Forward ……67
(Ⅰ) Reading theories and the guidance of reading……*MASUDA, Shinichi*……68
(Ⅱ) Literary research and theories of educational materials ……*IZUMOJI, Takeshi*……77
(Ⅲ) Psychological research, Nos. 1-50 ……*SAKAMOTO, Takahiko*……85
(Ⅳ) Psychological research, Nos. 51-99 ……*FUKUZAWA, Shusuke*……91

Part 3 Reminiscences and Proposals……103

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined-number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Noma-ken, 2-12-21 Otowa, Bunkyo, Tokyo, Japan.

第26巻 第2号

<通巻 第100号>

昭和57年7月1日 発行

会員頒布

編 集 日本読書学会編集委員会
発 行 人 阪 本 一 郎
発 行 所 日 本 読 書 学 会
〒112 東京都文京区音羽2—12—21 野間教育研究所内
振替東京6-3213番

印刷・第一印刷株式会社